

Review of Asian and Pacific Studies

2022

アジア太平洋研究

No. 47

[2021 年度 アジア太平洋研究センター主催企画より]

平成の宰相たち—指導者—六人の肖像— 渡邊 昭夫
秋山 訓子
宮城 大蔵
高安 健将

気候安全保障—気候危機と向き合う今日的視点— 稲田 信司

岐路に立つブラジルの民主主義

—ボルソナーロ政権下のコロナ禍と政治的危機— 岡田 玄

[パイロット研究報告]

ハイウェイの記憶—ルート66のアメリカ— 宮脇 俊文

アジア地域の空調機用PMSMドライブ向けAC-AC 変換器の研究 前川 佐理

[投稿論文]

在日コリアンの就学遍歴とヘイトスピーチへの態度形成

—朝鮮学校における差別対抗的なアイデンティティ— 鄭 康烈

『アジア太平洋研究』

Review of Asian and Pacific Studies

投稿案内

編集方針

『アジア太平洋研究』は、日本・北米を含むアジア・太平洋地域に関する問題や政策課題の理論的、経験的研究を促進するために、これらの領域に関する研究論文の投稿を歓迎する。本誌は多分野を扱うことによってそれぞれの専門研究の充実を図るとともに、異分野の研究者間の交流促進に寄与することも狙いとする。

投稿規程

1. 論文は和文または英文に限定する。和文の場合、用紙はA4判、11ポイントの書体を用い、1行を39文字、1ページを39～40行とし、図表込みで15ページ以上20ページを限度とする。英文の場合、図表込みでダブルスペースA4判40枚（10,000語）程度とする。また論文には英文のアブストラクト（300語程度）をつけるものとする。原稿の提出方法は、印刷した完成原稿を郵送し、あわせてその電子データを電子メールの添付ファイルで送信する。
2. 投稿された論文は原則として複数のレフリーの審査を受ける。採用・不採用にかかわらず、投稿原稿は返却しない。
3. 投稿の書式などの詳細はセンターに直接問い合わせるか、公式ウェブサイト（<https://www.seikei.ac.jp/university/caps/publication/info.html>）を参照されたい。

編集委員会

委員長：高安 健将

委員：永野 護、清見 礼、中野 由美子、藤井 樹也、小松 寛

編集事務局：寺西 浩、寺西 朋子、横山 未美子、小笹 有理、青木 貴保

2022年12月発行

発行所 成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1
TEL: 0422-37-3549 FAX: 0422-37-3866
E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp
発行者 成蹊大学アジア太平洋研究センター
『アジア太平洋研究』編集委員会
印刷所 株式会社 芳文社
〒194-0037 東京都町田市木曽西 2-3-14

目 次

[2021 年度 アジア太平洋研究センター主催企画より]

平成の宰相たち―指導者―六人の肖像―	渡邊 昭夫 (1)
	秋山 訓子
	宮城 大蔵
	高安 健将

気候安全保障―気候危機と向き合う今日的視点―	稲田 信司 (21)
------------------------------	------------

岐路に立つブラジルの民主主義

―ボルソナーロ政権下のコロナ禍と政治的危機―	岡田 玄 (29)
------------------------------	-----------

[パイロット研究報告]

ハイウェイの記憶―ルート66のアメリカ―	宮脇 俊文 (37)
----------------------------	------------

アジア地域の空調機用PMSMドライブ向けAC-AC変換器の研究

.....	前川 佐理 (59)
-------	------------

[投稿論文]

在日コリアンの就学遍歴とヘイトスピーチへの態度形成

―朝鮮学校における差別対抗的なアイデンティティ―	鄭 康烈 (73)
--------------------------------	-----------

Review of Asian and Pacific Studies

No. 47

2022

CONTENTS

[Special Issue]

Japanese Prime Ministers of the Heisei Era:

Portraits of the 16 Leaders	Akio Watanabe (1)
	Noriko Akiyama
	Taizo Miyagi
	Kensuke Takayasu

Climate Security: Perspectives on Confronting the Climate Crisis	Shinji Inada (21)
--	-------------------

Brazilian Democracy at a Crossroads:

Covid-19 and the Political Crisis under Bolsonaro Administration	Gen Okada (29)
--	----------------

[Pilot Project Reports]

What the Highway Remembers: Route 66 and America	Toshifumi Miyawaki (37)
--	-------------------------

Study of AC-AC converter for PMSM drives for air conditioners in Asia	Sari Maekawa (59)
--	-------------------

[Peer-reviewed Article]

School Experience of Zainichi Korean and Attitudes toward Hate Speech:

The Collective Identity against Racism Formed in <i>Joseon-School</i>	Kangryol Chung (73)
--	---------------------

平成の宰相たち —指導者一六人の肖像—

Japanese Prime Ministers of the Heisei Era: Portraits of the 16 Leaders

渡邊 昭夫*, 秋山 訓子**, 宮城 大蔵***, 高安 健将****
Akio Watanabe*, Noriko Akiyama**, Taizo Miyagi***, Kensuke Takayasu****

Abstract

This article is a record of lectures on Japanese prime ministers who appeared in the approximately 30 years of the Heisei era. First, Akio Watanabe amongst other prime ministers, mainly discussed Kiichi Miyazawa, comparing him with Hayato Ikeda and Masayoshi Ohira. Next, Noriko Akiyama talked about her observations on the personalities of Ryutaro Hashimoto, Keizo Obuchi, Junichiro Koizumi, Yoshihiko Noda and, Shinzo Abe, based on her interviews with these leaders. Taizo Miyagi discussed the characteristics of Heisei era in the context of Japanese political history and international relations over the Asia-Pacific region.

I. 趣旨説明（高安健将）

本日のテーマは『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』です。これは1989年に始まり2019年まで続いた平成という元号を持つ時代が終わったことを受けて、この時代を振り返り、これから先の時代を見通すヒントを得ようとする企画です。もちろん短い時間ですので、16人全員について話をすることはできないと思います。あくまで16人の首相が格闘した時代と、その中の何人かのかたがたを中心的に取り上げることになると思います。

ところで、平成という時代を世界史的に見ると、米ソを頂点とする東西冷戦という枠組みが崩れ、核戦争の瀬戸際にいる緊張状態が緩和し、資本主義と自由民主主義が世界大に広がるかに見えたところから始まりました。しかし、実際には核は拡散を続け、軍事的な衝突はやまず、近年は世界大のテロリズムに加え、大国間の緊張も体制的な違いを強調して、再び抜き差しならない

* 東京大学・青山学院大学名誉教授、平和・安全保障研究所顧問 Professor Emeritus, University of Tokyo and Aoyama Gakuin University, Adviser, Research Institute for Peace and Security

** 朝日新聞編集委員 Editorial Board Member, Asahi Shimbun

*** 上智大学総合グローバル学部教授 Faculty of Global Studies, Sophia University

**** 成蹊大学法学部・アジア太平洋研究センター所長 Faculty of Law, Director of CAPS, Seikei University

ところに差し掛かっています。冷戦後の新しい国際秩序は30年を経ても見えてきません。

国内では、それまで絶好調であった日本経済が暗転し、バブルの後遺症も続きました。市場の在り方、企業の在り方は変わり、新しい業態、新しい企業も登場する一方で、日本は30年を経てなお、グローバルな競争の中で力強い次世代の産業や経済について、かつてほどには新しい姿を生み出すまでには至っていないように見えます。

この間で社会の在り方も変わり、風通しが良くなった面もある一方で不安定性は増し、従来あった家族や地域、会社等といったよりどころが弱まり、その代わりとなるよりどころも登場しているとはなかなか言えません。少子化の流れは欧州等では政策的な帰結として、変化の兆しが見ることができるのに対して、日本では少子化は続いており、人口減少までが現実のものです。ジェンダーや家族の多様性について言えば、社会的な理解が進んだ面もありますが、多様な人々がダイナミックな社会をつくり出すべく、指導的な立場に立つという姿は、まだこれからの楽しみとなっています。

他方で、この30年で日本政治の在り方は大きく変わりました。やはり自民党が政治の中心に位置しているという共通点はある一方で、自民党はかつてのそれとは大きく異なるものとなりました。登場してくる指導者たちも変わりました。特に政治改革が日本政治にもたらした意味は大きかったように思います。政治改革は政治腐敗を払拭し、強いリーダーシップを発揮できるようにするべく、政党中心の政治、政策中心の政治を目指した日本版の民主化改革でした。

政治改革運動が始まって30年以上がたちましたが、集権的な権力がつくり出される一方で、先に申し上げた課題に対して、効果的な政策がそこから生み出されている印象について、今日はなかなか持つことができずにいます。プレーキ役として決定的な重要性を持つと考えられていた政党間競争は、機能を発揮できない状況に置かれたままです。政治改革はリーダーシップの発揮を期待したリーダーの資質についても楽観的であったのかもしれませんが。

その一方で、民主的に選出された政治家が、自らに過度な価値を置くようになった印象も受ける気がします。ただ、既に決まってしまった、変化の利かない状況とは異なり、今日の日本の政治、経済、社会が置かれた環境はまさに流動的です。指導者たちが果たす役割は平成の時代の30年にも増して、恐らく一層、重要性を持つてくるように思います。私たちの社会がどのような環境に置かれてきたのか、そうした環境の中を生き抜く上で日本政治がどのような指導者たちを輩出してきたのか、本日の講演会ではさまざまな角度から考える機会にできればと願っています。

さて、本日の講演をお願いしている講師の皆さまについて紹介します。実はこの講演会のタイトルと同じ『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』と題する書籍が、2021年3月にミネルヴァ書房より出版されています。本日の講演会はこの書籍をモチーフとしており、登壇いただく3人のうち、研究者の2人は関係する書籍の編者を務めています。

初めに、東京大学ならびに青山学院大学名誉教授の渡邊昭夫先生です。国際関係論、日本政治外交論の大家でいらっしゃる渡邊先生は、これまでに多くの研究を発表されています。『日本の近代8 大国日本の揺らぎ—1972—』、『アジア・太平洋の国際関係と日本』という研究の他に多くの編著があり、その一つが今回出版された『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』の親とも言うべき『戦後日本の宰相たち』です。また、渡邊先生は当センターとは古くからのご縁があります。1988年に当センター発行のアジア太平洋研究叢書第1巻『太平洋国家オーストラリア』を当センター初代所長でいらした故川口浩先生と共に、編者を務めてくださいました。分野における、本当の意味でのレジェンドである渡邊先生に参加いただくことができ、大変にありがたく思っています。

続いて、朝日新聞編集委員の秋山訓子さんです。秋山さんは朝日新聞入社後、特に政治部にお

いて、日本の政治指導者たちに対して、第一線で長く直に取材してこられたキャリアを持つ政治記者です。先日、私があるラジオ番組で一緒したときに、菅義偉首相が衆議院で初当選した頃の非常にスリリングなエピソードを伺いました。これはぜひ他の首相たちについても、当センターで視聴者の皆さまと一緒に話を伺いたいと思った次第です。現在も日々、紙面で秋山さんの記事を読むことができます。著書も多く『女は「政治」に向かないの?』、『不思議の国会・政界用語ノート』等があります。昨年は『コー

ヒーを味わうように民主主義をつくりこむ』を出版しています。本日は身近でご覧になった指導者たちの生の実像から、日本政治の変化をうかがえることを楽しみにしています。お願いします。

そして、上智大学総合グローバル学部教授の宮城大蔵先生です。宮城先生はアジア国際政治史を専門としており、NHK記者から研究者に転じられた経歴を持っています。現在、日本の国際政治史の分野をリードされる中心的な研究者です。著書には『バンドン会議と日本のアジア復帰』、『「海洋国家」日本の戦後史』、『現代日本外交史』等があり、『戦後アジア秩序の模索と日本―「海のアジア」の戦後史1957－1966』ではサントリー学芸賞等を受賞されています。編者を務めた書籍も多く、『戦後日本のアジア外交』では「国際開発研究 大来賞」を受けられています。そして、最新の編著が3月に出版された『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』です。皆さま、本日はお願いします。



配信映像より

(左上) 渡邊昭夫名誉教授 (右上) 宮城大蔵教授
(左下) 秋山訓子氏 (右下) 高安健将所長

Ⅱ. 戦後史の中の平成―時代と人と（渡邊昭夫）

最初に、私は今ご紹介があった成蹊大学の、目と鼻の先にある武蔵野第四小学校、当時は国民学校と申しましたが、そこに小学生の5年生から6年生にかけて通い、暮らしたことがあるという意味でも、皆さんがたと縁がある人間です。

高安所長から平成の時代についていろいろと話がありましたが、私は戦後史の中の平成と捉えて、紹介にあった『戦後日本の宰相たち』という私が編さんした本、それから後に登壇いただく宮城さんが編さんされた『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』、この2冊の本を念頭に置きながら話を進めたいと思います。そこで平成30年はどういう時代であったのかについて、簡単な略年表を用意したのでご覧ください。それぞれの事件を皆さんと共有しているとそれだけで時間がたってしまうため、略年表をご覧ください、どういう時代であったのかについて、それぞれの観点から頭の中に入れて以下の話を聞いてください。

私はある意味で平成の30年とは、平成という名前にもかかわらず、非常に流動的な時代であったと言えらると思います。例のベルリンの壁が崩壊したことに象徴されるような冷戦の終焉でした。それから9月11日の事件、国内では3月11日の大地震等、さまざまな大きな変動があった時代です。客観的にこの時代のそういう情勢に着目すれば、流動の時代でした。その中で、指導者をはじめとして、われわれがどのように取り組んできたのかという主体の努力の点か

ら見れば、模索の時代と言えると思います。果たして流動の時代だったと特徴づけるのか、あるいは模索の時代と見るのかについては、皆さんといろいろな情報を共有した上で、またあらためて考えてみたいと思います。

私がなぜ宰相たちという言葉を使うのかについて少し話します。要するに、総理大臣や首相です。変なもので総理大臣や首相は聞き慣れた言葉であり、何となく軽く見えるために多少は重みをつけたいという意味で、あえて宰相という古い中国語を使ったのは、われわれの中では日本の指導者たちに少しでも立派であっていただきたいという期待を込めて、宰相というややもったいぶった名前を付けています。そういうことで日本の指導者、総理大臣、首相を主に取り上げていきます。

最初に模索の時代だと申し上げました。考えてみると、必ずしも模索の時代は平成だけの特徴ではなくて、戦後日本をずっと貫く一つの見方だと思います。そのことを代表するのが宮澤喜一という人だと思います。これは今度の宮城大蔵先生が編さんされた本の中でも、現在と平成の時代とのつなぎの章で、宮澤喜一さんが登場します。より本格的なことは、私の編さんした『戦後日本の宰相たち』の中で、五十嵐武士さんが1章を割いて書いています。

宮澤喜一がどういう人であったのかについて、私は戦後日本を考える上で非常に意味のあることだと思います。というのは、宮澤喜一さんは若い頃に吉田茂さんの部下として、あるいは吉田茂首相に付いていった池田勇人さんの補佐役としてワシントンにいました。そして『東京－ワシントンの密談』という本を書きました。どこかで「考えてみると、これからの20年ほどの日本は綱渡りの時代です」と言われました。綱渡りとは、どのように均衡を取っていくかだと思います。その中で当時の張り合っていたアメリカとソビエト連邦という二つの大国間のはざまで、どのように生きていくかという意味ももちろんあると思います。より直接的には、国内政治で55年体制と呼ばれた流れです。非常に微妙な保守政党と革新政党との間の引っ張り合いです。その間のはざまでどのように日本の進路を定めていくか、そういうことを生涯のテーマとして生きた方が宮澤喜一さんだと思います。

実は、私は宮澤さんと縁があります。1986年3月号の『中央公論』という雑誌で、宮澤さんと私が対談した記事が残っています。残念ながら私の手元にないので、それを読み返す時間がありませんでした。それは「継承すべきわが原点」というタイトルになっています。そこで綱渡りをしながら、どのように原点を追求して継承しよ

平成30年史－略年表

- 1989 (平成1) 消費税3%、APEC発足、天安門事件、ベルリンの壁、竹下・Bush、日米構造協議、冷戦の終焉(マルタ会議)
- 1990 (平成2) バブル崩壊、東西ドイツ統一
- 1991 (平成3) 湾岸戦争
- 1992 (平成4) PKO協力法、カンボジアへPKO、ODA大綱、EU発足、マーストリヒト条約
- 1993 (平成5) 細川内閣、「日本改造計画」(小沢一郎)、北朝鮮NPT脱退、日米包括協定
- 1994 (平成6) 小選挙区制、横綱レポート
- 1995 (平成7) 阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、村山談話、APEC VII(大阪)、新防衛大綱
- 1996 (平成8) 橋本・クリントン会談(日米安保共同宣言)、民主党結成
- 1997 (平成9) 消費税5%、京都議定書、アジア通貨危機、日米防衛ガイドライン、周辺事態
- 1998 (平成10) 長野オリンピック、宮澤構想、江澤民来日、NATOコンボ空爆

平成30年史－略年表

- 1999 (平成11) 東海村臨界事故、北朝鮮ミサイル、ユーロ導入
- 2000 (平成12) 小泉訪朝
- 2001 (平成13) 同時多発テロ(9・11)
- 2002 (平成14) 第2回小泉訪朝、ワールドカップ日韓共同主催
- 2003 (平成15) 自衛隊イラク派遣、ODA大綱改定
- 2004 (平成16) 国連安保理改革のG4
- 2005 (平成17) ロンドン多発テロ(7月7日)
- 2006 (平成18) 北朝鮮核実験、安倍訪中、麻生外相「自由と繁栄の弧」
- 2007 (平成19) 防衛庁→防衛省
- 2008 (平成20) リーマンズ・ショック、北京オリンピック、第1回日中韓首脳会議(福岡)

平成30年史－略年表

- 2009 (平成21) 政権交替(鳩山政権)、オバマ政権
- 2010 (平成22) 動的防衛力
- 2011 (平成23) 東日本大震災(3・11)、アラブの春
- 2012 (平成24) 第2次安倍政権、尖閣諸島問題で日中緊張
- 2013 (平成25) 特定秘密保護法
- 2014 (平成26) 消費税8%、IS
- 2015 (平成27) パリ同時多発テロ、安保法制(施行は翌年3月29日)
- 2016 (平成28) 伊勢志摩サミット、Brexit、熊本地震、日銀マイナス金利
- 2017 (平成29) トランプ政権、ノーベル文学賞(イシグロ・カズオ)
- 2018 (平成30) 平昌オリンピック、米朝会談、台風21号関空を襲う、北海道胆振地震、安倍vs石破
降る雪や明治は遠くなりにけり 草田男
平成も終わりに近し去来今年 土曜
- 2021 (令和3) covid-19のパンデミック化

prepared by Akio Watanabe, 2018.9.18 & 2021.6.20

うとしたのかについてです。そういうことで、宮澤さんは最後まで非常に二つの引張り合いの中で、どのように均衡を保っていけばいいかを生涯のテーマとして生きられた方だと思います。

時間がないので、『戦後日本の宰相たち』の中にある五十嵐さんの書かれた宮澤喜一の章に関心のある方は後で読んでください。そこで非常に面白いこと言っています。渋沢栄一編の『昔夢会筆記』を挙げていますが、今、渋沢さんはさまざまな意味で注目の人物だと思います。ご承知のように、渋沢さんが農民から武士の世界である政治の世界に入っていくときに、当時はまだ最後の将軍になる前の一橋家に仕えるようになりました。そこで徳川慶喜さんの晩年に『昔夢会筆記』です。今風に言うと、オーラルヒストリー的なものです。元将軍の徳川慶喜さんに身近なかがたがた集まって、あの時はどうだった、こうだったということ色々と思い出していただき、それを記録に残したものが『昔夢会筆記』という本です。

その中で徳川慶喜さんはさまざまなことを言っています。有名な井伊直弼という人物については、「断には富みたれども、智には乏しき人なりき」と言われています。

大方の宮澤喜一像は、ある意味でその逆であったかもしれません。つまり、知には非常に乏しいどころか、先ほどの綱渡りうんぬんの言葉にも表れているとおり、日本の歴史を広く見渡して考えている人であるため、総理大臣として非常に期待された人物ですが、総理大臣になってからあるいは政治指導者になってからの宮澤さんは、もうひとつ、こうであるという決然たる態度がとれず、最後まで綱渡りをした人だったと思います。そういう意味では、模索の時代を象徴する人物が宮澤喜一さんだったと思います。

ご承知の方も多いと思いますが、宮澤さんは大平正芳さんという人と一緒に側近として、池田勇人をサポートしたことで有名です。池田さんの所得倍增論では別の補佐役がいたと思いますが、池田内閣の基本的な姿勢として、寛容と忍耐を演出したのが宮澤さんと大平さんです。そういう意味では、大平さんと宮澤さんは非常に縁の深い方ですが、お互いにじっくりいかなかったようです。私個人は大平さんに接する機会がより多く、宮澤さんとは先ほど申したような形でしか話をすることがありません。とにかく、そういう人物です。

平成の時代に入ります。『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』となっています。その中で、私が今度の宮城さんの本を読み、非常に印象付けられた2人の人物がいます。1人は橋本龍太郎、もう1人が安倍晋三という方です。橋本龍太郎さんと安倍晋三さんは、それぞれ決然たる考えが

成蹊大学CAPS講演会—平成の宰相たち

0. 私と吉祥寺

1. 時代論—「激動」の30年？ or 「模索」の30年？
「激動」論は客観情勢
「模索」論は主体の姿勢→失われた30年？

成蹊大学CAPS講演会—平成の宰相たち

2. 人物論—「首相」でなく「宰相」とは？

- ① 宮澤喜一→ ←徳川慶喜
渋沢栄一編『昔夢会筆記』東洋文庫
→慶喜の井伊直弼評「断には富みたれど、智には乏しき人なりき」
大方の宮澤喜一評はその逆か。
宮澤曰く「今後20年ほど、日本は一種の「綱渡り」云々
何と何の間のバランスか？
Cf. [中央公論] (1986.3) でのインタビュー[継承すべきが原点]
「戦後日本の宰相たち」所収の五十嵐武士稿「宮澤喜一」

成蹊大学CAPS講演会—平成の宰相たち

- ② 大平正芳 環太平洋協力→APEC
③ 池田勇人 日米欧の3本柱
④ 橋本龍太郎
⑤ 安倍晋三 幼児の安倍晋三、大学生の安倍晋三
保守、右翼？ ←安保改定の岸信介と安保法制の安倍晋三

あり、日本を引っ張っていった代表的な指導者だったと思います。

先ほど高安さんから話があったように、橋本龍太郎さんは新しい時代の、政治の枠組みをつくる上で、非常に根本的な仕事をされた方であると思います。残念ながら、私は橋本さんと面識はございませんが、ある公の席で橋本さんの演説を聞いて、大変に力強いリーダーという印象を持っています。安倍晋三さんについてはご承知の方も多いと思います。成蹊大学の出身であり岸信介さんの孫です。これは笑い話ですが、日米安全保障条約改定の頃、街頭では反対運動がありました。『岸信介伝』の中では、おじいさんをウマにして、幼児の頃の幼い安倍晋三さんが「安保反対」と言ったので、お母さんから「安保賛成と言いなさい」と言われたようです。

ところで、大学生になってからの安倍晋三さんについてはよく存じませんが、当時、成蹊大学で教えたある先生によると、大学生としての安倍晋三さんは、それほど印象に残る学生ではなかったと言っています。いつからあのような考え方を持つようになったのかについては、後で秋山さんや他の方から紹介があると思います。ご承知のように、安全保障条約改定の岸信介と安全保障法制の安倍晋三さんが、ある意味で比較の対象になると思います。安倍晋三さんの有名な言葉として「日本を取り戻す」、それから「戦後政治の総決算」と言われているので、先ほど申し上げた宮澤さんの右隅から左隅という危ない綱渡りの中では、非常に決然として日本を取り戻すことに重点を置いて政治を考えた方だと思います。

そういう安倍さんを保守的である、右翼であるという評価もありますが、私はあまりそういう言葉は適当ではないと思っています。戦後日本の宮澤喜一さんと、『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』の中の安倍晋三さんを比べながら二つの時代を考えてみるのも、われわれの今後の生き方を考える上で、一つの参考になると考えています。

宮澤さんを含めた宏池会の人たちというのはいわゆる政策通ですね。決断の人というよりも、政策の人ということです。そして宮澤さんという人は、決断できなかった人だと思います。文字通り模索をして、結局、最後まで行けなかった人。いろんな物事をよく分かった人だけでも、もうひとつ決断力に欠けていたという評は、私は大筋としては当たっているのではないかと思います。なぜ宮澤さんがそういうふうに、いわば模索の一生を尽くしたのかっていうのは、戦後日本というものがまさに置かれていた状況のせいだと私は思います。

一方、決断といえば、岸信介なり、安倍晋三さんに至る清和会の系統です。そういうふうになると、安倍晋三さんという人は、宮澤さんが危うい綱渡りをした中でぐっと日本という側に力点を置いた。そういう意味の決断をしたという人だと思います。なぜそうなったかということは、いわば時代のなせる業だと思っています。それが狭い意味での戦後と、その後の平成との違いであり、それは日本自身の置かれた地位というものの、国際的な地位ということがやっぱり変わってきたのだらうと思います。

そういう日本の地位の変化ということをもたらししたのは、やや強引に言うとも、大平さんの時代に始まっています。私は大平さんの時、アジア太平洋、環太平洋協力などいろいろな呼び方がありますけど、そういうテーマで幾つかの研究会に参画しました。そのことが具体的になって、アジア太平洋のAPEC（アジア太平洋経済協力）と今日のTPP（環太平洋パートナーシップ）につながっていく動きが始まったわけです。別に大平さんがそういう言い方なされたわけではないけれども、アジアをバックにした日本という一つの柱があるということ、具体的に政策課題として取り上げて追求なさったのが私は大平さんだと考えて、その大平さんのために多少のお手伝いをしたという経験がある。まさにアジア太平洋というのはそこから来ているわけですね。

そうすると、なぜアジア太平洋が、今、インド太平洋になったのか。そして、QUADという日米豪印の4本柱のきっかけをつくったのは安倍さんなのであって、そうすると、そのもとにな

るのはやはりアジアにおける日本の立場をしっかりと据えるという前提があって初めて、安倍さんの今の立場が出てきたと私は理解しております。取りあえず、以上でございます。

Ⅲ. 平成の宰相たち－間近に接した首相の素顔（秋山訓子）

本日はお招きいただきありがとうございます。私は「平成の宰相たち－間近に接した首相の素顔」というタイトルで話します。先ほど渡邊先生から宰相という言葉をあえて使っていると話がありました。私のプレゼンテーションでは首相という言葉を使います。私が本日の話をさせていただく中で唯一のジャーナリストですので、できるだけミクロに迫った、私が直接あるいは間接的に接した首相たちの言葉や素顔を紹介したいと思います。そういう身近な感じで、あえて首相という言葉を使わせていただきました。

私の経歴を簡単に紹介します。1992年に朝日新聞に入りました。1998年から政治部で取材しています。その後は経済部やAERA編集部、あるいはGLOBE編集部での経験はありますが、基本的に政治を私のフィールドとしています。特に専門は国内政治です。あるいは最近ようやくフォーカスされるようになってきた多様性やNPOも私のフィールドで、最近では、選択的夫婦別姓あるいはLGBTQなどを取材しています。ようやく政権与党が目を向けるようになったので、そういう記事も書いています。

国内政治での自分のテーマは政局やリーダー論です。人に焦点を当てた政治取材も自分の軸としています。これは権力闘争が中心です。政治は数をどれだけ増やして、力を握って自分の取り組みたいこと、自分の目指す国づくりをしていくことだと思います。そういう権力闘争という局面で、少し大げさに申し上げますが、人間とは一体、何だろうか、人間性とは一体、何だろうかと考えさせられる場面が多いです。また後ほど申し上げますが、平成から令和に至る政治の中では、リーダー像がどういうものなのかがとても問われた政治だと思っています。そういうリーダー像、政治家の人間像もフィールドにしています。

私は1998年から政治部に所属していると申し上げましたが、政治部で新人は最初で総理番をします。朝から晩まで総理の後を追いかけて回して、どこで誰と会って何を話したのかということを記事にします。朝日新聞では「首相動静」、他の新聞だと「首相の一日」などで、朝の何時に公邸から官邸に入り、誰に何時に会うようなことが載っていますが、それをしているのが総理番です。これは物理的に本当に首相に近い所で取材して、くっついていきます。そういう意味で、首相の素顔を一番よく知る立場だと思います。

幸いに私は2人の総理番をしました。その後、自民党担当になり、再び官邸担当、民主党担当、外務省担当などもして今に至っています。本日は特に5人の首相に焦

自己紹介、
そして今日
お話すること

1998年から政治部で取材

橋本首相、小淵首相の総理番。
その後自民党担当に。

橋本、小淵、小泉、安倍、野田
の5人を中心に。

その前提と
して…

平成政治の特質その1 … 政治改革とその帰結による小選挙区制。「党首力」が問われるように。→ 首相のリーダーシップ、キャラクター、パーソナリティが問われる

平成政治の特質その2 … 政治改革により「官邸主導」「首相主導」のシステムに。→ ここでもやはり首相のリーダーシップが問われる

点をあてます。橋本さん、小淵さん、小泉さん、安倍さん、野田さんです。この5人の首相の素顔を中心に紹介します。

最初に全体の話として二つのことを申し上げます。平成政治、平成の首相像、リーダー像の特質です。今回の出た本でも再三にわたって書いてあり、私もあらためてとても勉強させていただきました。政治改革が昭和から平成に至る政治の大転換であったと思います。その帰結による小選挙区制です。従来の中選挙区制に比べて、党首力が非常に問われるようになりました。党が統制する選挙です。このリーダーに託したいから入れる、ということが、選挙でとても大きな要素になってきました。首相のリーダーシップやキャラクター、あるいはパーソナリティーが非常に問われるようになっていきます。

もう一つ、政治改革の大きなキーワードで、平成政治でもずっと歴代の首相が模索を続けていたことが官邸主導、あるいは首相主導ではないでしょうか。これをシステムとしてどう整えるか、整えられたシステムの上で実際にリーダーシップをどのように発揮して、政治を実践していくのが、平成政治の大きなテーマの一つだったと思っています。そのため、首相のリーダーシップ、人間像が大きな鍵を握る要素だと思っています。では首相のリーダーシップということで、これからミクロに入っていきます。

最初は先ほど渡邊先生からも紹介がありました、橋本龍太郎さんです。私にとっては本当に思い出深い政治家です。1998年に政治部に初めて来たときに首相番、総理番をしました。そのときの総理番は今とは全然違います。今よりもずっと首相に近づけました。というのは、今の首相官邸は小泉政権時代に建て替えられたもので、総理番は1階のエントランスの所で取材しま

す。でも、私たちのときは執務室の前まで行きました。執務室の前で本当に文字通り「番」をしていました。首相の所に訪ねてくる人のほぼ全員に、間違いなくアタックすることができました。誰と会っているかも今よりずっと分かりました。

それから、もう一つ大きな点があります。歩いているときであれば首相に話し掛けていいというルールでした。官邸や国会の中を歩いているときです。国会は大きいので廊下を歩いている時間がとても長いです。その間は横に立ち、首相に話し掛けます。もちろん答えてくださるかどうかは首相の自由ですが、そこで顔色や機嫌や気分、きょうのこの人はどういうことを考えているのだろうということを、本当に横で身近に観察することができました。

その中で今でも忘れることができない橋本さんの思い出があります。私がここにも書いたとおり、橋本さんは政策がとてもシャープで、議論好きでした。議論に対して、この人はとても誠実だったと思います。最近の国会でよく見られることですが、議論がかみ合いません。ご飯論法ともいわれていますが、総理大臣が質問にしっかりと正面から答えないことがよくあります。この人はそういうことがとても少なかったです。議論に対して誠実でありたいという気持ちのとても強い人でした。そのため、この人の国会議論はとても面白かったです。

話を元に戻します。私は1998年4月に総理番になり、初めて総理に直接質問してもいいという日がついにきました。そのときは5月でしたが、どうしようかと思いました。政策議論といっても橋本さんは怖そうでやり込められるので、あまり難しいことを聞きたくないと思いました。でも、人間像に迫る質問を何かしたいと思い、橋本さんがお母さまをととても大事にされていたこ



とに注目しました。お母さまはそのときに入院されていましたが、週末になるとよく病院にお見舞いに行っていました。非常にお母さまのことを大事にされていたので、これを聞きたいと思いました。もうすぐ母の日なので、母の日の質問をしようと思いました。

私は「総理、質問させていただきます」と言いました。本当に近い所から「もうすぐ母の日ですが、母の日はどのような思い出がありますか」と聞いたところ、返ってきた答えが全く私の想像と違っていました。橋本さんはとても怖い顔になって私を見ました。「その質問は答えたくないんだ。母の日ができたとき、今の母とはまだなじんでいなかったから。カーネーションを赤と白に分けるという発想が嫌いだった。二つに分けるのはすごく残酷だと思った」と言い、行ってしまいました。私は呆然として、首相を追いかけることもできませんでした。

橋本さんの実のお母さまは早く亡くなられていて、その後、お父様が再婚され、義理のお母さまでした。弟の大二郎さんはそのお母さまのお子さんです。橋本さんは義理のお母さんをととても大事にしていたのです。

母の日は子どもたちがお母さんにカーネーションを作りますが、当時はお母さんが亡くなった人には白いカーネーションを作りましたよとなっていたようです。そのことを思い出して橋本さんはとても難しい顔になりました。私は国会の廊下で質問をしていましたが、その後に橋本さんは官邸に車で移動しました。私たち総理番はそれを追いかけて走って官邸にいけますが、私は橋本首相の厳しい対応にショックを受けて、走る元気もなくて官邸にのろのろと歩いていきました。

仲間の総理番より遅れて官邸につくと「秋山さん、総理が探していました」と記者の仲間から言われました。「先ほどの女性記者はどこですか。私はあの続きが言いたい」と言って、私のことを探してくれていたようです。橋本さんが後で、「私は今は母をととても大事にしているので、皆さんは母の日にお母さんを大切にしてほしいです」と言われたそうです。彼はそういう気遣い、優しさがある人だったと思います。

もう一つ、橋本さんのエピソードを紹介させてください。橋本さんが大事にしていたお母さまが亡くなられて、お葬式がありました。そのとき橋本さんはすでに首相ではなく、私はとても迷った末に、忙しかかったのでご葬儀には行きませんでした。でも、気になったので弔電を打ちました。総理大臣経験者なので弔電は山のようにくると思います。でも、橋本さんは絵はがきで直筆の返事をくれました。橋本さんは写真撮影が趣味でしたが、それはご自分が撮影した写真の絵はがきでした。

私は政治記者歴が四半世紀ぐらいですが、VIPの政治家の取材をさせていただいたときはお礼状を書くことにしています。お礼状に対して返事をくれた方は2人だけです。1人はお礼状ではありませんが、この橋本さんです。もう1人は麻生太郎さんです。麻生さんは毛筆の非常に丁寧なお返事でした。麻生さんはそういう人です。

それから橋本さんはプリンスと書きましたが、本当に育ちの良い人です。興味のある方はインターネットで、橋本さんの笑顔の写真をご覧になってみてください。この人の笑顔はすごい笑顔です。育ちが良い方の、人を魅了する笑顔だったと思います。私はそこに人間性が出ていると感じます。

次は小渕さんをお願いします。小渕さんは凡人宰相といわれましたが、この方が総理になった当初の総理番をしました。私はそのときは20代でしたが、驚きました。人が良いのはとても伝わってきますが、でも、といいますか、正直言ってこの人が総理大臣で大丈夫なのかと思いました。彼はそういう自分を隠さない率直さがあったと思います。『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』でも「ボキャ貧」という言葉が出てきます。自ら自分のことをボキャブラリーが貧弱な「ボキャ貧」と称して、そういうのを全く隠しません。「ブッチホン」という言葉もありました。

人に電話をかけまくって意見を聴いていたんです。

私は小渕さんの総理番を3カ月ぐらいして、その後に自民党担当になりました。その後1年ぐらいして、自民党の政治家にくっついて首相官邸に行ったことがあるのですが、小渕さんが全く変わっていたことにとっても驚きました。本当にリーダーとしての風格や品格のようなものが出ていました。立場は人をつくるといいますが、このようになるのかと思ったことが忘れられません。

人柄の小渕さんといいます。単なる良い人と言うわけではありませんでした。この人はとても執念深く、権力に対する執着心がすごかったです。『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』にも書いてありますが、ライバルの加藤紘一さんが総裁選に出ると言ったときに、加藤さんは爽やかな政策論争をしたいと言いましたが、小渕さんそれを本当に根に持ってとても恨んでいました。小渕さんは圧勝しましたが、その後は加藤さんを徹底的に干しました。これが後に加藤の乱となり、ひいては小泉政権ができました。小泉政権と後の民主党への、政権交代のレールを敷いたことになったと私は思っています。政治は何があるか分からないし、人の営みだというのはこういうところに感じます。

もう一つです。小渕さんは自分のことを称して、運・鈍・根と言っていました。運・鈍・根があれば政治の世界を生き抜いていけると自分は信じていました。運はラッキー、鈍は鈍感であること、それから根性です。鈍感であるところで鈍牛宰相と自分で称していましたが、とても小渕さんらしかったと思います。

続いて小泉さんにいきます。この人は非常に政治家らしからぬというか、一言で言う気持ちのいい人、爽やかな人です。表現がエモーショナルになりますが、シンプルな人だったと思います。政治家としての印象は脂ぎったところや権力欲を感じさせない人でした。私は小泉さんの派閥を担当したことがありませんが、ピンチヒッターで小泉さんを囲む記者懇談に行ったことがあります。そのときに私は初対面でしたが、この人は他の政治家と全く違いました。そのときは夏でしたが「皆で懇談するのだから、本年の夏で皆がしたことを一つずつ言っていきましょう」という感じで全員に気配りをして、皆の話を聞いてくれました。気持ちのいい人、と言いますか、そのような政治家のリーダーを見たことがありませんでした。裏表もなく格好つけない人だったと思います。

よく小泉さんのことを一匹オオカミといいます。確かにそういうところはあります。本当に徒党を組むことが嫌いです。首相になる前のことですが、出張の際も秘書も同行させずにさまざまな所に行きました。あのクラスの政治家では、非常に珍しいことです。派閥の会長になった後も、地方出張に1人で行っていました。でも、この人は一皮むくととても派閥的な人間です。小泉さんはもともと清和政策研究会の人で、福田赳夫さんの下で修行していました。最初の選挙で落ちた後、福田赳夫さんの世田谷の自宅に、朝4時起きで横須賀の自宅から通って、文字どおり

小渕恵三首相

首相も成長する

「人柄の小渕」でも
単なる良い人ではない

運、鈍、根



小泉純一郎首相

気持ちの良い人、さわやか（非自民党的、非政治家的）、シンプル

一匹オオカミ、でも派閥的人間

自民党＝経世会をぶっ壊した



下足番をしていて、そこで福田赳夫さんの警咳に接し、書生的なことをしていました。

そのため、この人は政治家になってからも大蔵族で反経世会でした。福田さんにとって経世会、もとをたどれば田中派は、いろんなことがあって本当に恨んでも恨みきれない人たちだと思いますが、そこを壊します。この人は「自民党をぶっ壊す」と言って、そのとおりになりました。それは経世会を壊すことだったと思います。というのは、郵政は経世会の権力の温床です。総理になって、郵政民営化でそこを壊しました。でも、この人は永田町の中では変人といわれていたけれど、われわれ一般の人たちの感覚にはとても近いです。つまり、永田町での変人は私たち普通の世界の感覚に近い人だと私は観察しました。

次は野田佳彦さんです。民主党の3人の首相から、どなたを取り上げようかと思いましたが、野田佳彦さんにしました。鳩山さんや菅さんは極めて民主党らしいです。これは『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』にもありました。例えば鳩山さんは「新しい公共」という理念があり、その実現を目指していましたが、野田さんはそうではないと私は思います。

野田佳彦首相

極めてオーソドックス
「民主党らしく」ない？

言葉の力を信じる首相



私は野田さんが総理大臣になる前に民主党を担当したことがあります。この人のキャッチフレーズは「日本丸洗い」でした。「日本丸洗い」はどこから出てきているかというと、ご存じの方もいると思いますが、坂本龍馬の「日本をいま一度、洗濯いたし申し候」からきています。「日本丸洗い」というのは、今の統治機構について、既得権にまみれて改革ができないことについて、丸洗いしてよりきれいな政治にしなければいけないというのが彼のキャッチフレーズでした。でも、きれいにした後何をするのかわかりませんでした。

その頃、ちょうど民主党の代表戦がありました。私はそのときに取材をして、野田佳彦さんを間近に見て、この人は具体的にこの政策をしたいということがないと感じました。統治機構の在り方や政治のありようには関心があるけれど、例えば自分が教育改革をしたい、憲法9条を変えたいというような具体的な政策を感じられませんでした。この人が首相になると安定的な運営はするだろうし、司々の官僚さんたちの言うてくることを判断するだろうけれど、極端な言い方をすると、官僚さんの言いなりになるだろうと思っていましたが、本当にそうになりました。良くも悪くもそういうところがあったと思います。この人は政治家として極めて自民党的なオーソドックスさがあり、民主党らしくない首相だったと思います。

もう一つ、この人の特性として挙げたいこととして松下政経塾出身、ということがあります。松下政経塾というのは平成の日本政治の大きなファクターだと思います。松下政経塾の1期生から政治家になり、ひいては総理大臣になった人です。何の後ろ盾もないところで、この人がどのように政治家になってきたのかというと、この人は選挙演説がとても上手です。

彼の地盤である船橋市、習志野市が私の地元です。当時の高校生の間で野田佳彦さんは有名でした。県議をめざして毎朝駅頭で演説をしていました。彼が県議に当選したときは地元の高校生の間で話題になったほどです。彼がよく言うこととして「浮動票は不動票になる」があります。無党派層を自分の堅い支持層にすることができる、ということです。言葉の力をとても信じていた首相だと思います。皆さんで覚えている方もいると思いますが、この方が民主党の代表戦で勝ったとき、相田みつをの『どじょう』を引き合いに出した演説で多くの票を得ました。

もう一つ申し上げたいのは民主党が政権を明け渡す原因を作りました。彼が解散をいきなり打

ち出したのは党首討論のときです。今は党首討論は形骸化というか、ほとんど開催もされなくなっていました。彼は党首討論のような言葉の力を交わす場を信じて、そこで解散を宣言しました。言葉の力を信じる、非常にオーソドックスな首相だったと思います。

駆け足で、すみません。最後の安倍晋三さんのところ。私がここでとても強調

したいのは、安倍晋三さんは第1次政権と第2次政権で全く違っていました。恐らく彼についてキーワードとなるのは、器の大きさだと思います。第1次政権のときにはお友達内閣を作ったといわれていました。演説を聞いても、失礼ながらこの人は狭量である、器が小さいと思うことがとても多かったです。

一つエピソードを紹介します。共産党の論客で、既に引退された佐々木憲昭さんという方がいました。ムネオハウスの追及で名をあげた方です。彼が言っていました。国会の論戦の後で、偶然に他の首相とエレベーターで一緒になっても「先ほどの質問は参りました」「面白かったです」「またお手柔らかにお願いします」という感じで言葉を交わしたそうです。小泉さんは特にそのように話し掛けてきたそうです。しかし、安倍さんだけは何も言わなかったそうです。エレベーターに乗って安倍さんがいるときは、「こんにちは」くらいは言いますが、あとは言葉も交わさず、とても気まずい時間が流れたそうです。それが第1次のときです。

第2次になったときのことで。同じく共産党に宮本岳志さんという方がいます。彼が安倍さんを国会で追及して、その後にエレベーターで一緒になったそうです。そうすると、安倍さんから話し掛けてきたそうです。「先ほどの質問はありがとうございました」と言いました。「いえいえ、こちらこそ失礼しました」と宮本さんは答えました。ただ、宮本さんが言われたのは、その後の会話が深まらない、と。「儀礼的に言葉を掛けてくれますが、その後の会話が深まりません。例えば森さんだといろいろと話して面白いんですが」とおっしゃっておられました。

安倍さんは自分が第1次から第2次までの間、本当にどん底を経験して、自分が何のために政治をするのか、首相として何を残したのかについて考えて、器の大きさについてもとても考えたのではないかと思います。それでも総選挙の演説で「こんな人たち」と言い、やじを飛ばしました。そういうところで、変わらないなと思わせるところがあったと思います。ただ、安倍さんの場合は、それこそ平成の宰相たちがずっと追い求めてきた官邸主導をある種、完成させて、その中でリーダーシップを発揮していたと思います。

安倍さんは例えば集団的自衛権の問題や憲法改正など、明確にやりたいことがあった人で、ある種のビジョン型ではあるけれども、やはり渡邊先生からご指摘があったように、特に第2次政権で決断ということをしごく重視していた。彼がよく引き合いに出す民主党政権は「決められない政権」「悪夢のような民主党政権」とよく言いましたけれども、決められないっていうことに対して自分は違うのである、自分は決断力があるというところを、自己演出していたところもあるのかなと思います。私は、ただ決められないということは民主党的な決められなさではなく、物事の白黒はそうはっきりとはつけられない、という面もあると思います。だから、たとえば宮澤さんはいろいろな政策ですごく悩み、逡巡されたのかなと感じています。安倍さんは良くも悪くもその逡巡がなく、そんなに簡単に決めてしまっているのかなと思うところがありました。もっと逡巡してくれよって思ってしまうところもあったりします。宮澤さんはいろんなことが見え過

安倍晋三首相

第一次と第二次で変貌

「器の大きさ」

「官邸主導」のある種の完成形



ざるがゆえに決められなかったところがありますが、安倍さんはどちらかというと、それとは対照的なところにあったのかなとは感じます。

それに関連しますが、私は常々リーダーというのは遠景の人、近景の人というのがあると思っています。誤解を招くといけませんので、注意深く表現しなければいけないのですが、遠景の人というのは近くから見ると嫌なやつという意味ではなく、遠くから見たときのほうが魅力が発揮される人という意味です。これに対して近景の人は、近くで見るほど魅力が発揮される人です。

遠景の人の代表例でいうと、日本ではありませんが、バラク・オバマ（元アメリカ大統領）はその典型ではないかと思います。遠くから見るとすごく魅力、遠くから見てこそ魅力が発揮される。それと似た人は『平成の宰相たち』の登場人物でいいますと、細川護熙さんもそうではないかと思います。今いる日本のリーダー、首相候補の中でも結構、遠景の人は多いのではないかと思います。

逆に近景の人っていうのは、麻生太郎さんがそうですね。あと、私が番をしたことがある山崎拓さんもその典型ではないかと思います。近くで見るとものすごく親分肌の政治家というか、派閥の親分的で、今ではこういうタイプの人は少なくなりましたが、義理人情で、面倒見が良くってという魅力があります。しかし遠くから見ると脂ぎっていて何を考えているか分からなくて、既得権にまみれてギトギトしていて、というふうに見えるところがあるのかなと思います。

遠景と近景のぶれが本当に少ない希有な人っていうのは、小泉さんだったのではないかなと思います。この人は近くで見たときも遠くで見たときもあまり変わらない。シンプルっていうのはそういう意味でもあります。とても分かりやすいから、今まであまりに分かりにくい人たちが続いたことへのアンチテーゼで、小泉さんのような人が首相になって安定政権を築いたのかなと思います。

私はやはりリーダーというものは言葉の力で民を納得させて、そして、ビジョンを掲げてよりいい国づくりの方向に導いていくということが大事だと思っていますし、それは時代が変わっても大事な要素だと思います。しかしこの5年から10年にかけて思うのは、SNSが非常に発達したせいもあって、言葉の大安売りというか、大バーゲンのような現象がすごく起きていると思います。典型的な例でいうと、ドナルド・トランプ（前アメリカ大統領）などがそうですけれども、Twitterで次から次へと言葉を流して、有権者と直結して言葉を簡単に次から次へと発するのですが、それがすごく乱暴で投げつけるというか、安売りしている感じがある。

日本ですと安売りしているとは言いませんが、安倍さんが有権者と直接つながっている。トランプもそうですが、有権者というよりも、自分の固定ファンに彼らはすごく強かった。固定ファンとつながって、言葉を直接やりとりするという点で、遠景と近景のミックスバージョンっていう感じだと思います。これは有権者にとっては心地よさがある一方で、言葉をちょっと安易に投げつけると言いますか、宮澤さんならこれは言ったらいいか、どう表現したらいいかと悩むところを、悩まないで瞬時にぱっと投げつけちゃうようなところがある。だから安売り感みたいのも出てきてしまうのかなと思います。

ただ、これは固定ファンにしたらやっぱりうれしい。自分たちといつでもつながってくれて、安心できるというところがある。日本の総選挙の投票率ワースト3は、2014年、2017年と2021年です。特に2014年が一番低い。つまり安倍政権はよく言われていることですが、固定ファンに支えられていた政権というところがある。その中で言葉をどのように使うのかというのは、SNSで直接つながって固定ファンをいつも安心させてあげる、みたいなことがあるのかなと思います。

最後は非常に駆け足になり恐縮ですが、間近に見た平成の首相たちということで、私の発表は

以上で終わります。ありがとうございました。

IV. 歴史としての平成日本政治（宮城大蔵）

上智大学の宮城です。私の発表は「歴史としての平成日本政治」としました。やや大げさなタイトルですが、「歴史としての」とは、ひとまず一つの時代を認識するときは、その時代が終わらないと時代として完結しません。ここでは平成という時代が終わりを告げて、一つの塊として捉えることができる、その程度の意味として使っています。



以下のようなこちらのスライドで何冊か本を並べましたが、一番左の『戦後日本の宰相たち』は渡邊昭夫先生が編集されたものです。これは本当に名著だと思います。さまざまな一線の政治学、外交政治史の方々が書いています。人物論的な深み、当時の政治の状況、それを取り巻く構造的なもの、そのバランスも見事です。また、さまざまな方が書かれているので、この人がこの首相について書くところになるのかという面白さもあります。本当に何度手に取っても飽きることがない深みのある名著だと思います。文庫本になっています。

隣にあるのが『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』で、このたびに出た本です。『戦後日本の宰相たち』があまりにも素晴らしいので、勝手に続編を作った海賊版ではなかろうかと思われるかもしれませんが、実はこれは渡邊先生とご縁がある話から始まりました。さらに脇のほうに私が編者をつとめた『戦後日本のアジア外交』という本を並べました。戦後日本とアジア諸国との関係を扱った本です。戦後の日本外交を考えると、対米関係が基軸であることに疑いはないかと思います。

一方で、戦後のアジアとの関係については本当に起伏に富むものでした。対米関係と異なり、選択の幅も広い。日本外交の現状とこれからを考えても、そうだと思います。アジアとの関係を通史としてまとめたこの本は運よく「国際開発研究 大来賞」という、経済を中心に日本の対外関係で大きな足跡を残した大来佐武郎の名前を冠した賞を受けました。その授賞式に渡邊先生が来てくださって、2次会まで付き合ってくださいました。その席で先ほどの『戦後日本の宰相たち』のことが話題になりました。「宰相たち」の「平成版があると面白いのではないか」という話で盛り上がり、同席していた編集者も賛同して実際に企画として成立し、刊行に至ったという経緯です。ですから渡邊先生にも本書の冒頭で「刊行に寄せて」をお書きいただきました。

私はもともとは戦後日本とアジアとの関係を専門としていましたが、今回のような平成の日本政治や外交について、以下のようなきっかけで、もう一つの関心領域として取り組むようになりました。秋山さんから橋本龍太郎さんの話を聞きましたが、『平成の宰相たち』の隣にあるのは『橋本龍太郎外交回顧録』という本です。日本国際問題研究所という外務省系のシンクタンクに『国際問題』という伝統ある雑誌があります。そこで500号を記念して、歴代の外交指導者にインタビューをしようという企画がありました。防衛大学校の校長先生等を務めた五百旗頭真先生が聞き役で、私はそのアシスタントとしてお手伝いで編集してまとめるという企画です。

先ほどの渡邊先生の話をもとに思い出したのは、この企画の第1回が宮澤喜一さんでした。

五百旗頭先生が「宮澤さんはサンフランシスコ講和会議にも参加するなど戦後史そのままの生き証人であり、本当に長い政治的な履歴を持っておられますね」という話を最初に振ったときの宮澤さんの答えが「私と同じくらい長いのは山縣有朋ぐらいでしょうか」でした。明治の元勳です。明治の元勳である山縣有朋と自分を比べるとという感覚に驚いたことを思い出します。

第2回が中曽根康弘さんです。中曽根さんで非常に印象に残っているのは、第一声から、「私は東京帝国大学在学中から統治をすることに非常に強い関心を持っていました」という話でした。私などは最初から統治される側かと、「恐れ入りました」という気分になりました。第3回目が橋本龍太郎さんで、非常に多くのことをなさった方ですが、不幸にして早く亡くなられたこともあり、あまり書かれたものが残っていません。一方でわれわれのインタビューではとにかく緻密なお話だったため、『国際問題』にはごく一部しか掲載できませんでした。そこで亡くなった後に掲載できなかったものもあわせて『橋本龍太郎外交回顧録』を編集しました。

そうすると、橋本さんのお話は緻密でしたが、実は言っていないこともたくさんあることに気づかされます。例えば1996年の日米安全保障条約の再定義のことで。「私はほとんど関わっていません」と言っていますが、実際には重要な指示を出しています。それから沖縄の米軍普天間基地の返還合意です。橋本さんは日本経済新聞のスクープで返還合意が表に出たことで、普天間の代替施設を具体的に詰める時間がなくなったと言っていました。実際には、日経新聞にリークしたのは橋本さん本人だったようです。代替施設が詰められていないままの返還合意の危うさを一番よく分かっていたのは橋本さん本人なのでしょう。結局、この問題は代替施設をめぐって迷走し、今も辺野古で大きな問題となっています。

『橋本龍太郎外交回顧録』で解題を書くことになり、橋本さんの発言の謎解きを随分しました。そこから、冷戦後の日本外交ということで中公新書の『現代日本外交史』を書きました。その中の普天間返還合意、辺野古新基地計画のことについて、これでまた1冊の本を作りました（『普天間・辺野古 歪められた20年』）。こういった経緯で同時代のことを扱ううちに、今回の『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』ということで、さまざまな方に参加いただき、本を作るところまで至りました。

渡邊先生の歴史的なことを踏まえた話や、秋山さんから人物像やリアルな話もあったため、私は若干の話の整理のようなことを、二つの観点から示したいと思います。一つ目は、平成日本政治の時期区分です。「歴史としての」と言ったときに時期区分をすることで、その時代の特徴が出てくると思います。平成という時代を政治の流れで見ると、私は三つの時期に分ける

ことができると思っています。取りあえず一つ目の時期を第1期としましたが、55年体制の終焉です。宮澤喜一さんは55年体制最後の首相ですが、細川護熙政権の誕生で自民党が下野します。そこから小泉さんが総理に就任する辺りまで、ここがまずは一つの時期だろうと思っています。キーワードとしては政界再編です。最近あまり聞かなくなった言葉のような気がします。

第1期を政界再編の観点で見ます。まずは55年体制が終わったのは、自民党が分裂したわけです。小沢一郎さんたちが出ていったことで終わりました。そこから社会党などと組んで細川、羽田の非自民連立政権ができました。それが次は自民党と社会党と新党さきがけの自社さ連立政権になりました。自社さ連立では村山政権と橋本政権です。自社さ連立下の自民党の中では自社

1. 平成日本政治の時期区分

◆第一期 55年体制の終焉～小泉純一郎首相前夜：「政界再編」の時代
・自民分裂 ～自社さ連立(自社さ vs. 保保) ～自自・自公連立

：連立与党(非自民・非共産) ～新進党 / 民主党(第三極)

・自民：連立相手を乗り換えながら政権奪回。非自民の模索。自公連立／小沢：民主へ。

◆第二期 小泉登場から政権交代まで：自民党内の「政権交代」

・小泉：制度改革と「首相の権力」。「二大政党」への機運？

・「(衆参)ねじれ国会」と「大連立構想(の幻)」

◆第三期 民主党政権の「失敗」と「安倍一強」

さ派、つまり保守リベラル路線でいくのか、保保派、つまり小沢さんが新進党をつくっていたので、自民党の保守的な人たちと小沢さんの保守と保守で組もうという保保連合でいくのか、こういう路線対立がありました。

自社と連立政権が崩れた後は自自です。小沢さんが新進党を解体した後に作った自由党と自民党の連立です。さらにそこに公明党が加わり自公連立政権となります。自民党からすると、連立相手を乗り換えながら政権を維持した時期です。連立の相手がどんどんと変わっていききました。

それから、野党の方についてです。細川政権下の非自民・非共産の連立与党から社会党が出ていき、小沢さんを中心に新進党をつくりました。その傍らで結成されたのが民主党で、そのときは第三極と言っていました。自民党があり新進党があり第三極ということで始まりました。自民党は連立相手を乗り換えながら政権を維持し、非自民の側は組み合わせをいろいろと模索しました。結局、公明党は自民党との連立を選び、小沢さんは逆に民主党のほうに入っていました。政界再編がこの時期のキーワードだったと思います。

次の第2期です。これは小泉さん登場から民主党への政権交代までです。小泉政権の登場はある意味、自民党の中での政権交代でした。それ以前は保守本流という言葉がありました。これは経世会の竹下派と、宏池会の宮澤派の系譜が組んで保守本流を自負していました。岸信介、福田赳夫の系譜を引く小泉さんたち（清和会）は、自民党の中核から外されているようなところがありました。先ほどの秋山さんの話にもありましたが、そのことに対して小泉さんは恨み骨髄で、小泉さんは「自民党をぶっ壊す」と言いましたが、実際に壊したのは竹下派の支配であり、ある種、自民党の中での政権交代を果たしたと思います。

小泉さんは橋本さんが進めた官邸機能の強化、あるいはそれ以前の政治改革での小選挙区制、そういうものの使い方を首相として最大限に駆使しました。本日の司会である高安さんの著作に『首相の権力』という本がありますが、首相の権力を最大限に行使して、それで構造改革なるものを進め、自民党の中では経世会の支配をつぶしたと思います。

その一方で、野党はだんだんと話が民主党にまとまっていきます。総選挙のたびに、例えば小泉さんと民主党代表の岡田克也さん、それぞれが双方のリーダーとして対決する構図が固まっていき、二大政党制に収斂していくような機運が見えたのがこの時代だと思います。

ところが、小泉さんの後です。権力がそれほど強かったのかというと、実は参議院が存在していました。参議院選挙で一回負けてしまうと、衆議院でいくら多数を持っても、事が立ちゆかないことが露呈します。それで小泉さんの後の首相は安倍さん、福田さん、麻生さんです。これらの皆さんが1年足らずで辞めていくのは、ねじれ国会が非常に大きいです。

これを打開するために、福田康夫さんのときには小沢さんの民主党との大連立構想がありましたが、実現に至らず流れました。仮にこれが実現していれば、当時は民主党の代表だった小沢さんからすれば、民主党としては連立に参加することで、まずは政権運営の仕方を学ぶことが大事であるということを言っていました。仮にこれが成立していれば、その後の日本政治のありようや方向や展開がそれなりに変わった可能性があったのか、ターニングポイントのような面白いことだと思います。

そして第3期です。平成の日本政治にクライマックスがあったとすると、それは民主党への政権交代だったと思います。民意が権力の所在を選択したという意味では、日本史の中でも特筆すべき出来事でしょう。そして、結局はそれがうまくいかなかった、あるいは、うまくいかなかったと総括されていることがきわめて大きな影響を及ぼすことになっています。第2次安倍政権では「安倍一強」と言われましたが、「悪夢のような民主党政権」というのが安倍さんの口癖だったように、民主党政権の失敗なるものの鏡として安倍一強が存在しています。民主党政権の失敗

になるものと安倍一強は鏡合わせのような存在であり、これが第3期だろうという気がします。

「失敗」とかきかっこを付けたことについてです。私は民主党政権が手掛けたことには、見るべきものも多かったと思います。一時期、日米連携のカギだとして世をにぎわせたTPPも民主党政権で始めています。自民党に引き継がれたものもあります。

一番大きな問題は民主党政権を当事者として担っていた皆さん自身が総括をできていないことでしょう。例えば、方向性は間違っていなかったが、マネジメントが問題だった。そういう本当の意味での反省、くみ取るべき教訓は何なのかといった整理をしっかりと国民に示すことです。そこがなかなか見えないまま、離合集散を繰り返しているように見えます。本当に失敗なのか、失敗だとするとどこが教訓なのかです。ぜひそれをしていただきたいと思っています。

時期区分につづく二つ目の見取り図では、指導者像の系譜を三つに分けてみました。一つ目の系譜だと思うのは、保守本流という言葉です。「平成時代の保守本流」と付けました。ただ、考えてみると、保守本流とは結局は自民党の中の話です。55年体制は基本的に政権交代がありません。社会党は政権を取るつもりがありませんでした。自民党の中での疑似政権交代です。保守本流とは自民党の中での多様性がある代わりに、政権交代はないという55年体制からきている言葉だと思います。

渡邊先生の1986年の論文を拝見すると宮澤喜一さんとの対談で、「地下に眠っておられる吉田茂さんの名前を使う必要はない、吉田ドクトリンという言葉を使う必要はないので、吉田さんを静かに眠らせてあげましょう」ということを再三言われていて、確かにそうだと思います。従って、吉田ドクトリンなるものの中身を言い換えると、恐らくは戦後日本の二つの看板であった平和国家と経済大国です。この二枚看板に行き着くと思っています。

その平成バージョンがどういうものであり得るかということを示したのが橋本龍太郎さんと小渕恵三さんだったと思っています。例えば橋本さんはタカ派と言われたこともありましたが、『橋本龍太郎外交回顧録』を今、あらためて見て非常に印象に残るフレーズがあります。これからの日本外交をどう考えますかと問われて、橋本さんは「日本は安全保障という点で、私はこれからも出過ぎる能力を持つ国ではないと思いますし、また持てないだろうと思います。今、非常に無理をして自衛隊を出したがる方もいますが、私は必ずしもそれに賛成ではありません」と答えています。ガイドライン、安全保障の再定義にしても、危機管理のような意識が強かった。法制度上、穴になっているところをふさがなければいけないということがあったと思います。

それから、小渕恵三さんです。小渕さんのときにガイドライン法制や安全保障体制の強化が進みます。その一方で、当時はアジア通貨危機がありました。そこから生まれてきたのがASEAN+3という地域主義の枠組みです。「3」とは日本、中国、韓国です。小渕さんはそういうアジア地域主義を形成する旗振り役を務めました。あるいは、東南アジア諸国への財政支援に「人間の安全保障」という理念を付与しました。IMFが通貨危機救済の条件とした構造調整によって最底辺に転落する貧困層、日本の援助はそういう人々に届くものでありたいという考え方ですね。それから、金大中大統領との日韓共同宣言による韓国と歴史的な和解です。ガイドライン法の整備など安全保障体制の強化を進める一方で、アジア地域主義や日韓の和解はある種の緊張緩和をもたらす意味があったと思います。私は安全保障体制の強化と地域主義の形成が冷戦後の日本外交

2. 指導者像の系譜

◆平成時代の「保守本流」(「平和国家」と「経済大国」)

- ・橋本「日本は安全保障という点で…」(『橋本龍太郎外交回顧録』)
- ・小渕「ガイドライン法制、ASEAN+3と人間の安全保障、日韓共同宣言」

◆清和会系の系譜 ?

- ・小泉、福田康夫、安倍晋三… 安倍晋太郎

◆「非自民」の模索

- ・55年体制の「その後」。国連中心、有事駐留、東アジア共同体。鳩山～菅～野田。

◇幅の喪失と活力の低下?? / 政策論議と権力闘争

3. アジア太平洋と日本政治 (国際環境と国内政治)

の2本柱だと思っていますが、その辺りのバランスを取ったのが小渕さんだと思います。

ただ、このときのASEAN+3と言われた、広い意味での東アジアでは、経済規模の6割ぐらいは日本が占めていました。当時の日本は中国の経済規模の4倍という時代だったため、圧倒的な日本の経済力があって地域主義のイニシアチブをとることもできました。今は必ずしもそういう条件が存在しているわけではありませんが、見るべきものはあると思っています。

指導者像の二つ目が、清和会の系譜です。岸信介さんから福田赳夫さん、それから小泉さん、福田康夫さん、安倍晋三さんの系譜です。小泉さん以降は、ほぼ清和会が天下を取っている時代が続いています。清和会とは、もともと戦前から政治家だった人たちが多いところですよ。吉田とか宏池会は戦後派で、戦後という占領期に出てきた、戦前の権力構造とは切れているという自己認識だったと思います。

清和会というと、右派や憲法改正というイメージで捉えられています。実際にそういうところではありますが、それほど単純でもないと思います。例えば小泉さんは、あまり歴史認識や憲法改正にこだわりはありません。首相のときに毎年、靖国参拝に行っていましたが、退任後は一回も靖国神社には行っていません。そのことを聞かれた小泉さんが、「分かっていないな、総理大臣だから靖国に行く意味があるんだろう」と言っていて、分かったような分からないような感じが、小泉さんらしい感じもしますが。

それから、安倍晋三さんです。先ほど渡邊先生から右派というようなこととは違うのではないかという話がありました。私が印象に残っているのは森喜朗さんの言葉で、第1次政権で安倍さんが総理になったときに、「安倍晋三さんは保守や右翼といわれているが、そうではなくて、彼は戦後生まれ現代っ子なんだ」と。恐らくその辺りが実像かなという気はします。

あとは安倍晋太郎さんです。秋山さんの朝日新聞政治部の大先輩に当たる若宮啓文さんと河野談話と慰安婦について話したことがあります。河野談話は宮澤政権で河野洋平官房長官が行い、これに対して自民党の右から非常に反発がきました。若宮さんは「病気さえなければ安倍晋太郎さんが首相になっていたはずで、安倍さんの下で河野談話のようなことをしていれば、それほど自民党の右からの反発はこなかっただろう」と。いわば、清和会のリベラルというのか、そういう路線が安倍晋太郎さんで、福田康夫さんもそこに近いと思います。清和会だからといって、全てが今で言う、安倍カラーのようなもので染められているかということ、必ずしもそうではないだろうと思います。

指導者像の三つ目は非自民系における模索です。55年体制は終わったとよく言いますが、当たり前ですが自民党はなくなっていない。なくなったのは社会党であり、それでは社会党が55年体制で占めていたところを、社会党がなくなった後は何で埋められているか、こういう話が重要だと思います。それが非自民の模索です。外交安全保障では鳩山さんのことばかりが取り上げられますが、例えば小沢一郎さんはずっと国連中心主義を標榜しています。それから有事駐留論です。つまり、日米安保体制は重要だが、米軍が常時、日本に駐留している必要はない、有事のときに来ればいいのではないかという議論です。それから東アジア共同体です。こういうことは細川護熙さんや小沢一郎さん等、さまざまな人が言っているの、一つの非自民の流れだと言っていると思います。

先ほど野田佳彦さんの話がありましたが、民主党政権の首相3代の鳩山、菅、野田についてです。鳩山さんと野田さんは特に外交、安全保障、歴史認識では全く逆です。鳩山さんで始まった民主党政権が野田さんにいき、外交、安全保障、それから歴史認識でいえば、私は野田さんが安倍晋三さんとほとんど変わりはないと思っています。非自民の中でも幅があるということです。以上の指導者像の系譜で思うのは、平成の日本政治におおよそ三つの系譜があったということ

で、清和会が非常に大きな力を持つようになり、一つ目の保守本流の姿が自民党の中でもなかなか見えなくなってしまう。本来は小選挙区で政権交代という今の仕組みだと、自民党の中は非常に集権化されます。代わりに政権交代が起きます。逆に55年体制のときは、政権交代はないけれど自民党の中に多様性があります。そういう意味では、自民党の中がばらばらではなくて集権化されるのは一つのあり方だと思います。

しかしその一方で、政権交代がなかなか起きにくい状況になってしまうと、結局は政治の姿が単色、モノトーンになっています。三つのうち清和会の路線が今は中心になっていますが、保守本流と非自民系が見えなくなってしまう。結果として、日本政治が非常にモノトーンの一つの色に染められて、今は他が見えない状況にあると思います。

山崎拓さんという自民党副総裁を務めた平成政治のいわば名脇役がおられます。山崎さんが言われていたのは、政策論争と権力闘争はセットであり、これがあって政治は活力が出るということです。そうすると、今は政策論議もなく権力闘争もあまり見えません。私としては、もう少し政治の世界には議論の幅と多様性がある、そのことが国民にとってはもちろんですが、権力を持っている側にとっても好ましいことだと思っています。

三つ目の観点であるアジア太平洋と日本政治についてですが、冷戦後の日本外交の2本柱は、安全保障体制の強化と地域主義だと思っています。この地域主義がある意味、安全保障上の緊張のガス抜きになっているようなところがなくはない。信頼醸成とまでは申しませんが、一緒に何かやるというフレームワークをつくるということです。だから、私はガス抜きとしてやることに十分意味はあると今でも思っています。その点について、近年はこの地域主義も安全保障化しているというのが特徴だと思います。

つまり、アジア太平洋やインド太平洋など、いろいろな枠組みが出ていますが、やはり中国包囲網的な安全保障の色彩が非常に強くなっている。そうすると、何でもかんでも対中包囲網的な発想で考えることがどこまで生産的なのかという話があります。例えば一帯一路というのは不良債権化しそうな案件ばかりがある。中国だって無駄なお金の使い方間違っただけという時期が来るように思います。ですからそれに対抗して日本が同じようなことをやるというのは、本当に生産的なのかということです。

その辺りのバランスというのでしょうか、権威主義的な体制に対抗するために国内で強権的になり、自分も権威主義的になってしまったということでは一番、元も子もないわけです。やはり中国ということを念頭に置くにしても、本来、日本が持っている強みとか、つくってきたものの価値とか、そういうものをしっかり押さえて、それを基本に対応するというのが大事だと思っています。

戦後の日本で「平和国家」と「経済大国」が二枚看板だったというのは、冷戦下において安全保障や軍事のことは事実上、アメリカがやってくれていたもので、日本としてはあまり考えなくてよかったというところがありました。その前提があって平和国家や経済大国と言っておれた。つまり、明治以降のことを考えると、朝鮮半島、満州、大陸をどうするかということが日本政治にとっては非常に圧倒的に大きな話で、それで軍のことなどいろいろあって、結局最後は帝国日本をつぶすことになったと言っても過言ではないと思います。そういう日本という国を運営していく上で、このアジアとの安全保障という問題は、本当は非常に重たい話です。これをアメリカが肩代わりしていたわけです。日本が自分で考えなくてよかった。だから平和国家と言ってこれだところがあるわけです。

しかし冷戦が終わると、必ずしもアジアについてアメリカの利害と日本の利害が一致するところばかりではありません。日本としてはやはりいろいろ自前で考えなくてはいけないことが出て

きた。それで、安全保障上のアジアへの対応ということが政治の世界でも大きな話になり、それが世論のナショナリズムとも結び付いて非常に大きな話になったという状況だと思います。ただ私としては、さっきの繰り返しですが、それにあまり対抗するために、日本が本来培ってきた強みとか魅力とかを損なうようなことになってはいけないのだろうと思っております。

気候安全保障—気候危機と向き合う今日的視点—

Climate Security: Perspectives on Confronting the Climate Crisis

稲田 信司*
Shinji Inada

Abstract

Climate change is increasingly recognized as a 'threat multiplier' with serious implication for peace and security. Leading media of the world intend to call current situation as the 'climate crisis'. The inauguration of the Biden administration in the US in January 2021 has triggered a renewed interest in climate change measures on a global scale. Meanwhile, with the rapid spread of renewable energy and other energy sources, the struggle for supremacy over oil and natural gas is changing. There is growing momentum to reassess geopolitical risks. The concept of 'climate security', which is increasingly being discussed mainly in Europe and the US, is beginning to attract attention in Japan.

I. はじめに

新海誠監督の映画『天気の子』の舞台は2021年の東京だった。雨が降り続け、街が水没する様子が描かれていた。それは、現実を先取りしているかのような風景だった。大型台風や集中豪雨に伴う洪水などの被害が発生し、人々の生命、財産に深刻な打撃を与える様子を、私たちは毎年のように目の当たりにしている。「気候変動 (Climate Change)」を超えた「気候危機 (Climate Crisis)」とも表される異常気象の脅威と、どう向き合えばいいのか。それぞれの国家レベルの対策、あるいは国際協調を通じた地球規模の対策を見いだすための推進力となり得るのが、1990年ごろから欧米諸国を中心に使われ始めた「気候安全保障 (Climate Security)」という考え方ではないだろうか。本稿では、気候安全保障の定義を整理したうえで、気候危機への対応を急ぐ主要国の取り組みを概観しつつ、脱炭素社会に向けた課題解決の道筋を考えたい。

II. 「気候安全保障」とは何か

気候変動など地球規模の環境問題が脅威になり得るという認識が広がってきたのは、東西冷戦の終結と無縁ではない。米ソの軍事的衝突の脅威が後景に退き、経済のグローバル化が進展する

* 朝日新聞ゼネラルエディター補佐、朝日新聞グローブ前編集長
Deputy General Editor of The Asahi Shimbun, Former Editor in Chief of The Asahi Shimbun Globe

につれ、地球規模の環境問題を安全保障の問題としてとらえる機運が高まった。それが顕在化した最初の国際舞台が、1992年のブラジル・リオデジャネイロで開かれた国連環境開発会議（地球サミット）とされる。ただ、地球規模の環境問題の重要性については各国とも異論はないものの、それを安全保障の問題と位置づけるという見方については一致をみることがなかった。

その後、国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が地球温暖化に関する科学的知見を積み上げて公表するにつれ、温室効果ガスの排出量の削減は待ったなしの課題という認識が深まった。大きな転機となったのは、2005年に英国のスコットランドで開催された主要8カ国首脳会議（G8サミット）ではなかったか。議長を務めた英国が主導して、国際的な機運が再燃した。IPCCの科学的知見を補完するように、気候変動に伴う農業、インフラ、工業生産などへの経済的影響を試算した「スターンレビュー（気候変動の経済学）」を公表。ベケット英外相は2006年の国連総会演説で、当時はまだ耳慣れない「気候安全保障」という用語を使って国際社会に迅速な行動を促し、翌年には国連の安全保障理事会で気候変動を主要議題と位置づけるよう提案した。一方、地球温暖化に関する国際的枠組みである京都議定書から脱退していた米国のブッシュ政権は当時、気候変動を安全保障問題とする見解を示していなかったものの、米上院外交委員会が2007年に採択されたバイデン・ルーガー決議案では、気候安全保障の考え方が採用されていた。

気候変動などを安全保障の問題とみなす考え方は、必ずしも一様ではない。国立環境研究所の社会システム領域長の亀山康子氏は、世界で研究が盛んになっている気候変動と安全保障に関する論文や各国政府の報告書を読み込み、気候安全保障という考え方をめぐる議論を大きく四つに分類した¹。まず、1990年代の黎明期には、長期的かつ不可逆的な地球規模の変化に着目した議論が主流だったという。地球温暖化など地球規模の変化を新たな脅威ととらえ、地球、人類、生態系を守るため、温室効果ガスの排出量を削減するための緩和策を講じることが求められた。二つ目は、人々の生活に打撃を与えるリスクに重点を置いた議論だ。地球環境問題を「人間の安全保障」とみなす考え方ということもできる。台風や洪水、熱波など異常気象による個人レベルの様々な損害を脅威ととらえ、人々の生活やその前提となる食料やエネルギーなどの安定供給を守ることを目的に、個人や地域レベルでの備え、つまり適応策について議論が深まった。三つ目は、環境問題と紛争との間の因果関係に着目する考え方だ。気候変動に伴う異常気象や環境破壊は、農業や漁業など食料生産にも深刻な影響を与え、生産者の収入が減ったり、食料価格が上昇したりする可能性が高まる。たとえば、アフリカ中部のチャド湖は、周辺人口の増加や砂漠化により、かつてより非常に小さくなり、農業、漁業、放牧で生計を立てていた人々の貧困状態が悪化したとされる。社会不安を背景に、イスラム過激派ボコ・ハラムが勢力を拡大し、紛争へと発展したといわれている。四つ目は、ハリケーンや竜巻などの異常気象により、国の軍事施設などが被害を受けることで軍勢力を損なうという議論で、米国防総省の報告書などで用いられている。

近年、気候安全保障をめぐる議論が盛んになってきた背景に、いわゆる「気候難民」と呼ばれる人々の増加があげられる。欧州では、中東やアフリカから地中海などを渡って多くの難民が押し寄せ、欧州連合（EU）加盟国の間で賛否が割れ、それぞれの加盟国内でもポピュリズムの台頭を招くなど政治問題と化した。異常気象が原因とされるハリケーン被害が広がるにつれ、グアテマラやホンジュラスなど中南米諸国から米国へ移住希望者が押し寄せ、気候変動と安全保障への関心が高まっている。また、太平洋の海面上昇の影響で、島嶼国からオーストラリアやニュージーランドへと移住者が増えており、温室効果ガスを排出してきた先進国では、人道上的責任か

¹ 2021年4月4日付朝日新聞グローブ05「気候安全保障って？ 意識薄い日本」

ら難民の受け入れの是非について議論がなされている。

ノルウェー難民評議会によると、2019年に全世界で約2400万人が気象災害によって避難や移住を余儀なくされた。また、世界銀行は2050年までに1億4000万人が避難を強いられると推計している²。

現状では、気候変動による移民を国際法上の「難民」とする定義はない。ただ、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は2020年10月、「気候変動や災害を受けて国際的な保護を求める場合、難民としての地位を主張するのは正当である可能性がある」との法的考察を発表した。また、2021年2月には、国連人権理事会で、気候変動が難民申請の理由に値するとの見解が示されている。

スウェーデンのストックホルム国際平和研究所のフロリアン・クランプ氏は「気候変動と紛争の間には強い因果関係があるが、最近は気候変動が直接的な紛争の原因という理解ではなく、人間の安全保障上のリスクを増大させる一因と認識されるようになった」と指摘している³。

Ⅲ. バイデン米政権が主導する気候変動をめぐる国際交渉

米国のジョー・バイデン氏は2021年1月20日の大統領就任式を終え、ホワイトハウスの執務室で17の大統領令に署名した。そのひとつが、2015年の国連の気候変動枠組み条約締約国会議（COP21）で採択された「パリ協定」への復帰だ。トランプ前政権が掲げた「アメリカファースト」から脱却し、国際協調路線に回帰する方針を印象づけた。バイデン氏はその際、気候変動を「人類存亡に関わる脅威」と位置づけたうえで、「国家安全保障と外交政策の中心にすえる」と断言した。バイデン政権は米国が気候変動をめぐる国際交渉を主導する意欲を明確に打ち出した。その姿勢を象徴する人事が、「パリ協定」の採択の立役者とされる、ジョン・ケリー元国務長官の登用だった。ケリー氏は気候変動担当の大統領特使に任命され、国家安全保障会議（NSC）のメンバーに名を連ねた。また、バイデン大統領は、オースティン国防長官に対し、気候変動が安全保障に及ぼす影響の分析を指示し、国家防衛戦略をはじめとする各種の戦略・政策文書を策定する際に考慮するよう要請した。

バイデン政権は2021年10月末から予定されていたCOP26に狙いを定め、気候変動をめぐる国際交渉を加速していく。そのスタートダッシュといえるのが、2021年4月に米国が主催した「気候変動サミット」で、40の国・地域首脳らが招待され、オンライン形式で開かれた。人権や安全保障の問題で対立する中国とロシアの首脳も参加。バイデン大統領は冒頭、米国の温室効果ガスの削減目標について「（2005年比で）2030年までに半減させる」と表明し、オバマ政権時の目標値からほぼ倍増させ、世界を主導する意欲をみせた。参加各国の首脳からも気候変動対策を推進しようという米国の意向をふまえた発言が目立った。中国の習近平国家主席は「中国は米国を含む国際社会とともに、地球環境のガバナンスを推進するために努力する」と表明した。また、日本の菅義偉首相は2030年度の新たな削減目標について「（2013年度比で）46%削減」と表明し、これまでの目標を大幅に引き上げ、米国や欧州と歩調を合わせる姿勢を打ち出した。米国主導のサミットによって、COP26で「パリ協定」より一段高い目標で合意するための土壌が整ったと受け止められた。

² 2021年4月4日付朝日新聞グループ07「米国が重視する気候安全保障」

³ 2021年4月4日付朝日新聞グループ05「気候変動が紛争のリスクを増大させる」

米国を抜いて世界1位の排出大国となった中国をどう国際交渉の場に引き入れるか。ケリー氏は2021年8月下旬に訪中し、石炭火力発電輸出の停止を求めた。中国は即答を避けたが、COP26の開幕を控えた9月の国際総会で、習近平国家主席が「気候変動に積極的に対応し、人と自然の生命共同体を築く」と述べ、石炭火力発電の新たな輸出をやめる方針を表明した。中国はトランプ前政権下で悪化した対米関係を改善するための糸口を探るため、気候変動問題については是々非々で対応する姿勢を示したとの見方もある。

英国グラスゴーで開かれたCOP26は、議長国の英国にとって、欧州連合（EU）からの離脱に伴う国際的存在感の低下を払拭するための大舞台でもあった。新型コロナの影響でCOPの開催は2年ぶりだったが、約130カ国の首脳を含む、約4万人を集めた。最大の注目点は2030年に向けた国別削減目標（NDC）と、その目標を実現するための具体的な削減策のとりまとめだった。ジョンソン首相が先頭に立って世界各国に削減策を提示するよう呼びかけ、自らも「グリーン産業革命」と銘打ち、「英国は風力発電のサウジアラビアになる」と公言し、2030年までに全家庭の電気を洋上風力発電でまかなうと意気込んでみせた。

COP26は11月13日、「グラスゴー気候合意」を採択して閉幕した。この合意文書には、「世界の（産業革命からの）気温上昇を1.5度に抑える努力を追求する」という表現が盛り込まれた。パリ協定で努力目標だった1.5度を格上げし、事実上の世界目標と位置づけたのだ。1.5度目標の実現に向けて「今世紀半ばには実質ゼロにすること」とし、この10年間の行動を加速する必要があると強調した。削減を進めるための具体策にも踏み込んだ。最終盤で焦点が当たったのが、排出削減策を設けていない石炭火力の扱いだった。排出量が世界1位の中国と3位のインドが「段階的廃止」という表現の修正を求めたところ、米国のケリー氏らが妥協案を探り、「段階的削減」と表現を弱めて明記することで合意。化石燃料に対する非効率な補助金も段階的に廃止するとした。

ケリー氏は閉幕後の会見で「パリがアリーナを建設し、グラスゴーで（脱炭素社会への）競争が始まった。そして、今夜、号砲が鳴った」と語った⁴。

IV. 中国が急ぐ脱炭素の戦略

世界全体の温室効果ガスの排出の3割を占める中国は、国内で頻発する異常気象による被害に危機感を持ちつつ、持続可能な経済成長を支えるためのエネルギー供給拡大を急ごうと躍起になっている。中国の基本姿勢を端的に示しているのが、2020年9月の国連総会に寄せた習近平国家主席のビデオ演説だ。習氏は「2030年までに温室効果ガスの実質的な排出量を減少に転じさせ、2060年までにゼロにする」との国際公約を打ち出した。国内的には「30・60目標」という金科玉条のスローガンとなり、脱炭素の動きの推進力となっている。欧米や日本など先進国に排出削減の法的義務を課した1997年の京都議定書で中国は義務を負わなかったものの、世界最大の排出国となった今は「責任ある大国」として国際交渉に臨む姿勢を示している⁵。

中国は脱炭素に向けた国際公約を果たすため、戦略の柱に据えているが再生可能エネルギーの大規模で迅速な導入だ。中国の2019年末の風力の設備容量は約2億1000万キロワットで、2位の米国の2倍。太陽光は約2億キロワットで米国の3倍にのぼり、ともに世界一を独走している。

⁴ 2021年11月16日付朝日新聞「脱炭素 苦肉の前進」

⁵ 2021年6月6日付朝日新聞グローブ02「最大の風力大国・中国 実質ゼロ前倒しも」

ただ、エネルギー消費全体に占める割合は依然5%程度にとどまっており、6割の石炭、2割の石油には遠く及ばない。

そんな中、2021年3月の全国人民代表大会（国会に相当）で、「60年ゼロ」をめざし、2030年を目標に排出量を減少に転じさせる行動計画を年内に作る方針が決まった。国営企業傘下のシンクタンクの報告書によると、2060年のエネルギー構成は、風力と太陽光が全体の半分を占めている。その設備容量は約35億キロワットにのぼり、この規模は2019年末の世界全体の3倍にあたる。課題は風力や太陽光の電力の安定供給だが、中国政府は蓄電設備や「スマートグリッド」などへの投資を加速することで課題を克服しようとしている⁶。

中国企業は太陽光パネルや電池、陸上風力発電の出荷量で世界トップ10に多くが名を連ねており、再生可能エネルギー分野での国際競争力は急速に高まっている。習近平国家主席は2021年9月、国際的な批判が大きかった石炭火力発電の輸出について停止する方針を表明した。途上国への再生可能エネルギーの輸出を加速することへの布石ともいえそうだ。まずは、巨大経済圏構想「一帯一路」の協力国であるアジアや中東などの国々に照準を合わせ、戦略的な投資を進める構えだ。習氏は「優位な産業における世界の先端の地位を強固にし、世界のサプライチェーンの中国への依存度を高めなければならない」と指示を出している。

V. 気候危機で変わる地政学

米ホワイトハウスは2021年10月、COP26の開幕を目前に、国家安全保障と外交政策の関係部門による気候変動の影響などを分析した各報告書を公表した⁷。米政府の情報機関を統括する国家情報長官室（ONDI）がまとめた気候変動が安全保障に与える影響に関する報告書では、パリ協定の目標達成のために各国が温室効果ガスの排出削減を加速するなか、地政学上の緊張が高まりかねないと指摘した。また、気候変動の影響が顕在化するなか、地政学上の火種が悪化しかねないと予測。温暖化により北極圏の海水が溶けるにつれ、海洋資源や航路をめぐる各国が権益を求めて競争が激しさを増し、対立が深まるおそれがあるとしている。さらに、各地で気候変動による異常気象が頻発し、水資源や人の移動をめぐる紛争のリスクが高まると予測している。

石油や天然ガスといった化石燃料は中東など一部の国・地域に偏在している。各国はこうした資源国からエネルギーをできるだけ安価に調達する道を探り、大国はエネルギー確保のために同盟関係を結んだり、軍力で支えたりしてきた。一方、各国で導入が進む再生可能エネルギーは、その種類や規模の違いがあるとはいえ、至るところで開発・普及する可能性がある。今後、化石燃料への依存度が減り、再生可能エネルギーへの転換が進めば、世界の地政学的な勢力図も大きく変わりかねない。

国際再生可能エネルギー機関の初代事務局長を務めたアドナン・アミン氏は地政学上の関係が変わる可能性を指摘する。「21世紀のいま、再生可能エネルギーの時代に入ろうとしている。風力や太陽光はどの国にもあり、化石燃料の輸入に頼らなくてもかなりの部分、自給できるようになる。石油や天然ガスをめぐって覇権を争う時代は終わり、これからは（再生可能エネルギーをめぐる）イノベーションと技術開発の時代になる」⁸。

脱炭素の流れを加速するなか、再生可能エネルギーの技術力で優位に立つ国が影響力を増すの

⁶ 2021年4月4日付朝日新聞グローブ11「最大排出国中国の挑戦」

⁷ 2021年10月23日付朝日新聞「米、気候変動で『リスク増大』 安全保障への影響分析」

⁸ 2021年6月6日付朝日新聞グローブ04「再エネで変わる地政学」

は間違いなさそうだ。中国企業は太陽光や風力発電、電気自動車（EV）など広範な分野で世界トップ水準の技術力を有するようになった。また、中国政府は産油国を含む途上国に対し戦略的に輸出を進める構えで、これまでの地政学に変化をもたらす可能性があるとみられている。

VI. おわりに

日本政府は2021年、気候変動対策を重視する米国のバイデン政権と歩調を合わせるように、脱炭素へ大きくかじを切る決定をした。菅首相が「2050年までに温室効果ガスの排出を実質ゼロにする」という長期目標と、「30年度の排出量を46%削減する」という中期目標を発表した。また、エネルギー基本計画には、再生可能エネルギーを「主力電源として最優先の原則のもとで最大限導入する」とし、2030年度の電源構成は当初の22~24%から36~38%に引き上げる方針を示した。一方、原発については、可能なかぎり依存度を低減するとしたものの、電源構成は20~22%を維持するとした。

気候安全保障という考え方についても、ようやく、政府内で認識が共有され始めている。2021年の防衛白書は「気候変動が安全保障環境や軍に与える影響」という節を設けた。各国の国防当局が災害対応を求められるケースが増えており、災害対応の強化の必要性が高まっているとして、「気候変動を安全保障上の課題として重大な関心をもって注視していく必要がある」と指摘した。また、2022年の防衛白書でも同じ表題の節が設けられ、米国をはじめ、COP26の議長国の英国での取り組みに加え、北大西洋条約機構（NATO）の首脳会合のコミュニケで、気候変動の安全保障における影響の理解と適応の観点で、NATOが主導的な国際組織となることを目標とし、行動計画を採択したことを紹介している。

COP26で「グラスゴー気候合意」がまとめられ、世界が脱炭素をめざす方向で動き出した矢先、ロシアによるウクライナ侵攻が起き、戦争の長期化が懸念される。米国や欧州、日本などはロシアに対し厳しい経済制裁を科した。そして、その対抗措置としてロシアは石油・天然ガスの輸出を制限した。エネルギー安全保障が崩れ、欧州でも石炭火力や原発に回帰する動きが広がり始め、脱炭素への移行は足踏みを余儀なくされているようにもみえる。しかし、ウクライナ侵攻が改めて想起させたのは、化石燃料への依存した社会経済の脆弱さと安全保障上の脅威ではないだろうか。脱炭素の潮流をさらに加速することが平和と安全を守ることにもつながると日本でも多くの人が気づき始めている。

利益相反について

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

参考文献

- 朝日新聞グローブ編集部 2021年4月4日 朝日新聞グローブ第240号『気候安全保障』東京：朝日新聞社
- 朝日新聞グローブ編集部 2021年6月6日 朝日新聞グローブ第242号『風をつかむ力 エネル

- ギーと国家戦略』東京：朝日新聞社
- 公益財団法人笹川平和財団海洋政策研究所編 2019年『気候安全保障 地球温暖化と自由で開かれたインド太平洋』（阪口秀監修）東京：東海教育研究所
- 防衛省編 2021年『令和3年版 防衛白書 日本の防衛』
- 防衛省編 2022年『令和4年版 防衛白書 日本の防衛』
- National Intelligence Council. 2021. *National Intelligence Estimate, Climate Change and International Responses Increasing Challenges to US National Security Through 2040*.
- Department of Defense, Office of the Undersecretary for policy. 2021. *Department of Defense Climate Risk Analysis. Report Submitted to National Security Council*.

岐路に立つブラジルの民主主義 —ボルソナロ政権下のコロナ禍と政治的危機—

Brazilian Democracy at a Crossroads: Covid-19 and the Political Crisis under Bolsonaro Administration

岡田 玄*
Gen Okada

Abstract

In Brazil, where Covid-19 was discovered in late February 2020, the outbreak has since exploded. Behind this lies a serious socioeconomic problem that has persisted since colonial times, such as the disparity between rich and poor and the fragility of the healthcare system. But the Bolsonaro administration's attitude in confronting this new infection was also a contributing factor. That attitude, in a word, is unscientific and undemocratic.

This report will focus mainly on the activities of the Brazilian federal and state governments during the early stages of the outbreak. This is because the period leading up to the start of vaccination was the most confusing and the time when various countermeasures were put in place.

The "measures" of the authoritarian-oriented Bolsonaro administration were also a challenge to democracy. How did Brazil's democratic system of governance, established after the military regime, react to this challenge? I would like to consider the impact of the unknown infection on Brazilian democracy under the Bolsonaro administration.

I. はじめに

南米ブラジルで新型コロナウイルスの最初の感染が見つかったのは、2020年2月下旬¹。感染はその後、爆発的に広がり、3カ月後の5月22日には感染者数が²、6月12日には死者数が³、米国に次いで世界で2番目に多い国となった。特派員として現地で暮らし、取材する中で、友人、知人、取材先が次々と感染し、時に訃報にも接することになった。

感染急拡大の背景には、貧富の差や医療体制の脆弱さといった、植民地時代以来続く深刻な社

* 朝日新聞前サンパウロ支局長兼ハバナ支局長
Former Sao Paulo and Havana Bureau Chief, The Asahi Shimbun

¹ Agência Brasil, 2020, "Ministério da saúde confirma primeiro caso de coronavírus no Brasil", 26 de fevereiro

² 朝日新聞デジタル 2020「ブラジルの感染者、33万人に ロシア抜き世界2番目」5月23日

³ 朝日新聞デジタル 2020「ブラジルのコロナ死者数が世界2位に 感染菌止め聞かず」6月12日

会経済的な問題が横たわっている。だが、この新しい感染症と向き合うことになったボルソナード政権の姿勢もまた、感染を広げる一因になったと言える。その姿勢とは、一言で言えば、非科学的で非民主的な姿勢である。

本稿では、主に2020年2月から数カ月間のブラジルでの新型コロナウイルスをめぐる政府や州政府の動きを整理する。ワクチン接種がはじまるまでが、もっとも混乱し、種々の対策が打ち出された時期だからである。

権威主義的な志向を持つボルソナード政権のコロナ「対策」は、ブラジルの民主主義への挑戦でもあった。軍政を経て確立されたブラジルの民主的な統治機構が、この挑戦にどのように反応したのか。新型コロナという感染症が、ボルソナード政権下のブラジルの民主主義に与えた影響を考えたい。

II. ブラジルの新型コロナ禍とボルソナード政権の対応

「金持ちの病気で、貧乏人が死ぬ」。ブラジルをはじめとしたラテンアメリカ諸国で、新型コロナの感染拡大初期に広がった言葉である。

2020年のカーニバル期間が終わった直後の2月26日、ブラジルでは、イタリア旅行から戻った男性から、初めて新型コロナウイルスが発見された。しかし、初めての死者は、低所得層出身の人たちだった⁴。当時は、まだワクチンも開発されておらず、治療法も手探りの状態が続いていた。高額な民間の医療保険に加入でき、設備や医薬品のそろった私立病院を受診できる富裕層と、必ずしも医療水準が高いとは言えない公立病院を受診するしかない低所得者層の間にある医療格差が如実に表れた結果だったと言える⁵。

とりわけ、感染の急速な広がりが問題となったのが「ファベラ」と呼ばれる貧民街である。ファベラとは、主に公有地だった場所を不法占拠して作られた貧困地域で、家屋が密集し、上下水道が整備されていないなど衛生状態が悪く、また、住民が十分な教育を受けられていないことも少なくない。感染予防のための社会的隔離（ソーシャルディスタンス）や手洗いなどができなかったり、感染症対策の必要性を理解させることにも困難が伴ったりした⁶。このため、医師らのグループがボランティアで貧困層向けの動画を作るなどして、感染予防の啓発活動に取り組んだ⁷。

こうした努力に水を差したのが、大統領のジャイル・ボルソナードである。

最初の感染確認から1カ月も経っていない20年3月24日、国民向けの演説で「ウイルスは何も心配することがない。ちょっと熱が出て、ちょっとした風邪をひくようなものだ」と述べたのである⁸。さらに、支持者や国民に、路上に出て、「神に祈ろう」と呼びかけた⁹。

⁴ 当初、ブラジルで初めての新型コロナによる死者は3月16日だとされていた。しかし、その後の保健省の調査で3月12日に最初の死者が出ていたことが確認された。Agência Brasil, 2020, “Primeira morte por covid-19 no Brasil aconteceu em 12 de março”, 28 de junho

⁵ 朝日新聞デジタル 2020「金持ちの病気で貧者が殺される」感染拡大国で批判 3月30日

⁶ The Asahi Shimbun GLOBE 2020「感染者世界2位 コロナがあぶり出した格差の現実、ブラジルのスラムで見た」8月3日

⁷ ブラジルの人気キャラクターのモニカがマスクを使うべき理由などを啓発した。
<https://www.facebook.com/fraterno20/posts/pfbid032zfkyYRg2ik3yRXk2wQPKbXtUxW9xf3eU54FzkX7M22HAbbb8WSjXLZ4KqLg236l>

⁸ TV Brasil GOV, 25 de março 2020, <https://www.youtube.com/watch?v=VWsDeYK4STw>

⁹ Correio Braziliense, 2020, “Bolsonaro convoca população a participar de campanha de jejum”, 4 de abril

連邦制のブラジルでは、州政府に保健衛生の権限が与えられている。例えば、サンパウロ州では、マスク着用を義務づけたほか、社会的隔離を実施するため、外出規制を始めた。いわゆる「ロックダウン」だが、欧州ほど厳しいものではなかった。ショッピングセンターや映画館、スポーツジムなどの施設は一定期間、営業停止が命じられた。

だが、ボルソナロは「ウイルスではなく、経済が止まって人が死ぬ」と述べ、州知事らを「ヒステリーだ」などとののしり¹⁰、ロックダウンの即時中止を要求。大統領令で州政府の衛生対策を止めようとしたのである。

そうした中で、ボルソナロ政権の混乱を象徴する出来事が起きた。4月16日、国のコロナ対策を指揮していた保健大臣ルイス・マンデッタが更迭された。マンデッタは医師で、商業活動の停止に賛同を示していたため、大統領と対立したのだった¹¹。後任には、やはり医師で保健省顧問のネルソン・タイシが就任した。だが、タイシもまた、コロナ対策方針をめぐってボルソナロと対立し、1カ月で事実上の更迭となる。タイシの後には、保健衛生分野の経験のない、軍出身の将軍が「保健大臣代理」として据えられた¹²。

この間、感染拡大は止まらず、一部の州では、集中治療室が満床になり患者を受け入れられなくなったり、人工呼吸器で使う酸素が不足したりした。国全体で医療崩壊が起こる可能性が指摘される、危機的な状況が迫っていた。

Ⅲ. 政権が拡散するフェイクニュース

当時、ボルソナロ政権が重視していたことが二つある。一つ目は、外出規制の緩和であり、もう一つが抗マラリア薬「ヒドロキシクロロキン」のコロナ患者への投与解禁だった。

ヒドロキシクロロキンは、マラリア治療薬だが、一部の免疫系疾患にも使われてきた。新型コロナの感染拡大初期のフランスで治療効果があるとされ、米国のトランプ大統領は、この薬を「ゲームチェンジャー」と呼んだ。トランプに近いボルソナロも、この薬の使用を推奨し、感染初期の患者への投与解禁を模索していたが、世界保健機関（WHO）は「有効性は確認されていない」として、20年5月に治験を停止した。

ヒドロキシクロロキンのコロナ患者への使用について、ボルソナロ政権で後見人となったのが医師ニゼ・ヤマグチである。日系人の女性で、腫瘍学や免疫学を専門とするヤマグチは、「ヒドロキシクロロキンはブラジルで長くマラリア薬として使われた実績があり、安価で安全で、コロナにも効果のある薬だ。なぜ、世界中で、この薬を使わせないようにするメディアキャンペーンが行われているのか。それを知りたい」と語った¹³。陰謀論めいたこの主張は、ボルソナロも繰り返し訴えたものだ。

ヤマグチによると、20年4月6日、ボルソナロから直接電話を受け、大統領府でヒドロキシクロロキンの効能について説明するよう求められたという。その後、ヤマグチは正式な任命はないものの、政権で医療アドバイザー的な役割を担っていった。

ボルソナロは「ヒドロキシクロロキンがブラジル人を救う」という主張を、自身のSNSで発信し続けた。同年7月に自身が新型コロナに感染すると、ヒドロキシクロロキンを服用する動

¹⁰ 朝日新聞デジタル 2020「コロナは風邪だ 外出促す大統領 ブラジル感染急増」5月22日

¹¹ 朝日新聞デジタル 2020「ブラジル大統領 外出自粛賛成の保健相解任 市民ら抗議」4月17日

¹² 朝日新聞デジタル 2020「ブラジル保健相が1カ月で辞任 経済再開で大統領と対立」5月16日

¹³ 筆者によるインタビュー（2020年6月8日にオンラインで実施）

画を配信し、「これを飲んでいいる。体調はすこぶるいい」と述べた¹⁴。

こうした情報が拡散されたことで、効能を信じる人たちは、亜鉛などとヒドロキシクロロキンを組み合わせた「コロナ・キット」と呼ばれる薬セットを予防薬として購入し、服用した¹⁵。

ワクチンをめぐっても、ボルソナール政権の非科学的な姿勢があらわになった。

感染者が急拡大していたブラジルは、ワクチン開発に必要な臨床試験（治験）に最適な場所で、医薬品メーカーは相次いで、政府や州政府と治験を実施するための協定を結んだ。サンパウロ州知事ジョアン・ドリアは、中国のバイオ企業「シノバック」社といち早く協定を結び、治験実施と引き換えに、ワクチンを優先的に購入できるようにした。

ところが、この協定が発表されると、SNS上には「中国のモルモットにはならない」など批判的な投稿が、ボルソナールに近い右派の議員などから相次ぎ¹⁶、ボルソナールもワクチンを揶揄する発言を繰り返した。

かねてより、SNS上での誤情報の拡散は、何者かが企図したのではないかとの見方があったが、20年5月下旬、ブラジル連邦警察が情報操作を担う「デジタル民兵」の捜査に着手した。家宅搜索されたのは、「憎悪の司令室」（Gabinete de Ódio）と呼ばれるグループで、ボルソナール支持者のプロガーのほか、ショッピングセンターやスポーツジムの経営者などもいた。経営者たちが資金援助し、プロガーにフェイクニュースサイトを運営させた疑いがもたれている¹⁷。

連邦警察が最高裁に送った文書では、「憎悪の司令室」は、選挙戦の時から偽情報を拡散。偏向したマスメディアが虚偽の情報を流しているなどと、メディアの信頼を失墜させようとし、さらにボルソナールと対立する政治家や裁判所判事などをSNS上で攻撃したという。また、ヒドロキシクロロキンやワクチンなどの偽情報の拡散も担っていた。この「憎悪の司令室」には、大統領の次男で、デジタル発信を一任されているリオ市議会議員のカルロス・ボルソナールが関与していたとみられている。

一連の捜査に対し、ボルソナールは「表現の自由と民主主義を侵す行為だ」として反発している¹⁸。

IV. 歯止めとなった民主的統治機構

ボルソナールは大統領令や拒否権も使い、WHOが推奨する社会的隔離やワクチン接種を妨害しようとした。各州政府が、州の権限で外出規制を行おうとすると、ボルソナールは州政府の決定を覆す大統領令を発出。また、ワクチン接種に必要な注射器を購入しないなどの嫌がらせも行ったという¹⁹。

こうした「大統領の暴走」を止めたのが、最高裁判所判事アレシャンドレ・デ・モラエスだ。モラエスは、保健衛生の権限は、連邦政府ではなく、州や市などの地方自治体にあると判断。また、政府がコロナ感染者数や死者数の公表を取りやめた時も、公表の再開を命じるなど、複数の大統領

¹⁴ 朝日新聞デジタル 2020「ブラジルの感染者200万人を突破 カーニバル中止も」7月17日

¹⁵ 朝日新聞デジタル 2021「大統領が推すコロナ薬 WHO非推奨、でも売り上げ4倍」4月19日

¹⁶ 朝日新聞 2020「ワクチン治験、集まる注目 コロナ感染急拡大のブラジル 医師『理想的な場』／反発も」6月23日

¹⁷ 朝日新聞デジタル 2020「ブラジル大統領支持者らを捜査 フェイクニュース関与か」5月29日

¹⁸ Estado de São Paulo, 2022, “Bolsonaro e o “Gabinete do ódio”: entenda as investigações da PF”, 11 de fevereiro

¹⁹ 朝日新聞デジタル 2020「大統領と知事、違うワクチン推し ブラジルで政争の具に」10月17日

領令や拒否権行使を無効と判断した。「憎悪の司令室」事件も担当し、連邦警察に捜査を命じた。

ボルソナローは支持者集会などで「最高裁が民主主義を破壊している」と批判を繰り返し、22年8月には、職権乱用を理由にモラエス判事を提訴するに至った²⁰。ボルソナローや支持者による裁判所への威圧は続けられているが、司法は独立した判断を続けている。

また、連邦政府のコロナ対策が進まず、むしろワクチンの承認遅れなど妨害とも言える状況が存在したが、憲法で確立された地方分権により各州で必要な施策を進めることができたことも指摘しておきたい。もっとも、州の財政や処理能力に左右された面はいない。ブラジル北部アマゾナス州では酸素や医療器具が不足し医療崩壊が2度起きた。しかし、世界で需要が高まる中、こうした資機材の州単独での調達はずかしく、連邦政府の支援が不足していた。

立法府による責任追及も始まっている。上院は21年4月、特別委員会を招集し、ボルソナロー政権の新型コロナ対応の検証を始めた。1300ページにおよぶ報告書を半年かけてまとめ、ボルソナロー政権が「集団感染による集団免疫」を目指していたと結論づけた。

報告では、ヒドロキシクロロキンを推奨するに至った経緯についても明らかにされた。医師や側近で作る「裏の内閣」と呼ばれるグループが、ボルソナローの判断に影響を与えていたと指摘した。

この特別委には、大統領選と同時に行われる統一選を前にした、政治的なパフォーマンスという側面もあった。だが、立法府による検証過程で、連邦政府によるワクチン購入をめぐる汚職なども明らかになっている²¹。

司法による大統領令無効の判断、州政府による独自の公衆衛生政策、国会の独立した委員会による行政の検証。こうしたことを可能ならしめたのは、軍事独裁政権から民政移管後の1988年に制定されたブラジル憲法である。

88年憲法は、権威主義体制を離れ、立憲民主制の確立をめざしたもので、旧憲法よりも議会に権限を移し、大統領の権限を縮小し、立法権による行政権のコントロールを強化した。また、軍政時代に常態化していた連邦政府や軍による州政府や司法への干渉を問題視し、州と司法の自立性も高めた。こうした規定が図らずも、軍政を賛美する権威主義志向のボルソナロー政権下で機能したと言える。

また、政権やボルソナロー支持者から敵視され、取材する記者が暴力にさらされた²²マスメディアも「第4の権力」として重要な役割を果たした。政府がコロナ感染者数と死者数の公表を取りやめた際には、政府に公表再開を迫るだけでなく、ライバル関係にある大手メディアがコンソーシアムを組み、最新の感染者数と死者数の集計を続けた²³。ボルソナローや支持者による誤情報に対し、ファクトチェックを繰り返している²⁴。

しかし、憲法が用意した統治機構やメディアによる問題提起が機能したのは、多数の市民による支持があったからにはほかならない。外出規制により集会が制限された状況だったが、市民はSNSで連携し、鍋たたきによる抗議活動パネラッソ（panelaço）を全国で展開した。ボルソナローによる国民向けのテレビ演説にあわせて行われ、家々の窓から鍋をたたいて、抗議の声を上げたのである。

²⁰ Ana Flor, 2022, “Bolsonaro acusa Alexandre de Moraes de abuso de autoridade e apresenta ao STF notícia- crime contra o ministro”, *G1 Globo*, 17 de maio

²¹ 朝日新聞デジタル 2021 「『故意に感染させよう』 ブラジル上院委大統領訴追を支持」10月27日

²² Humberto Martins, 2020, “Ameaças e xingamentos de Bolsonaristas fazem Globo e Folha deixarem cobertura no Alvorada”, *Estado de Minas*, 25 de maio

²³ コンソーシアムの集計を元に、日々の感染者数、死者数が報じられ続けている。
<https://core.ac.uk/download/pdf/288449594.pdf>

²⁴ 朝日新聞デジタル 2020 「『ブラジルはうその犠牲者』 国連総会の大統領演説に波紋」9月24日

V. おわりに

ブラジルでは、2018年の大統領選の段階から、すでに社会の分断は激しくなっていた。このころ、左派の労働者党のカリスマ政治家ルイス・イナシオ・ルラ・ダシルバ元大統領が汚職疑惑で有罪判決を受け、左派への幻滅が広がっていた。この空気をすくいとり、過激な左派批判をして支持を集めたのがボルソナロであった²⁵。

極右的政策を進めるのではないかと懸念されたボルソナロ政権は、表向きは「ソフト路線」だった。最初に取り組んだのは、積年の課題だった年金改革で、これによりブラジル経済もわずかながら上向き始め、左派からは根強い批判を受けながらも、ボルソナロは中間層や低所得層からも支持を集めた。

その流れを変えたのが、新型コロナであった。大統領令を乱発し、拒否権を発動する強権的な姿をあらわにした。非科学的な政策を押し通し、陰謀論を振りまいて社会の分断をさらに深めた。政権が内包していた危うさを新型コロナが浮き彫りにしたといえる。

22年10月30日に行われたブラジル大統領選決選投票では、左派の元大統領ルラが得票率50.9%で接戦を制し、返り咲きを決めた。事前の予想ではルラの1回目投票での当選も取りざたされていたが、ボルソナロが予想を大幅に超えて得票。決選投票でもわずか1.8ポイント差まで追い詰めたが、及ばなかった。

開票後、危惧されていたのは、かねて選挙不正を訴えていたボルソナロが政権に居座ることだった²⁶。ボルソナロは、慣例となっていた敗北を認める電話をルラにかけなかった。また、支持者たちも結果を受け入れず、高速道路を封鎖したり、軍に決起を求めたりした。ボルソナロが会見を開き、「憲法に従う」と述べて事実上の敗北受け入れを表明したのは、結果確定から40時間以上が過ぎてからだった。

ルラは当選が決まると、自身の勝利を「ファシズムに対する民主主義の勝利だ」と演説した。本稿で見たように、コロナ禍で直面したブラジルの民主主義の危機は、88年憲法で確立された民主的な統治機構、言論の自由を守るメディア、市民によりかろうじて守られていた。ルラの勝利は確かに、こうした流れに位置づけることはできるだろう。

しかし、民政移管後で最も僅差での勝利であり、それは汚職疑惑を抱えるルラや左派への反発が根強く残っている証左でもある。ブラジル社会の分断が改めて示された選挙結果だったと言えるだろう。大統領選中には、対立をあおったり、相手陣営の信用をおとしめたりする、多くのフェイクニュースが拡散されたとの報道もある。嵐が過ぎ去ったわけではない。むしろ、ブラジルの民主主義は岐路に立ち続けているのである。

利益相反について

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

²⁵ 朝日新聞デジタル 2018「『ブラジルのトランプ』軍政賛美の極右候補が大統領に」10月29日

²⁶ Oliver Stuenkel, 2021, "Democracy Is Dying in Brazil: To Stop Bolsonaro, the Opposition Must Unite", *Foreign affairs*, November 1.

参考文献

阿部博友 2020年『ブラジル法概論』 大学教育出版

岡田玄 2020年「『感染否定』ボルソナーロ大統領の崖っぷち」『外交』61巻：90-93.

矢谷通朗 1991年『ブラジル共和国憲法』 アジア経済研究所

Federico Finchelstein, 2018, “*Del fascismo al populismo en la historia*”, Buenos Aires, Taurus

Steven Levitsky y Daniel Zibellatt, 2018, “*Cómo mueren las democracias*”, Ciudad de México, Ariel

ハイウェイの記憶—ルート 66 のアメリカ—

What the Highway Remembers: Route 66 and America

宮脇 俊文*
Toshifumi Miyawaki

Abstract

This thesis analyzes the harsh reality laid on the reverse side of the American dream that John Steinbeck vividly described in *The Grapes of Wrath* (1939). Steinbeck obviously underscores that the United States, which is the land of the American dream, has taken the wrong route and put unfortunate people like the Dust Bowl migrants in a cruel predicament. Has this country rightly come back to the path which it was supposed to take from the outset as the promised land, or is it still taking the wrong course even now?

Route 66, which the protagonist Tom Joad and his family take in the novel, still winds through people's fantasies today even after it was officially removed from the United States Highway System in 1985. Why are people still fascinated with this old highway? What has this highway witnessed about American history? Running along this highway with the Joad family, and with Woody Guthrie and Bruce Springsteen who sing for oppressed people, I will examine the present state of the country by analyzing Jessica Bruder's *Nomadland* (2017) to see how things have changed since the 1930s. Is the American dream still alive? Is California still a promised land for American people? What lessons have been learned from the Dust Bowl, which dispossessed the Joad family? Route 66 has been a witness to so many aspects of American history. The highway itself carries its own memories while continuing to capture the imagination of so many others even today.

I. 序章

「西に車で旅するなら、この道がお薦め。最高のハイウェイだよ」——これはボビー・トゥルーブが1946年に作詞、作曲したポピュラー・ソングで、ナット・キング・コールをはじめ、多くのアーティストによってカバーされてきた「ルート 66」の一節である。今ではスタンダード・ナンバーとなり、世界中の人々に愛聴され、口ずさまれている。このイリノイ州シカゴからカリフォルニア州サンタ・モニカまでの、全長3755キロに及ぶ国道66号線を愛車で走れば、最高の気分が味わえるよと歌ったものだ。軽快なメロディーのこの歌を聴くと、誰もが一度はこのハイウェイを走ってみたいと思うに違いない——“Get your kicks on Route sixty-six.”

ルート 66 は歌がヒットするずっと前の1926年にアメリカ最初の国道の一つとして創設され

* 成蹊大学名誉教授 Professor Emeritus, Seikei University

た。その後、インターステートと呼ばれる州間高速道路の発達により、この国道は1985年に廃線となったが、この間この道路はアメリカの歴史を見つめ続けてきた。その長距離に及ぶルートにはアメリカの記憶が刻み込まれている。そんな多くの記憶の中には、この歌のようにアメリカの経済発展を謳歌するような楽しいものもあれば、その逆のものもある。そこにはアメリカの光と影が映し出される。

この旧国道には、廃線となった今も、アメリカのみならず全世界から多くの観光客が訪れる。ゆっくりと時間をかけて、沿道の小さな町に立ち寄りながら、かつて栄えた国道を辿っていく人々はそこに何を求めているのだろうか。単なるノスタルジーか、それとも我々が急速な文明の発展の中で置き去りにしてきたものをもう一度取り戻そうとしているのか。そこにしかない真実を求めて人々はこのルートを辿るのか？確かにそこには夢と希望を抱きながら労苦に耐えてきた庶民の歴史がある。それは、いかに辛い過酷な日々が続こうとも、いつかはきっとこの手でつかむのだと信じて歩んだアメリカン・ドリームへの道だった。

そんなロマンチックな幻想に浸らせてくれるルート66ではあるが、実際叶えられた夢もあれば、叶えられなかった夢もある。まさに光と影の両面をこのルートは目撃してきたわけだが、その影の部分の記憶には実に過酷なものがある。それは、「ダスト・ボウル」によって難民となった人々がカリフォルニアを目指したという歴史だ。それはあの歌にあるような世界とはかけ離れたものであり、その現実はいかに過酷で残酷なものであった。

ダスト・ボウルとは1930年代、オクラホマ州やニューメキシコ州などのアメリカ南西部を襲った砂嵐のことである。それはロッキー山脈とミシシッピ川の間に位置するグレート・プレーンズと呼ばれる大草原地帯を長期に及んで何度も襲った。

この自然災害は干ばつや土地の浸食によってもたらされたものだが、それは単なる天災ではなく、人災でもあった。もともとこの地域にあった天然の草原を開拓し、栄養分をたっぷりと含んだ土地の表面部分をむき出しにしてしまったために土地の侵食が始まったのである。人の背丈ほどもあるこの地域の草原は大地にしっかりと根をはっており、植物が生息するのに必要な大地の表面をしっかりと安定させていたのだ¹。

こうした砂嵐に至る経緯は、パレ・ローレンツが1936年に制作した短編ドキュメンタリー映画『平原を壊した鋤』(*The Plow That Broke the Plains*)を観れば明らかだが、この作品の主人公は、その導入部のナレーションにあるように、人々よりはむしろ土地そのものである。それは大地と耕作地の記録だが、資本主義の無秩序な土地の乱用によって、結果的には人々はそこで耕作を続けることも住むこともできなくなっていったのである。この映画はスタインバックに大きな影響を与えたが、彼は『怒りの葡萄』の構想に当たり、個人的に親しくなったローレンツから多くの示唆を得ている²。

これは無知な人間が自然の法則に逆らった結果だが、こうした悲劇は今も地球のあちこちで続いている。CO2や温室効果ガスの問題など、我々は多くの課題を抱えている。1929年の世界大恐慌のあおりも受け、もはやこの地で農業を営むことができなくなった人々は、生き延びるために、当時「楽園」と噂されていたカリフォルニア州を目指すこととなった。彼らはそこに行けば、また以前のように家を持ち、豊かな生活ができると信じていた。そんな農民たちが辿ったのがルート66であり、彼らの移動の様子を描いたのが、ジョン・スタインバックの『怒りの葡萄』(1939)である。それはまさに30年代の砂嵐難民たちのディアスポラの物語だ³。彼らは住み慣

¹ Ryan Schleeter 参照。

² Seed 195. Shillinglaw もこのドキュメンタリー映画が『怒りの葡萄』に多大な影響を与えたことを指摘している。75-76.

れた家と土地を後にし、当時活気を帯びていたルート 66 を走り、ひたすら西へと進んでいった。そこには必ず希望があると信じて。しかし、その道程は決して夢に支えられた楽しいものではなかった。むしろ、過酷以外の何ものでもなかった。これは一家を支えながら、楽園へと導こうとしたトム・ジョードの物語である。

この小説が出版されると、それはたちまちベストセラーとなり、一年以内にジョン・フォードにより映画化されたが、それは小説を凌ぐ勢いの人気を博した。こうしてそれまではカリフォルニア州だけのものであったダスト・ボウルによる難民問題は、急速に全米、そして全世界の関心事となり、この新たに流入してきた貧しい移民たちをカリフォルニア州がどう扱うかに注目が集まるようになった⁴。

スタインバックはルート 66 をこう描写している。

国道六六号線は移住者たちがたどる主な道路だ。六六号線——この国を横切る長いコンクリートの道路は、ミシシッピ川からパイカーズフィールドまで、地図の上でゆるやかに波打って走っている。赤い土地を通り、灰色の土地を過ぎ、曲がりくねりながら山岳地帯に入っていき、大分水嶺^{ぶんすいりょう}を越え、まばゆくも怖ろしい砂漠におりる。砂漠を渡りきれば、ふたたび山にあがり、その向こうの豊かなカリフォルニアの平地に入っていく。

短いながらも、実に的確に言い表わしている。この道を一度でも走ったことのある人間なら、その光景が鮮明に蘇るにちがいない。スタインバックはさらに続けて、人々がなぜこの国道を移動することになったかを説明する。

六六号線は逃げてくる人たちの通り道だ。人々は砂埃に荒らされた土地から逃げてくる。轟音を立てるトラクターに土地を追われて逃げてくる。南から北へゆっくりと侵略してくる砂漠から、テキサスから吠えたけりながら吹いてくるつむじ風から、土地を富ませず逆にけなしの財産を奪っていく洪水から、逃げてくる。それらすべてから人々は逃げだし、枝道から、幌馬車時代の旧街道から、わだちのついた田舎道から、六六号線に乗ってくる。六六号線は母なる道、逃亡の道だ。(119)

これこそがまさに農民たちが「砂嵐難民」となり、カリフォルニアを目指すこととなった原因である。またトラクターに追い立てられる描写は、機械化による大規模農業によって、小作農たちの居場所が失われていく様子を物語っている。ルート 66 は「逃亡の道」なのだ。彼らは仕方なく愛着のある土地を後にし、そこから逃げ出してきたのだった。そんな彼らをじっと見つめ続けたルート 66 は、「母なる道」だったのだ。それは物語の最初から最後まで一家を守り続ける力強い母親マー（Ma）と重なる。スタインバックがこの道路をこう描写して以来、ルート 66 は「母なる道」と呼ばれるようになった。

この道路は、「六六号線を走ってみな。国じゅうから車が来てるぜ。みんな西へ行くんだ。前はこんなに多くなかったけどな。中には洒落た車もあるよ」(159) とあるように、貧しい農民たちが通る道である一方、裕福な人々のレジャーの道でもあった。「沿道に栄える様々な商売は、道路と自動車の発達によって生み出され、人々が追い求める『アメリカン・ドリーム』の片棒を

³ Shillinglaw xi.

⁴ Gregory 97.

担ぐ役目を担わされている」(加藤 160)。

また1960年代には「自由を求めてカリフォルニアへ向かう若者たちが放浪する道としてのイメージが強く、いまでもルート66はアメリカ的な郷愁を呼び起こす」。しかし、トム・ジョードの時代のルート66は、「一九六〇年代のテレビドラマや大衆音楽が伝える郷愁とは異質の」道路であった。

スタインベックは作中のところどころにこの国道沿いに残る古きよきアメリカの姿を書き込んでいる。それでもなお『怒りの葡萄』のルート66は、「約束の地アメリカ」という言説がいかに欺瞞に満ちたものであるかを告発しているのである。(金澤 235-36)

カリフォルニアはアメリカ人にとって常に夢の土地であった。そこは豊かな可能性に満ちた場所であったが、その幻想は打ち砕かれてしまう。『怒りの葡萄』に描かれたカリフォルニアはもはや楽園ではなかったのである。夢のカリフォルニアはなぜこれほどまでにジョード一家を厳しい現実へと追いやるのだろうか。この物語は旧約聖書の「出エジプト記」になぞらえて語られているが、この一家にとっての「約束の地」がカリフォルニアではなかったのだとしたら、それはどこにあるのだろうか。あるいはそれはもはやどこにも存在しないのだろうか。アメリカそのものが本来「約束の地」であったはずだが、その最後の「約束の地」である西部カリフォルニアに裏切られた人々はどこへ向かえばいいのだろうか？これは1930年代の砂嵐難民だけの問題ではなく、その後のアメリカが直面する数々の難題にもつながるものである。

皮肉にも歴史は繰り返し、30年代のオクラホマの問題が今ではカリフォルニアの深刻な問題となっている。そこはもはや美しい楽園ではなくなりつつあるのだ。高温と極端な乾燥による大規模な山火事により、この楽園は灰に覆い尽くされようとしている。それは、もう一つのアメリカ文学の傑作であるF・スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』(1925)に描かれた「灰の谷」(21)を想起させる。かつては「ういういしい緑の胸」(140)であった処女大陸が徐々に灰で覆い尽くされていったように、カリフォルニアも今や同じ状況に直面しつつあり、もはや住めない場所となる危険性が出始めている。少々大げさに聞こえるかもしれないが、この問題はもはや楽観視できない段階に来ている。

砂嵐難民の多くは、スタインベックの生まれ故郷であり、その人生の多くの時間を過ごしたカリフォルニア州のサリーナス溪谷に行き着くことになったが、彼らの移住のことを含め、この作家はカリフォルニアの州としての形成、また環境と人間との関係にも大いに関心を寄せていた。したがって、こうしたテーマが『怒りの葡萄』の中核をなしているのは当然のことである⁵。

スタインベックはこの州が「堕ちた楽園」と化するのではないかと常に心配していた。この楽園はかつて「砂嵐難民」を温かく受け入れようとはしなかった。そして、今日ではかつてのオクラホマのような深刻な環境問題を抱えている。差別の問題から環境の問題へとその形を変える「楽園」は、現在多くの深刻な問題に直面している我々の世界の「小宇宙」と化しているようだ。

アメリカはどこでその進むべきルートを間違えてしまったのか。彼らはたださまよい続けるしか道はないのだろうか？本論ではスタインベックが描いたアメリカの夢の裏側にある厳しい現実を分析しつつ、その後のアメリカがいかにしてその本来のルートに戻ることができたのか、あるいは戻れないままに今もさまよっているのかを検証していきたい。廃線になった今も人々の心を捉えてはなさないルート66が目撃してきたアメリカの現実とはいかなるものか。ジョード一家

⁵ Ryan Schleeter 参照。

とともにこのハイウェイを走りながら、1930年代から今日までのアメリカを見ていきたい。

Ⅱ. 「約束の地」を求めて：スタインベックの『怒りの葡萄』

ジョン・スタインベックは、ダスト・ボウル難民となって、カリフォルニアを目指してきた農民たちに特別な思いを寄せていた。彼は子供のころからこの地に仕事を求めてやってくる多くの移民たちを見てきた。中には成功を収めていい暮らしを手に入れた人々もいただろうが、その多くは厳しい現実と闘っていた。スタインベックはそういう苦難の中にある人々に共感を寄せていた。その結果として、『怒りの葡萄』という大作を書くこととなり、ノーベル文学賞を受賞するに至った。アメリカ文学の名作と呼ばれる作品は数多いが、搾取される労働者の側に立って、これほどまでに力強く、またリアリティをもって描かれた作品は少ない。我々は読み進めるうちにジョード一家の一員となり、いつしか共に旅をしていることに気づく。そこにあるのは、同情ではなく共感そのものだ。読者は常に彼らと共にあり、その苦悩を分かち合うのだ。立場は違っている、時空を越えて現代に生きる人々にも通じる何かがそこにはあるからだ。

物語は砂嵐で荒廃したオクラホマの農場の様子を描いた第1章に続き、第2章は主人公のトム・ジョードが4年間の刑務所生活を終え、仮出所してくるところから始まる。これはこれから彼とその一家を待ち受ける厳しい現実と苦難の物語だ。この作品は、過酷な現実を描いたストーリーの展開の間に叙情的とも言える文体の情景描写が挟み込まれている。これらが交互に描かれる構成になっているため、読者はほっと息抜きをする機会が与えられる。このバランスなくしては読み続けることが辛くなるほど、この作品の内容は強烈なものとなっている。

ジョード一家のみならず、多くの農民たちの夢がことごとく砕かれていくというのがこの作品に描かれた現実である。カリフォルニアに行けばきっと元のような生活に戻れるといった些細な夢でさえ、実際には夢のまた夢であるのが現実だ。それは『グレート・ギャツビー』においても同じことである。つまり、夢はことごとく打ち砕かれるのだ。「約束の地」アメリカにおけるアメリカの夢とは結局何なのだろうか。人々はそもそも夢を抱いてはいけぬのか。なぜ社会は彼らのひたむきな努力を認めてはくれないのか？常にそこに立ちのびるのは資本家や上流階級の人たちだ。それがアメリカの現実である。あるいは資本主義社会の現実というべきか。

『グレート・ギャツビー』の最終章にこんな描写がある。

[ギャツビー] は、長い旅路の果てにこの青々とした芝生にたどりついたのだが、その彼の夢はあまりに身近に見えて、これをつかみそこなうことなどありえないと思われたにちがいない。しかし彼の夢は、実はすでに彼の背後になってしまったことを、彼は知らなかったのだ。(141)

努力して、苦勞を重ね、長い道のりを歩んできたあげくに、あと少しで手が届くはずのものがもうそこにはなかったという現実、ジョード一家の場合と見事に重なりはしないだろうか。ギャツビーにとって、ジョード一家にとって、楽園はもはや存在しなかったのだ。長い旅路の末、初めてカリフォルニアの光景を目にしたトムの妹ルーシーの言葉、「カリフォルニアだ」(227)が虚しく響く。この時の一家の心境は初めてアメリカに到着した移民たちのものと同じであつたに違いない。結局、彼らの夢を打ち砕いたのは、そこにのし上がろうとする人々を搾取しながら私腹を肥やしていく資本家階級なのだ。

この作品の主人公トムが犯罪人であり、まだ保護観察下にあるにもかかわらず、掟を破ってオクラホマの州外に出ていく点を見逃してはいけない。読者はかりに物語の主人公が犯罪人であったとしても、そこに社会のシステムに立ち向かっていく姿勢があれば共感を覚えるのだ。これはいわゆるアメリカ文学最大の特徴である「アンチ・ヒーロー」像であり、それこそがアメリカ文学の神髄だと言える。社会の模範となるような人物ではなくとも、その生き方が体制側に立ち向かっていくものであれば、読者は無条件に応援したくなる。そして、結果的にトムは伝説となり、後世にその名を残す存在となっていく。後に詳しく述べるように、彼の「亡霊」は現代の世界の中にも出没している。

「母なる道路」の旅は夢にあふれてはいるものの、決して楽なものではない。むしろ地獄のような体験が次から次へと彼らを待ち受けている。しかも、それに追い打ちをかけるかのような新たな問題が彼らにふりかかる。それは「差別」の問題である。やっとの思いで夢の地カリフォルニアに到着したにもかかわらず、彼らは「オーキー」として差別、排除の対象となっているのだ。道中、彼らはオーキーのことを耳にする。

「昔はオクラホマの人間という意味だった。それがいまは、汚いくそ野郎って意味だ。人間の屑って意味だ。言葉そのものはなんでもないが、言い方で嫌な感じになる。口じゃ説明しきれないよ。実際に行ってみるしかない。聞いた話だと、おれたちみたいなのが三十万人ほどこっちに来てて——豚みたいな暮らしをしてるらしい。カリフォルニアでは全部もう誰かのものだからだ。何も残ってないからだ。何かを持ってる連中は必死でそれにしがみつくと、それを守るためなら人殺しもしかねない。そんなわけで連中は怖がってて、そのせいで腹を立ててる。その目で見てくるといい。その耳で聞いてくるといい。見たこともないほどきれいなところだが、あそこの連中はあんたらに優しくないよ。やつらはえらく怖がってて、不安がってて、自分ら同士ですら優しくないんだ」(205)

そこには砂嵐難民たちのような団結力や人間愛は存在しない。人々は自分の利益を守ることでも死ななのだ。こうして生まれた格差は、後で言及するように、今日もますますその規模を増大させて続けている。こうして「約束の地」カリフォルニアで彼らの新たな苦難が始まるわけだが、これは正確に言うところ人種差別ではない。^{エイリアン}「よそ者」に対する差別意識だ。彼らは外国からの移民と同じ扱いを受けたのである。れっきとしたアメリカ市民であるにもかかわらずだ。自分の国にしながら、よそ者扱いをされる人々。

流れ者どもめ。よそ者どもめ。

なるほどやつらは英語を喋るが、われわれと同じじゃない。見ろ、やつらの暮らしぶりを。おれたちはあんなふうにも暮らせるか。とんでもない！(235-36)

これはジョード一家に対して一人の警官が吐くせりふだが、多くの人々の考えを代弁しているとも言える。新参者が外国人と見做されるのは、この作品に限ったことではない。それは『グレート・ギャツビー』にも見られる現象だ。そこでは旧移民と新移民の間に大きな溝があり、前者は後者を見下している。

オーキーには「くたくたの負け犬」のイメージが定着しているが、なぜ人はよそ者をこのように敬遠し、軽蔑するのか？これは人種やどこの国から来たかには関係のないことであり、「外集団」に対する「内集団」(687)の行動だとグラッドスタイン (Gladstein) はいう。これが事実

だとすれば（残念ながら事実だが）、解決策を見い出すのは至難の業ということになる。言語や文化など、違ったバックグラウンドを持つ人々が自分たちのコミュニティに入り込んでくることに不安を感じることを責めることはできない。安定した集団の中に、異邦人が別の新たな集団を形成することに違和感を覚える人間は少なくない。ではどうすればいいのか。こうした問題にスタインベックは頭を悩ませたに違いない。果たして我々読者は『怒りの葡萄』にその解決策を見い出せるのだろうか？

よそ者扱いはさらに続く。

「おまえがいるのはおまえらの国じゃない。カリフォルニアだ。おまえらオーキーが居座るのはお断りなんだ」

母ちゃんは足をとめた。怪訝な顔をした。「オーキー？」小さく言う。「オーキー」

「ああ、オーキーどもがな。明日来てまだここにいたら逮捕するからな」男はくると背を向け、つぎのテントへ行って手でキャンパスをたたいた。「ここにいるのは誰だ」
(213-14)

「オーキー」に限らず、グラッドスタインはアメリカには移民に対する蔑称が多く存在することを指摘している。しかし、このオーキーたちはアメリカ人であり、それもアングロ・サクソン系の人々であるにもかかわらず、多くの移民と同様に偏見の目で見られている。彼らは挙げ句の果てには、ゴリラと同様の扱いをされ、さらには南部の黒人たちと同一視される始末だ。しかし、カリフォルニアの農業は彼らの労働力に頼っているのだ。

それは南北戦争以前のアメリカを彷彿とさせる。アフリカから強制連行された黒人奴隷の実態と何ら変わらない。奴隷制は廃止されても、ルート 66 は新たな形態の奴隷制を目撃したのだ。唯一の違いは、それが黒人ではなく貧しい白人農民であるという点だ。それは 20 世紀の奴隷制だが、この構図は資本主義社会である以上必ず存在する。それは双方にとって有益な関係でなければならないはずだが、残念ながら現実はそうではないことが多い。『怒りの葡萄』に描かれるこの関係は最悪の状態であると言える。それは一方的で強欲な資本家側の利己的姿勢が原因である。彼らは労働者を人間扱いしていない。最低の賃金で最大限働かせることしか頭にはない。労働者は家畜同然に扱われているのだ。シリングロー（Shillinglaw）は、「正義」のために闘っているという点において、ハリエット・ピーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』と『怒りの葡萄』との間に共通点を見出している。(100)

『怒りの葡萄』に描かれたこうした差別の問題が今なお続いているように、この作品には多くの現代性が含まれている。それは移民・難民の問題に始まり、格差の問題、そして環境破壊の問題にまで至っている。いずれも深刻な問題であることは事実だが、中でも地球の環境破壊は今すぐに取り組まなければ取り返しのつかなくなる問題である。これはそもそも資本主義の強欲さによってもたらされたといってもよい。結局は難民の問題もすべてそこにつながってくるのではないか。そうした今日の問題をこの作品は予言していたとも解釈できる。スタインベックが未来の予言を目的としていたかどうかは別として、我々はこの作品の今日性を読み取るべきである。

現代人にとって「約束の地」は存在するのか。あるとすればそれはどこにあるのか。作品の最後の場面でのローズ・オブ・シャロンの「神秘的な微笑み」は何を意味するのだろうか。彼女に「約束の地」は用意されているのだろうか？ ジョード一家はカリフォルニアに「乳と蜂蜜」を求めてやって来たが、最後はローズ・オブ・シャロンが自らの「乳」を見ず知らずの同胞に与える形で終わる。この場面の必要性については多くの議論が交わされてきたが、スタインベック自

身、これを削除する意志はまったくなかった⁶。

しばらくのあいだ、ローズ・オブ・シャロンは雨のささやきに満ちた納屋の中でじっと坐っていた。それから疲れた身体を引きあげるようにして立ちあがり、掛け布団を身体に巻きつけた。ローズ・オブ・シャロンはゆっくりと部屋の隅へ足を運び、男の衰弱しきった顔を、怯えて大きく見開いた目を、見おろした。それからゆっくりと男のかたわらに身体を横たえた。男はゆっくりと首を横に振った。ローズ・オブ・シャロンは掛け布団の片側をはだけて、片方の乳房をあらわにした。「飲まなきゃだめ」ローズ・オブ・シャロンは身をよじるようにしてさらに近づき、男の頭を手で引き寄せて、「さあ！」と言った。

「さあ」男の頭のうしろに回した手を動かして、頭を支えた。指が髪の中で優しく動いた。ローズ・オブ・シャロンは顔をあげて、納屋の向こう端を見た。唇が合わさり、そこに神秘的な微笑みが浮かんだ。(453)

ここをどう解釈するかは、いろいろと意見が分かれるところだろうが、一つ確実に言えることがある。それは、「約束の地」に裏切られ、夢破れ、瀕死の状態にある難民が最後に手に入れたのが、他でもない仲間の人間が提供してくれる母乳であったという点だ。それは夢見ていた「約束の地」の「乳」のうちのほんの一滴にも満たないものかもしれないが、そこには同胞の愛がある。独り占めするのではなく、みんなで分かち合うのだという抑圧される者同士の連帯感がある。かりに自分が困ることになろうとも、仲間を決して見捨てないという強い精神がある。それは後に詳しく述べるウディー・ガスリーの「我が祖国」(This Land Is Your Land)の歌詞の精神でもある。祖国の土地はみんなのものなのだ。誰かが独占するものではない。「アメリカン・スピリット」とはこうしたものではなかったのか。それはいつどこでどう道を間違え、さまよう羽目になってしまったのだろうか？ スタインベックは、民衆のために歌うウディーを民衆そのものだと捉え、その歌には抑圧に耐え、それと闘おうとする意志があるとし、それこそが「アメリカン・スピリット」と呼べるものだろうと言っている⁷。

トム・ジョードを待ち受けていたのは、一言で言えばアメリカの強欲な資本主義である。それはあまりにも過酷な実態であり、人々を苦しめる以外の何ものでもない。そこにアメリカ建国の理念や理想は微塵も感じられない。あるのは「搾取」のみである。それでも彼らは資本家の言いなりになるしかなかった。とにかく生きるためにはそうするしかなかったのだ。そんな中、労働組合結成の動きが出てくる。それは一部の農民の心を動かすが、多くは最初から諦めてしまっている。しかも、資本家側は執拗にこうした反抗分子を叩き潰そうとする。そこにアメリカの「自由」や「民主主義」は存在するのだろうか？

先に述べたように、後に伝説的存在となっていくトム・ジョードは、この物語の進行とともに大きく成長していく。ジョード家とともに旅をするジム・ケイシー (Jim Casy) は、そのイニシャルJCがイエス・キリスト (Jesus Christ) を暗示するように、元説教師であった人物である。彼は旅を続ける中で、不当に扱われる労働者のために立ち上がろうと決意する。しかしその意志は最終的には体制側によって絶たれてしまう。労働者を組織しようとした彼は撲殺され、しかもその場にいたトムはケイシーを殺した警備員を殺すことになり、再び犯罪人となってしまう。そんなアンチ・ヒーローのトムはその後ケイシーの遺志を継ぐことを生きる目的とする。彼

⁶ Letters 178.

⁷ America and Americans 226.

は母親との別れの場面でケイシーが残した言葉を口にする——「人間てのは自分だけの魂を持っているじゃなくて、大きなひとつの魂のひとつかけらかもしれない」。それはまさにケイシーの意志であり、人間の団結の大切さを訴える言葉だ。

トムは続けて次のように言う。

おれの魂は暗がりのそこら中にいるってことだ。母ちゃんがどこを見たって——おれはそこにいるってことだ。飢えるのはごめんだといって喧嘩するやつがいたら、おれはそこにいる。お巡りが誰かをぶちのめしてたら、おれはそこにいる。ケイシーの言うとおりに、みんなが怒って怒鳴ってるとき、おれはそこにいる——腹をすかした子供らがもうすぐ晩飯ができると知って笑ったとき、おれはそこにいる。みんなが自分で育てたものを食って、自分で建てた家に住むようになったとき——おれはそこにいるんだ。(419)

こう言ってトムは物語から姿を消す。スタインバックはそうすることでトムに「永遠の生」を与えているのだ。彼はこの後ふたたび物語に登場することはない。しかし、繰り返すが、彼はその後も亡霊となって世界のあちこちに出没しなければならない運命を背負っている。21世紀の今日においても、トムはどこにでもその姿を現わす。彼はジム・ケイシーの遺志を継いで、世の中の不条理に晒される労働者の味方として、正義を守る人物として、「その後のアメリカ大衆文化において時代を超えて復活を繰り返す」(金澤 247) のだ⁸。

Ⅲ. ブルース・スプリングスティーン

ブルース・スプリングスティーン (1949-) は、アメリカで6400万枚、全世界で1億3500万枚以上のレコードセールスを記録しているシンガー・ソングライターである。1999年に「ロックの殿堂」入りを果たした彼は、まさにアメリカの国民的シンガーだと言える。そんな彼の数多いアルバムの中に他とは明らかに違った一種独特のものがある。それは『トム・ジョードの亡霊』(1995) というものだ。このトム・ジョードとは言うまでもなく『怒りの葡萄』の主人公のことである。このアルバムの一曲目の「トム・ジョードの亡霊」は、そのタイトルが示すように、現代に出没するトムの亡霊である。つまり、30年代アメリカのトムは今も姿を変えて存在しているということだ。これは予想通り、売れ行きは芳しくなかったが、なぜスプリングスティーンはあえてこのアルバムを90年代にリリースしたのか。そこには彼のどのような意図があったのだろうか？この疑問に答えるには、少し過去に遡って、60年代から観ていかなければならない。

村上春樹は「ブルース・スプリングスティーンと彼のアメリカ」と題するエッセイの中で、ミュージシャンである彼と作家のレイモンド・カーヴァー (1938-88) の関係について語っている。村上が初めてアメリカを訪れ、カーヴァーにインタビューを行った際、村上はふとブルース・スプリングスティーンのことを考えたという。その時に思い出したのは、「ハングリー・ハート」(1980) の歌詞だった。「この曲の歌詞って考えてみれば、まるでカーヴァーの小説の一節みたいじゃないか」と考えた村上は、二人に「共通しているのは、アメリカのブルーカラー階級 (ワーキング・クラス) の抱えた閉塞感であり、それによって社会全体にもたらされた

⁸ 2013年、スティーヴン・スピルバーグがプロデュースする新『怒りの葡萄』構想が発表された。この映画はまだ実現してはいないが、そのリメイクの理由はこの作品の現代性にあると思われる。

『bleakness=荒ぶれた心』である」と述べている。

ワーキング・クラスの人々はおおむね無口であり、スポークスマンを持たない。饒舌は彼らの好むところではない。それが長い歳月にわたって彼らのとってきた生き方なのだ。彼らはただ黙々と働き、黙々と生きてきた。そして長い歳月にわたってアメリカ経済の屋台骨を支え続けてきたのだ。レイモンド・カーヴァーが物語として文章に描き、ブルース・スプリングスティーンが物語として歌い上げたのは、そのようなアメリカのワーキング・クラスの生活であり、心情であり、夢であり、絶望なのだ。彼ら二人はそうにして、80年代をとおして、アメリカのワーキング・クラスのための数少ない貴重なスポークスマンとなった。(111)

村上はこのように、小説家カーヴァーと歌手のスプリングスティーンを労働者階級のためのスポークスマンと位置づけている。確かに、カーヴァーの描く主人公は一介の名もない労働者であり、スプリングスティーンの「ハングリー・ハート」の歌詞につながる部分大きい。この歌の主人公は、飢えた心を持ちながら、あてもなくさまよう労働者である。二人のアーティストが描く人物たちには満ち足りた安住の場所はない。「出口もなく、見るべき夢もない」(118-19)のだ。そんな閉塞的な人生を彼らは送っている。

この二人の共通点としてもう一つ注目し値するのは、60年代の「カウンター・カルチャーやヒッピー・ムーヴメントは結局のところ、金持ちの大学生が中心になって展開されていたものだったし、彼らにとってはそれは基本的に『よそ事』の世界だった」(123)という事実だ。激動の60年代の中で、目立たずひっそりと自身の生活に追われながら、社会からはじき出されたかのように生きていた二人は、70年代に入ってようやく世間に認められ始めた。それは、村上の指摘にあるように、彼らが『サイレント・マジョリティー』という概念的存在の具象化に取り組むことになったからである。ただ彼らの視点は、最初にこの用語を使用したリチャード・ニクソンとは「まったく違う角度から」(123)のものであり、ベトナム戦争を意識したものではない。

村上はスプリングスティーンとカーヴァーが「荒々しい、痛々しいまでのリアリティー」を描いているという点で共通していると強調する。前者が「ソング・ライターとしてのカルト的本領を発揮し始めるのは、第三作の『明日なき暴走』(1975年)からだ」とし、このアルバムにおいて、「彼はワーキング・クラスの若者たちの心情を実に正直に、実に率直に描いている。そこには、ありありとした、生きている物語がある」(124)という。一方のカーヴァーは1976年に短編集『頼むから静かにしてくれ』を世に出し、「その中で、アメリカの小さな町の庶民の生活を実にリアルに描ききった」(125)と説明している。

この二人はまた80年代の半ば頃から、新たな作風への転換を図っている。それは、村上の言葉を借りれば、

ワーキング・クラスの抱えた問題を、ワーキング・クラス固有の階層的問題としてではなく、より広範な、普遍的な問題として描くことだった。つまり時代的情景、階層的情景としてのbleaknessを世界的なパースペクティブの中で捉え、彼らの語る物語を、時代や階層を超えた「救済の物語」にまで昇華していくことだった。それはとりもなおさず自らを、人間的に、芸術的に道義的に、もうひとつ上のステージに押し上げていくことでもあった。(127-28)

これはまさにスタインバックが『怒りの葡萄』において試みたことと同じではないだろうか。かりに彼がそれを意図していなかったとしても、結果的に今日の読者がこの作品をそのように捉えていることは確かだ。それはアメリカの一時代のことだけを描いたものではないのだ。カーヴァーが描く舞台はスタインバックとは違い、レストランやリビング・ルームといった狭い世界であり、作風もまったく違ったものである。それでも、この二人の作家には時代を超えた共通点が見い出せる。

さらに、スプリングスティーンに関しては、カーヴァーと同様に、スタインバックとの共通点が見い出せるだけでなく、彼は実際に前述の『トム・ジョードの亡霊』というアルバムを作成している。実はこのアルバムの背景には、「我が祖国」で知られるアメリカのフォーク・シンガー、ウディー・ガスリーの存在があることを忘れてはいけない。彼は「フォークソングの父」と呼ばれ、後のボブ・ディランやジョン・バエズらに大きな影響を与えた人物である。

ここで、スプリングスティーンとウディー・ガスリーとの関係について少々触れておきたい。村上が「国民詩人としてのウディー・ガスリー」の中で指摘するように、スプリングスティーンファンの大半はガスリーのことをほとんど知らない。それにもかかわらず、スプリングスティーンは「もう一度ウディー・ガスリーをロール・モデルとして取り上げ、いわば新しい政治的メッセージ・ソングを立ち上げ、それを世に問うた」のである。このミュージシャンにとって「このアルバムの意味は、自分の音楽的目標のひとつとして……ウディー・ガスリーという定点をきっちりと確立しておくこと」(248) だったのだ。

アメリカのみならず、多くの資本主義国家においては、貧富の差がますます拡大している。そんな社会の状況に疑問が投げかけられている現在、「ウディー・ガスリーという音楽家の価値を洗い直すこの作業は、とりわけ重要な意味を持つことになる」。彼が生涯をかけて「追求してきた『アメリカ的正義』が、今現在、そして将来、どのような整合性と可能性を持ちうるのか、今ここで腰を据えて考えてみる価値はあるはずだ」(249) と村上はいう。作家スタインバックが世に問うたのも、まさにこの「アメリカ的正義」とは何かではなかっただろうか。『怒りの葡萄』にはこの正義から見放された人々の喘ぐ姿があまりにも鮮明に描かれている。飢え、貧困、そしてオーキーとしての差別に苦しんだのだ。

ガスリーの時代はこうした人々の苦悩を現代のようにメディアが伝えることはできなかった。では誰が伝えるのか？ 誰かが伝えなければならない。そうした強い「使命感」がガスリーを突き動かしたのだ。そこで彼は自身を「砂嵐難民」の一人として見なすことで、彼らの苦難を自ら引き受けたのだ。

自分の目を見たものを、自分の言葉にして、自分のメロディーにのせ、自分の物語として、ほとんど手渡しのようなかたちで——せいぜいがローカル・ラジオ局の番組を通して——人々にじかに伝えていかなくってはならなかったのだ。あるいはまたその音楽を通して、同じ身の上の人々と、やり場のない感情を分かちあわなくてはならなかったのだ。(253-54)

これはまさにスタインバックと同様に、難民たちへの共感そのものだ。ガスリーにとっての音楽とは、「個人的なメディアであり、共感の盛り皿であり、情報を相手の意識に刻みつけるためのダイレクトな武器^{ウェポン}であったのだ」(254)。そんな彼の思いが『ダスト・ボウル・バラッズ』というアルバムに結集している。スタインバックは作家として困窮した人々への共感を物語にし、ガスリーは音楽家としてそれを物語にしたのだ。

このアルバムの中の「トム・ジョード」という楽曲は、ガスリーが『怒りの葡萄』の物語を六分程度の長さにとまとめたものだが、実に見事に要約されていると言える内容だ。一説によると、1940年にジョン・フォードによって映画化されたものをガスリーが観て、一晩で書き上げたと言われているが、実際は小説そのものを読んでいたという証言もある⁹。いずれにせよ、短い歌の中に作品の神髄を込めることができたのには驚きである。天才的な才能としか言い様がない。

今では僕はテレビの画面で、いろんなカタルストロフの映像を生々しくリアルに目にする
ことができる。しかしそのような光景の多くは、何度も何度も繰り返し見せられているう
ちに当初の衝撃性を失い、やがて数ヶ月たてば人目をひかなくなり、忘れられてしまう。
しかしガスリーの歌う災害の悲しい風景は、その厳しい試練の精密な報告は、僕の耳に
いつまでも残る。

ウディー・ガスリーは「社会的弱者のために生涯を捧げた人」(261)であり、「資本家に酷使される農業労働者の強い味方」(263)だったのだ。

ここでブルース・スプリングスティーンを話を戻せば、彼が90年代になってウディー・ガスリーを再び引き合いに出してきたのは、その「政治的姿勢がますますリベラル・ポピュリズム的な色彩を濃くしてきたこと」(247)に大いに関係があると村上は分析する。スプリングスティーンもガスリーと同様に、今こそ抑圧され、周辺に追いやられて存在感を失った人々のための正義を取り戻そうとしたのだ。それはガスリーやスタインベックの描いた時代が今もまだ続いているからである。むしろさらに劣悪な状況になっている側面もある。つまり、1990年代を迎えたアメリカにおいてもトム・ジョードは数多く存在しているという事実を訴えたかったからである。「トム・ジョードの亡霊」は、「住む場所を失い、社会から冷遇されているすべての人々のための導き手の役割を『怒りの葡萄』のトム・ジョードに演じさせることとなった現代社会の貧困の問題を描写した」(Carlin 384)歌である。それはこんなふうが始まる。

鉄道にそって男が歩いていく
どこかへ行くんだ、もう戻れない
ハイウェイ・パトロールのヘリが尾根を越えてやってくる
橋の下、男は焚き火のそばで眠っている¹⁰

これはアメリカ西海岸とメキシコの国境付近で、仕事を求めてアメリカへ渡ろうとする人たちのキャンプの光景を思わせる詩だ。ジョード一家のような砂嵐難民がカリフォルニアを目指したように、彼らも20世紀後半において同じ場所を目指していた。彼らはもう後戻りはできない。帰る場所はないのだ。ハイウェイ・パトロールに見つからないよう、橋の下に身を隠す人々。『怒りの葡萄』の場面が蘇る。

歌はこう続く。

避難所の行列がその角まで延びている
新世界秩序体制へようこそ

⁹ Cray 180-81.

¹⁰ 訳詞は宮前ゆかりを参照。

南西部じゃ家族が車の中で寝起きする
家もなく、職もなく、平和もなく、休息もない

ここで言う「新世界秩序 (New World Order)」とは、1990年9月11日に、当時のアメリカ大統領であったジョージ・H・W・ブッシュが、湾岸戦争前に連邦議会で行ったスピーチで使って以来広く知られるようになった言葉だが、そこは「弱者が強者から守られ」、「自由と人権の尊重が全ての国家において見出せる」世界であると謳っている¹¹。まさに明るい未来社会を想起させるものである。しかし、現実はどうなのか？ブッシュのスピーチの内容からはほど遠い状況だ。また、家も職も平和も休息もないという状態は、『怒りの葡萄』の見事な要約となっている¹²。

ハイウェイは今夜賑やかだ
誰もふざけちゃいない、どうなるか誰ぞ知る
おいらは焚き火のそばに座ってる
トム・ジョードの亡霊を探してるんだ

衝撃的な歌詞である。ちょうど30年代後半にルート66を多くのおんぼろトラックが走ったように、今では別のハイウェイを多くの難民たちが埋めて尽くしている。歌の主人公は、トムの亡霊を探している。一体彼とどんな話をしようというのだろうか？

この次の歌詞では、『怒りの葡萄』のジム・ケイシーらしき人物が登場し、「先にいる者が最後になり、最後にいる者が先になる日が来るのを待っている」と歌う。これは『新約聖書』の「マタイによる福音書」20章16節からの引用だが、ここには、社会の最後尾に位置する自分たちにも、先頭を走る人々と同じ恵みを与えてほしいと願う気持ちが込められている。エリートであれ、敗残者であれ、神の恵みは平等に与えられると信じるしかないのだ。彼らには「約束の地行きの片道切符」しかない。今夜もたき火のそばで「トム・ジョードの亡霊を待っている」。

そして、最後は社会の不正義の問題に目覚めていくトムのせりふから引用されている。前章で引用した原文通りの文章ではないが、その意味するところは同じである。

かあちゃん、ポリ公が誰かをぶん殴るの見たら
生まれたばかりの赤ん坊が腹をすかして泣いていたら
黒人たちを襲う喧嘩や憎しみの気配があつたら
おいらをさがしてくれよ、かあちゃん
そこにおいらがいる

この詩は現代のBLM（ブラック・ライブズ・マター）運動を彷彿とさせる。警官に殴られる黒人のイメージは今も我々には身近なものである。自分と同じような不条理な境遇に置かれた人々に心を寄せ、その人たちのために闘おうとする姿勢がここにはある。それはさらにこう続く。

誰かが自分の場所を得るために苦しんでいたら
まともな仕事や助けをもとめていたら

¹¹ Wikipedia “New World Order” 参照。

¹² Shillinglaw 39.

誰かが自由になろうと苦しんでいたら
 やつらの目を見てくれよ、かあちゃん
 そこにおいらを見るだろう

まずは自分を優先するといった自己中心的な考えに支配されても仕方がないような状況にあっても、他人のことを自分のことのように捉える姿勢はどこから来るのだろうか。この連帯意識こそが『怒りの葡萄』に見られる社会のあり方の理想型だが、なぜこれが支配層の人々ではなく、虐げられた人々の間に芽生えるのだろうか？人は飢えや貧しさを体験しなければ優しくなれないのか。

トム・ジョードの亡霊は今日もアメリカのみならず、世界の各地で路上をさまよう人々に語りかけている。スプリングスティーンはその優しさと共感と連帯を歌い続ける。そこに搾取される人々がいる限り。彼らは今夜も「焚き火のそばに座ってる。トム・ジョードの亡霊と一緒に」。抑圧された人々の側に立ち、アメリカの正義を勝ち取るために、強い意志を持ってブルース・スプリングスティーンは歌い続けている。この亡霊は果たしてその後消えたのだろうか？その答えは、ジェシカ・ブルーダーの『ノマドランド』（2017）に見出せる。

IV. 現代のノマド

スプリングスティーンの「トム・ジョードの亡霊」の第2節の内容をもう一度振り返ってみよう。「南西部じゃ家族が車の中で寝起きする／家もなく、職もなく、平和もなく、休息もない」。ここに描かれた車上生活をする人々といえは、ジェシカ・ブルーダーの『ノマドランド』（邦訳は『ノマド——漂流する高齢労働者たち』）が思い浮かぶ。これは「トム・ジョードの亡霊」から少し後の21世紀に入った今日の話である。

「ノマド」とは本来「遊牧の民」のことであり、一般的には「放浪者」の意味で用いられる言葉だが、ブルーダーはこの本の「まえがき」でこう説明している。

季節労働者やホーボー、流れ者やさまよい人は、昔からいつも存在していた。しかし二〇〇〇年代に入ってから、新種のトライブが出現している。まさか自分が放浪生活することになるとは思いもしなかった人々が、続々と路上に出ているのだ。昔ながらの家やアパートに住むことを諦めて、「車上住宅」に移り住んだ、現代のノマドである。

つまり、ブルーダーが生活を共にすることでその実態を描いたのは、こうした新たな種族である「現代のノマド」なのだ。彼らの住宅は「車」である。現代版のノマドはかつては普通の中流階級だった人々だ。それがあある日「不可能な選択」を迫られ、「ふつうの暮らし」をあきらめる事態となったのである。

不可能な選択——あなたなら「食べものと歯の治療」、「住宅ローンの支払いと電気代の支払い」、「車のローンの返済と薬の購入」、「家賃の支払いと学生ローンの返済」、「冬物の衣類と通勤用のガソリン」のそれぞれどちらを選ぶだろうか。彼らが出した答えは、一見極端にみえる。

だが、自分で自分を昇給させることができない以上、一番大きな出費を削るしかないのだ

はないだろうか。伝統的な"ふつうの"家を諦めて、車上で生活するしかないのでは？ (xii)

こうして彼らは「ホームレス」ならぬ「ハウスレス」となったのだ。急激に変化していくアメリカ社会の中で、自分たちを「ホームレス」だと卑下するのではなく、「ハウスレス」という新たな種族なのだと胸を張って生きている。前者は車上生活をしているものの、社会のルールに反発しているわけではない。彼らの「目標は、居心地が良くて安心できる社会のルールの支配下に戻ること」である。「選択肢がどれほど少なかったとしても、ノマドは最終的にそれを選択した人たち」(204)であり、そこが自らをハウスレスと呼ぶ所以である。

三〇年代のトレーラー熱はすでに過去のものだ。愛好者のほとんどは景気の回復とともに伝統的な住宅に舞い戻った。だが、私がインタビューした現代のノマドの多くは、二度と以前の暮らしに戻るつもりはないと言う。彼らには主流の住居形態に再吸収されるような意思も計画もない。(206)

スプリングスティーンの歌う人々は、このホームレスのことを指していて、ブルーダーが描く人々とは正確には一致しないかもしれないが、広い意味では同じ種類の難民であることに違いはない。ただ、「現代のノマド」は、『怒りの葡萄』の「砂嵐難民」と同様、すべてアメリカの国民である。彼らは年金をもらう資格を持つれっきとしたアメリカ人なのだ。彼らの多くはルート66が走るアメリカ南西部のハイウェイを生活の場としている。ブルーダーはこうした人々の実態をノンフィクションに描いた。そしてこれは2021年に映画化され、第93回アカデミー賞で作品、監督、主演女優賞の3部門を受賞した。この映画によって「現代のノマド」の存在を知らされた人々が受けた衝撃は計り知れないものであったに違いない。あのジョード一家の体験した苦難が今日も形を変えて存続しているという事実は、決して他人事ではないのだ。それはいつ自分たちに降りかかってもおかしくない時代を我々は生きているのだから。そう考えると、ウディー・ガスリーやブルース・スプリングスティーンの残した業績の重要性もますます高まってくる。それは過去の話ではない。今も日々いろいろな形の「難民」が生まれ、我々のすぐ身近で必死で生きようとしている。「トムの亡霊」を待つ人々はますます増えているのである。

ブルーダーは現代のノマドと『怒りの葡萄』の物語との違いを次のように説明している。

ダストボウルが多数の難民を生んだ三〇年代に「オーキー」と蔑まれたオクラホマ州の難民にとって、自尊心とはすなわち、あるたいせつな希望の残り火を絶やさず燃やし続けることだった。それは、いつかすべてが元通りになり、普通の家に住める日がくる、そうしてわずかばかりの安定を取り戻せるはずだ、という希望だった。

ボブも、彼の影響を受けた多数のノマドも、車上生活をそれとは異なる角度から見ている。ボブの予想では、アメリカでは将来、経済的、環境的大変動が日常的になる。だからボブは、ノマド的生活を、社会が安定を取り戻すまで乗り切り、時期が来ればまた一般社会に戻るための、その場しのぎの解決策とは考えていない。むしろ彼が目指しているのは、壊れつつある社会秩序の外で（さらにはそれを超越したところで）生きられる、さまざまえるトライブを生み出すこと。つまり、車輪の上のパラレルワールドをつくることなのだ。(78-9)

つまり、「現代のノマド」には元の生活に戻る意志はないということである。ジョード一家の

ように、いつかはまた家を持ち安定した生活を送りたいとは考えないのだ。ここに登場するボブとは、RTRと略されるラバー・トランプ・ランデヴー（The Rubber Tramp Rendezvous）の創設者で、砂漠の集いを主催するノマドの人々の統括的役割を果たす人物ボブ・ウェルズのことである。その集いの最大規模のものはアリゾナ州クウォーツサイトにある。この集まりを通して、ノマドたちは多くの仲間と知り合い、助け合っていくことになる。家を持たずとも彼らは新たな形式のコミュニティーを形成しているのだ。このボブという人物の主張は決して無視できないどころか、今まさに我々に迫りつつある危機を予言している。予言というよりは、むしろそれに目を向けようとしないう現代人への警告と捉えるべきだろう。彼らは未来を見据えている。このままでは今の社会の秩序は崩壊することを予見しているのだ。

ここに描かれるノマドたちは自ら進んで路上生活を選んだわけではない。それは仕方のない選択だった。しかし、大自然の中での生活を送る中で彼らは新たな希望を見出していく。彼らはただ単に生き延びることだけを目標とはしていない。

そして、その希望が路上にはある。それは車の推進力が生む副産物だ。アメリカという国の大きさと同じだけ、大きなチャンスがあるという感覚だ。行く手には良いことが待っているにちがいないという、深い確信だ。そのチャンスはほんのすこし先に、次の町に、次の仕事に、見知らぬ人との次の出会いに、きっと転がっている。

こうした積極的な生き方を彼らは路上で実践していく。急激に変化していくアメリカ社会の中で、彼らは「新しい潮流」(xiii) の中にいるのだと確信し、「自分が車を停める場所こそが」「アメリカ最後の自由の土地だと」(xiv) 信じて生きている。彼らの「約束の地」は路上にあるのだ。ジョード一家たちもオクラホマを出発後、三日目には新たな生き方を見出し始める。

ふたつの家族は二日間、逃走した。だが大地があまりに広大なので、三日目には新たな生活技術を取り入れた。ハイウェイが家になり、移動が表現手段となった。少しずつ彼らは新たな生活に入ってしまった。(164)

これは現代のノマドの生き方に類似していると言えそうだ。彼らの場合は正確には「逃走」ではないが、その生き方の原点が『怒りの葡萄』には見出せる。

しかし忘れてはならないのが、こうした理想に燃えた人々にも資本主義の魔の手は伸びてくるという点だ。ジョード一家が資本家に搾取されたように、現代のノマドたちも同様の境遇にあることは否定できない。生きるためには金を稼がなければならない。そこでノマド生活の彼らにも仕事の機会を与えてくれる企業や組織があれば、それはありがたいことである。持ちつ持たれつということだ。

だが、時には賃金があまりにも低い場合や過酷な労働条件を強いられることもある。まさに『怒りの葡萄』の現代版ともいえるべき状況だ。『ノマドランド』では世界的大企業のアマゾンのケースが多く紹介されているが、賃金がいことは魅力だが、そこで働く人々の健康被害も無視できないようだ。効率を最重視したこの企業のやり方は、真に労働者の立場に立っているとはいえない。それはある意味、相手の弱みにつけ込んでいられると言われても仕方がないような条件で路上生活者を利用している。それでも彼ら移動労働者にとっては、ここはなくてはならない存在であり、仕事は単調で退屈でも、多くの仲間を得ることができるのが何よりだという。

そんなノマドの意見をひとつ紹介しよう。ここには彼らの本音が読み取れる。

アマゾンで時給一〇ドル五〇セントで雇ってもらえたのはうれしかったが、稼いだお金をアマゾンでは使いたくないとパティは言った。「私、言うの。『ねえ、ウォルマートやアマゾンで買い物するのはやめましょう。町を歩いて、小さい昔からのお店で買いましょうよ。巨大企業の儲けを減らしてやるのよ』って。そうでもしないと、お金持ちはいいいよお金持ちになるいっぱいでしょう。ここに座ってる私たちは、そのあいだにどんどん貧乏になっているのに」(215)

彼らは自分たちを「ワーキャンパー」と呼ぶ。それは、「短期の雇用を求めてアメリカじゅうを車で移動する、季節労働者」(46)のことである。中にはいい雇い主もいるかもしれないが、多くの場合、このワーキャンパーたちは、利潤のみを追求する側の格好の餌食となるのだ。彼らの呼び名にはいろいろあるが、「リーマンショック時代のオーキー」(47)というのは、明らかに「砂嵐難民」を想起させるものだ。

取材を終えて自宅のあるニューヨークに戻ったブルーダーは、自分の近所にも多くのノマドが存在していることに驚いたという。「伝統的な意味で中流の生活ができずに苦しんでいるアメリカ人」(246)は今では数百万人にのぼり、「一番大きな出費は家賃」であることを彼女は強調している。車上生活をするノマドたちと同様に、彼らもその「生活様式を変えざるを得なくなっている」のだ。

崩壊はすでに始まっている。家計のやりくりが困難になり、人々が夜遅くまで計算に頭を痛めることになったのには、明らかな原因がある。上位一パーセントの人の平均収入が、下位の五〇パーセントの人の平均収入の八倍もあるからだ。しかも収入額が下位五〇パーセントのアメリカ人成人約一億一七〇〇万人の収入は、一九七〇年代から変わっていない。(247)

この所得格差には驚きを隠せない。この事実が意味するものとは一体何だろうか？社会は当然分断され、資本家対労働者の溝は深まるばかりである。こうした現実が政治を変え、経済の成長をも阻む結果となっている。あのトランプ現象が起きたのも、このことと無関係ではないのだ。そして、さらに我々を愕然とさせるのは、こうした格差、分断は『怒りの葡萄』の時代からずっと続いているばかりでなく、ある意味においてますます劣悪な状態になっているという点だ。現代のノマドは砂嵐という災害ではなく、多くは2008年のサブプライムローンの破綻による金融危機によって住宅を失った人々である。

時代背景は違えども、トム・ジョード一家のような人々はこれからもますますその数を増やし、他に選択肢がないままに路上へと放り出されていくのである。そのすべてが、『ノマドランド』に登場するような、路上に希望を見出せる人々であればまだ救われるが、それはあまりにも楽観的観測だと言えるだろう。それはアメリカが人種問題というもうひとつの大きな荷物を抱えているからだ。アメリカ社会には白人だからこそ許されることがあって、非白人の場合、それは別の問題となる場合が数多くある。ブルーダーが描く人々の大半が白人であることがそのいい証拠だ。

ブルーダーがこの取材を通して確信したことがある。

人間というものは人生最大の試練のときでさえ、もがき苦しみながらも同時に陽気であることができる、ということだ。彼らが現実から目を背けてるという意味ではない。それは、

逆境に直面した人間が発揮する驚くべき能力——適応し、意味づけ、団結する能力——の証明だと思う。(164-65)

このことは暗い現実の中であって、一つの希望の光と捉えることができるだろうが、それはまさに『怒りの葡萄』に描かれた逆境の人々にも見られるものだ。

その夕方には不思議なことが起きた。二十の家族がひとつの家族になり、子供たちがみんなの子供になったのだ。それぞれの故郷の喪失はひとつの喪失にまとまり、西部での黄金の日々への期待はひとつの夢にまとまった。ひとりの子供が病気になると二十の家族の百人が悲しんだ。ひとつのテントでひとりの妊婦が出産するときは、百人が畏敬の念に打たれて息をひそめ、翌朝には新たな生命誕生の喜びにわいた。前の夜にはあてどない気持ちで怯えていた家族も、持ち物の中から赤ん坊へのプレゼントを探しはじめた。夕方になると、それぞれの焚き火を囲む二十の家族はひとつの家族だった。百人がこのテント村の単位^{ユニット}になり、夕方も夜も一緒に過ごした。毛布に包まれていたギターが取りだされてチューニングされた。そして毎晩、みんなで歌を歌った。男たちが歌詞を歌い、女たちがメロディーをハミングした。(194)

この連帯感に現代の読者は何を思うだろうか？この場面に感動を覚えると同時に、今の社会ではますます失われていくものの一つとして、懐かしさと悲しみを抱くのではないだろうか。彼らの団結力は並外れたものであり、大いに読者の共感を呼ぶものではあるが、それが資本家との対立の中から生まれているものであるとすれば、単純に賞賛できることではないだろう。それは言い換えれば分断の結果生まれているということになるからだ。アメリカの歴史は分断の歴史でもある。階級と人種の二大社会問題によって、万人を受容するはずの国家の理想が、結果的には排除の歴史となってしまっている。この解決なくして真の人間の団結を語ることはできない。ブルース・スプリングスティーンの歌に励まされる彼の支持層の間にも大きな団結力のようなものが生まれている。スプリングスティーンの謳う人々はまさに現代のノマドそのものとも言えるが、この力が資本家や国家を動かす日が果たして来るのかどうか。それはまだ誰にもわからないことだが、トム・ジョードの亡霊の出現を待たなくてもよい日が来ることを願って、我々は団結し歌い続けるしかない。1997年、スプリングスティーンに共鳴したロックグループ「レイジ・アゲinst・ザ・マシン」(Rage Against the Machine)が「トム・ジョードの亡霊」をカバーしている。彼らはその名が示す通り、体制側への怒りを音楽で表現するグループである。スタイルンベックの精神は今もこうして受け継がれている。

V. 「母なる道」の復活

一度は消滅したこの「母なる道」は今ふたたび復活を遂げている。人々はなぜ今もこの道に惹かれるのだろうか。この道が失うことなく持ち続けているものとは何だろうか。インターステートを使えば短時間で移動できるはずだが、あえてこの旧道走ることに何の意味があるのか。もしかしたら、人々は無意識のうちにアメリカの超資本主義が生み出してきた社会に疲弊してきているのではないだろうか。もう一度、かつての「アメリカン・スピリット」の源流をゆっくり辿ることで、現代人が失ってしまったものを振り返ろうとしているのではないだろうか。そして、

できることならそれを取り戻したいと願っているのではないだろうか？

この旧国道は、ヒンクリー（Hinckley）がその著書のサブタイトルにつけたように、「線状に伸びたこの国で最も長いスモールタウン」（7）である。それはつまり、そこにはアメリカを形成してきた無数のスモールタウンのスピリットが今も息づいているのだ。それがもし今も人々を惹きつける理由だとしたら、この絶好の機会を逃してはならない。今ならまだ間に合う。それは現代社会が抱える多くの難題と向き合い、それを正しい方向に軌道修正する最後のチャンスだと言うことだ。我々は今でなければもう手遅れになってしまうという段階に直面している。

利益の追求のためにはいかなる犠牲をも厭わない社会に我々は住んでいる。それは、あのダスト・ボウルを生んだ人間の傲慢さとまったく同じであり、今地球自体の存在をも脅かしつつある。つまり、今日の環境破壊は少なくともスタインバックが描いた時代からずっと続いているのだ。そしてそれと同時に人々の精神は知らず知らずのうちに蝕まれ、自然と人間の関係のみならず、人間同士の関係にも歪みが生じ始めている。その結果、人種差別はますます激しくなり、社会の分断は進む一方だ。そんな現実に関心を痛める人々の気持ちだが、この旧道へと向かわせるのではないだろうか？確かにトム・ジョードの歩んだルート66は過酷なものではあったが、まだそこには夢があった。カリフォルニアに到達さえできれば、という大きな夢があったのだ。だからこそ、彼らは移動し続けることができたのだ。

残念ながら、カリフォルニアは彼らを温かく迎えることはなかった。それでも人々は次なる「約束の地」を求めて走り続けるしかない。きっといつかはそこに到達できると信じて歩み続けるしかないのだ。ブルース・スプリングスティーンが歌うように、人は「走るために生まれてきた」のかもしれない。「アメリカで生まれた」（Born in the U. S. A）俺たち「放浪者」（tramp）は「走り続けるしかないんだ」（Born to Run）。アメリカの夢のかけらを求めて。この後戻りできない運命は『ギャツビー』のニックのセリフ「過去はくりかえせないよ」（86）を思わせる。

アメリカの旧国道ルート66は、こうして1926年から今日までのアメリカの一世紀の歴史を見つめ続けてきた。この道はその歴史を今も記憶している。繁栄の20年代、大恐慌、第二次世界大戦を経て、公民権運動、ベトナム戦争など、この国の現在に至るまでの道のりは、その道路と同様、決して平坦なものではなかった。ただ、ひとつ確信を持って言えることは、このハイウェイは常に人々に夢を与えてきたことだ。それが幻であれ、過去のものであれ、人々は道路の先にはきっと「約束の地」が待っている、そこは「楽園」に違いないと信じて走り続けてきた。しかし、今日まで彼らは未だその地に到達できていない。旅は今も続いているのだ。ジョード一家が体験した困難を極める旅に終わりはないようだ。

黒原敏行は『怒りの葡萄』新訳版の「あとがき」でこう言っている。

スタインバックは"オーキー"を純粋な被害者としては描いていないのだ。"オクラホマ"という地名は、アメリカ先住民チョクトー族が自分たちを指し示す^{オクラ・フンマ}"赤い人々"という言葉から来ている。つまり元祖"オーキー"を追い出した人たちが、今度は追い出されて"オーキー"とさげすまれる。しかも、"赤い人々"は"アカ"にも通じるという皮肉。（下・430）

我々は『怒りの葡萄』に描かれる砂嵐難民を単に「被害者」として見てはいけないということだ。もちろん彼らを見放すということではないが、その前にも被害者が存在したことを忘れてはいけないのである。それはアメリカン・インディアンと呼ばれる先住民のことだ。アメリカの歴史は彼らを排除するところから始まった。大量の殺戮が行われたあげく、残った人々は元の住処を遠く離れて生活することを余儀なくされたのだ。ルート66を走ると、そうした先住民の居留

地が点在している。『怒りの葡萄』の23章にも先住民に関する描写がある。それはひとりの「十字架みたい」に両腕を広げた「インディアン戦士」(325)を銃で撃ち殺す話だが、こうした犠牲の下でヨーロッパからの移民たちは土地を手に入れたのだ。

大須賀は「ルート66は希望の道ではなく、二十世紀の涙の道」(64)だとしているが、確かに両者には共通点がある。「涙の道」とは、1838年に先住民のチェロキー族を南部ジョージアから、後にオクラホマ州となる地域のインディアン居留地に強制移動させた時のことを指す。それは3000キロにも及ぶ旅で、総勢15,000名のうちの約4、5千人が途上で亡くなったと言われている。シリングローも指摘しているように、これは『怒りの葡萄』が書かれたちょうど100年前の出来事であり、共に自分たちの土地から強制的に追放された人々である。(11)

要するに、ジョード家の先祖たちが先住民を彼らの土地から追い出したように、「その子孫たちは銀行やトラクターによって報復され」(大須賀 65)ているということだ。やっと到着したカリフォルニアでは「移民の賃金をどんどん低く抑えていく狡猾なしくみ」が待ち受けており、「超低賃金労働者として使える範囲では移民を許容するが、それ以外は徹底的に異物として排除しようとする」。そうした「地元民の利己心にひたすら奉仕する警察は、移民たちが団結して不正に抗議すると、"アカ(共産主義者)"のレッテルを貼り、法を無視して暴力的に弾圧を加えていく」。(黒原・下426) ジム・ケイシーはまさにこの犠牲となった人物である。

志なかばにしてその夢を絶たれたギャツビーの場合にも同じことが言えそうだ。彼の家はかつてオランダの船乗りたちに「人類最後」で「最大の夢」を与えた大陸の緑を形成していた木を切り倒して建てられたものだ。それは結局はヨーロッパから新大陸に夢を抱いて渡ってきた人々が先住民を虐殺することで自分たちの住む場所を確保していったのと同じことになる。そんな大きな犠牲を払いながら追い続けられたアメリカの夢も、結局は挫折に終わることになる。

かつてオランダの船乗りたちの眼に花のごとく映ったこの島の昔の姿——新世界のういういしい緑の胸——が、徐々に、ほくの眼にも浮んできた。いまは消滅したこの地の叢林そうりんが、自らの席をゆずってギャツビーの邸宅を建ててやったその叢林が、かつてはさやさやと、人類最後の、そして最大の夢に誘いの言葉をかけながら、ここにそそり立っていたのだ。(140)

なんとも皮肉な歴史であるが、ケイシーの意志はトムに引き継がれ、この物語を越えて現代へと受け継がれている。また、ギャツビーの夢は語り手のニック・キャラウェイに受け継がれていった。彼らの旅に終わりはないのだ。走り続けるしか、移動し続けるしか生きる道はないのだ。ニックは最後にこう宣言する——「あすは、もっと速く走り、両腕をもっと先までのばしてやろう……そして、いつの日にか——」。(141)¹³

ケイシーはどこへ行っても、「これからどうなるんだろう」と誰もがこの国の行く末を不安視していたという。

だがどうにもなっていないように思える。いつも途中なんだ。いつも先へ先へ進んでいくだけ。なぜみんなはそのことを考えないんだろう。いまはみんなが動いている。民衆が動いている。その理由はわかっている。動かざるを得ないから動く。いつだってみんなが動く理由はそれだ。いま持っているものよりいいものが欲しいから動く。それを手に入れるに

¹³ 拙著『アメリカの消失』参照。

は動くしかない。それが欲しいから、必要だから、手に入れるために出かけていく。(128)

アメリカ人にとっての「約束の地」は常に移動するのだ。かりにそこに到達したかのように見えても、それは単に一時的なものであって、道のりはさらに続くのであり、それは常に「ロードの先」にあるものなのだ。『ノマドランド』に登場する現代のノマドたちの合い言葉は、映画版に登場する「ロードの先でまた会おう」(“See you down the road.”)だ。移動の先に何かがある。現代人にとっての「約束の地」は常に路上にある。それはトム・ジョードの歩んだ道のりと何ら変わらないものである。彼の末裔たちは現代のノマドと化しているのだ。

果てしない旅はまだまだ続く。

利益相反について

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

参考文献

- 大須賀寿子 2015 年「ロード・ナラティヴとしての『怒りの葡萄』——アメリカン・ドリームの行方」『アメリカン・ロードの物語学』松本昇, 中垣恒太郎, 馬場聡編 金星堂.
- 加藤好文 2019 年「カリフォルニアの『ぶどう』を食べるのは誰か——『怒りの葡萄』とアメリカの道文化」『スタインベックとともに——没後五十年記念論集』中垣恒太郎他編 大阪教育図書.
- 金澤 智 2009 年「『怒りの葡萄』ジョン・スタインベック——ルート 66 の先にあるもの」『アメリカの旅の文学——ワンダーの世界を歩く』亀井俊介編著 昭和堂.
- 上 優二 2017 年『スタインベックの物語世界——生と死と再生と』彩流社.
- 宮脇俊文 2012 年『アメリカの消失——ハイウェイよ、再び』水曜社.
- 村上春樹 2005 年「ブルース・スプリングスティーンと彼のアメリカ」『意味がなければスイングはない』文藝春秋.
- 2005 年「国民詩人としてのウディー・ガスリー」『意味がなければスイングはない』文藝春秋.
- Bruder, Jessica. 2017. *Nomadland*. London: Swift Press. 『ノマド——漂流する高齢者労働者たち』鈴木素子訳 2018 年 春秋社.
- Carlin, Peter Ames. 2012. *Bruce*. London, Simon & Schuster UK.
- Cray, Ed. 2004. *Ramblin' Man: The Life and Times of Woody Guthrie*. New York: W. W. Norton.
- Fitzgerald, F. Scott. 1991. *The Great Gatsby*. Ed. Matthew J. Bruccoli. Cambridge UP. 野崎孝訳 1974 年『グレート・ギャツビー』新潮社.
- Gladstein, Mimi Reisel. 1997. “*The Grapes of Wrath: Steinbeck and the Eternal Immigrant.*” *The Grapes of Wrath: Text and Criticism*. Ed. Peter Lisca. New York: Penguin Books.
- Gregory, James N. 1989. *American Exodus: The Dust Bowl Migration and Okie Culture in California*. New York: Oxford UP.
- Hinckley, Jim. 2017. *Route 66: America's Longest Small Town*. Minneapolis, MN: Voyageur Press.

Seed, David. 2012. *Cinematic Fictions: The Impact of the Cinema on the American Novel Up to the Second World War*. Liverpool UP.

Shillinglaw, Susan. 2014. *On Reading The Grapes of Wrath*. New York: Penguin Books.

Steinbeck, John. 1997. *The Grapes of Wrath: Text and Criticism*. Ed. Peter Lisca. New York: Penguin Books. 黒原敏行訳2014年『怒りの葡萄 [新訳版]』（上・下）ハヤカワepi文庫.

_____. 2002. "Woodie Guthrie." *America and Americans and Selected Nonfiction*. New York: Penguin Books.

_____. 1952. *Steinbeck: A Life in Letters*. Ed. Elaine Steinbeck and Robert Wallsten. New York: Penguin Books.

Wagner-Matin, Linda. 2017. *John Steinbeck: A Literary Life*. London: Palgrave Macmillan.

石浦由高「ブルース・スプリングスティーンが探し求めたトム・ジョードの亡霊」TAP the POP
<http://www.tapthepop.net/roots/28390> 2022年9月20日閲覧

宮前ゆかり「速報893号 トム・ジョードの亡霊は訪れるか」TUP 平和をめざす翻訳者たち
<https://www.tup-bulletin.org/?p=925> 2022年9月20日閲覧

Schleeter, Ryan. "The Grapes of Wrath: John Steinbeck Captures People's Relationships with the Environment during the Dust Bowl." National Geographic: Learn with Us.
<https://education.nationalgeographic.org/resource/grapes-wrath> 2022年9月20日閲覧

(DVD)

ジョン・フォード監督 2016『怒りの葡萄』20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン.

クロエ・ジャオ監督 2021『ノマドランド』ウォルト・ディズニー・ジャパン.

The Plow That Broke the Plains and *The River*. Directed by Pare Lorentz, Naxos, 2007.

アジア地域の空調機用 PMSM ドライブ向け AC-AC 変換器の研究

Study of AC-AC converter for PMSM drives for air conditioners in Asia

前川 佐理*
Sari Maekawa

Abstract

In recent years, the market for air conditioners in emerging Asian countries such as India and Vietnam has been expanding. Although on-off type air conditioners have been the mainstay of the market, various manufacturers have developed high-efficiency products using inverters and permanent magnet synchronous motors (PMSM), and the ratio of inverters in Japan, China, Europe, and Oceania is increasing.

On the other hand, in emerging regions such as Asia, the quality of the power supply is poor, causing frequent power outages as well as instantaneous voltage fluctuations and voltage drops. In addition, high-efficiency operation is required for power converters. This is because there is an efficiency index called APF (Annual Performance Factor) in the performance index of air conditioners, and these performances are directly related to the performance of air conditioners and even to the sales of products. Generally, an AC/DC converter is used to obtain the DC power necessary for the inverter that drives the motor from the AC power supplied to the air conditioner. AC/DC converters that have a function of suppressing harmonics of the input system current in addition to the power conversion function are called PFC (Power Factor Correction) converters in particular.

In this study, we propose a partial switching method based on the commonly used PI control to stop the switching operation of the power converter near the peak of the AC voltage by appropriately adjusting the DC voltage command value, thereby reducing the switching losses. This method reduces the switching loss and thus improves the efficiency of PFC converters.

I. はじめに

近年、インドやベトナム等のアジアの新興国における空調機の市場が拡大している。従来はオンオフ型の空調機が主体であったが、インバータ化および永久磁石同期モータ（Permanent Magnet Synchronous Motor：PMSM）を用いた方式により高効率化な製品が各種メーカーから

* 明治大学理工学部 School of Science and Technology, Meiji University
(2022年9月まで成蹊大学理工学部)

開発されている。インバータ化することでより細かな温度調整や運転効率が上昇するため世界的にインバータ化への流れが顕著となっている。図1に示すように世界初のインバータエアコンを発売した日本をはじめ、中国、欧州、オセアニアなどはインバータ率が高くなっている。特に中国は世界最大のマーケットであり全世界の空調機メーカーの競争が激化している。

一方、アジアなどの新興国地域では、電源品質が悪く停電はもちろん瞬時的な電圧変動、電圧低下が頻繁に発生する問題がある。一方で、空調機のドライブにおいては一度停止してしまうとコンプレッサモータの再起動に時間がかかるため、空調機用ドライブシステムにおいては瞬低対策が非常に重要となる。しかし、これらの新興国地域では低コストなシステムが要求されるため適用が難しい。また電源変動への影響に加え電力変換器として高効率な運転が求められている。これは空調機の性能指標にAPF (Annual Performance Factor) と呼ばれる効率指標があり、これらの性能が空調機の性能、さらには製品の売上に直結するためである。一般に空調機へ供給される交流電源からモータを駆動するインバータへ必要な直流電源を得るためにAC/DCコンバータが用いられる。AC/DCコンバータは交流電源を直流電源に変換する装置であり、空調機をはじめとする家電機器や携帯電話の充電器等に用いられる回路である。電力の変換機能の他に入力系統電流の高調波を抑制する機能を持つAC/DCコンバータは特にPFC (Power Factor Correction) コンバータと呼ばれる。近年、ソフトスイッチング昇圧型PFCコンバータやインターリーブ昇圧型PFCコンバータなどの電力変換効率を向上させる研究が行われている。しかし、これらは追加の回路やデバイスを必要とするため製品コストが高くなり、相数が増えることによって電力密度が低下する傾向にある。

本研究では、単相のPFCコンバータを対象とし、高調波を抑制しつつ高効率化を図ることを目的とし、一般的に用いられているPI制御をベースとし、直流電圧指令値を適切に調整するこ

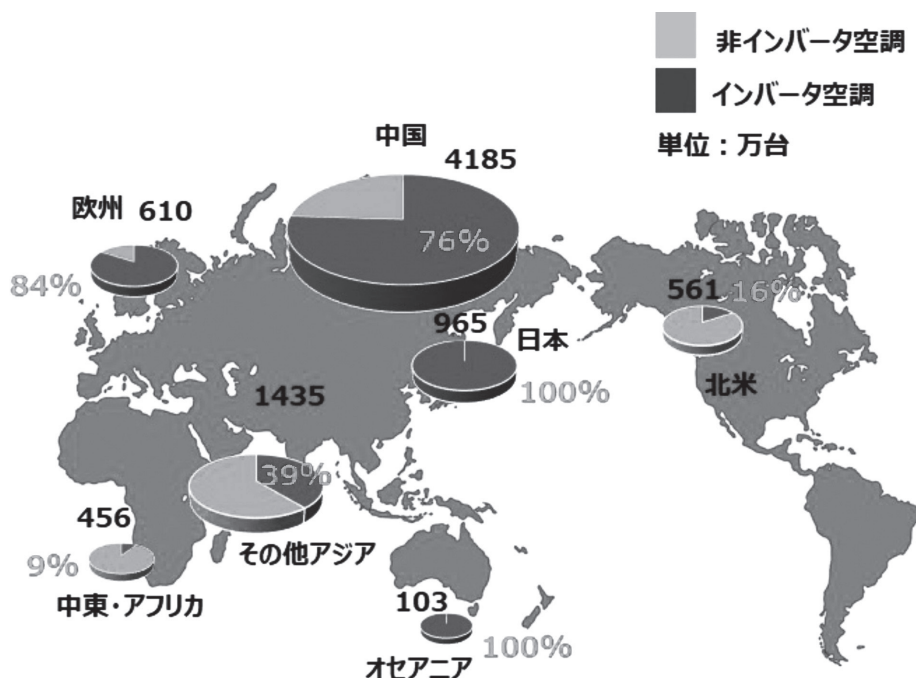


図1 住宅用空調の市場需要台数におけるインバータ比率

(一社) 日本冷凍空調工業会データを参考に筆者作成

とにより交流電圧のピーク付近で電力変換器のスイッチング動作を停止させる部分スイッチング方式を提案し、スイッチング損失を下げることにより PFC コンバータの高効率化を図る。

ここで直流電圧指令値を適切な値に制御するために、交流電流から高速フーリエ変換によって高調波を演算し THD (Total Harmonic Distortion) 目標値を満たすように直流電圧指令値を制御する方式について検討する。

本報告では部分スイッチングのための直流電圧指令値制御について、基本原理および実機による検証を行った結果について報告する。本研究によりアジア地域を始めとする電源品質が悪い環境においても高効率な空調機運転が可能になる新たな電力変換方式が実現される。さらに、本研究成果を各種空調機メーカーに提案・共同研究として推進することにより、アジア地域の人々への空調機の更なる普及を進めることができると考えられる。

II. システムの構成

図2に本研究の制御対象である PFC コンバータの回路および制御構成を示す。ここで L はリアクトル、 SW は MOSFET による半導体スイッチ、 C はコンデンサ、 R は抵抗、Duty は MOSFET のオン比率であるデューティ信号である。 V_{AC} は交流電圧、 V_{DC} は直流電圧、 V_L はリアクトル電圧、 V_{di} はダイオード電圧、 V_{MOSFET} は MOSFET スwitch のドレインソース間の電圧、 V_R は負荷抵抗の電圧、 V_{DC}^* は直流電圧指令値、 I_L^* はリアクトル電流指令値、 I_{AC} は交流電流、 I_L はリアクトル電流、 I_{sw} はスイッチ電流、 I_c はコンデンサ電流、 I_R は負荷抵抗の電流である。

PFC コンバータの損失においては出力電力が小さいほどスイッチングによる損失が高い割合を占めることが分かっている。よってスイッチングを休止する期間を設けることで、スイッチング損失を低減させ効率を向上させることを検討する。

ここで、提案する部分スイッチングの動作原理について図3に示す。図3において上段は電源の入力である交流電圧、下段は MOSFET のスイッチング状態の波形を示している。入力電圧 V_{in} のピーク付近で、スイッチングを休止する期間を設ける方式を PVP (Peak Voltage Partial Switching) と呼ぶ。図中の赤い部分は PWM によるスイッチングを行い、PVP 期間は MOSFET が完全にオフする。このとき図2の回路において交流電源 V_{AC} からリアクトル L 、ダイオードを通り負荷側に電流が流れる。しかし、通常のスイッチング動作時に機能するダイオードの影響により $V_{in} > V_{DC}$ という条件が満たされなければ電流を流すことができない。電流が遮断されると

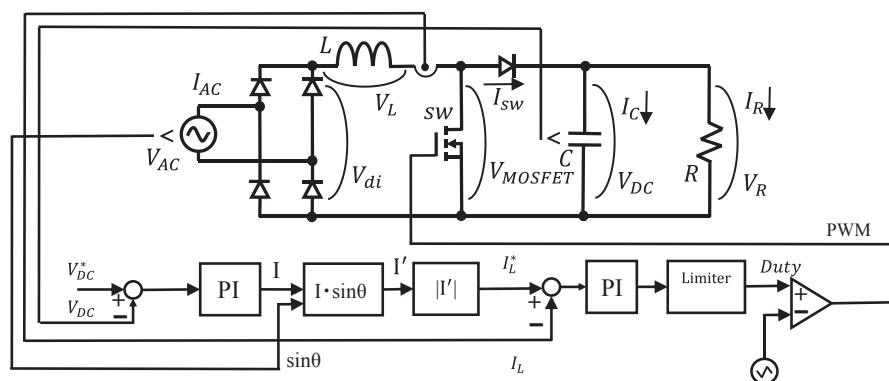


図2 PFC コンバータのシステム構成

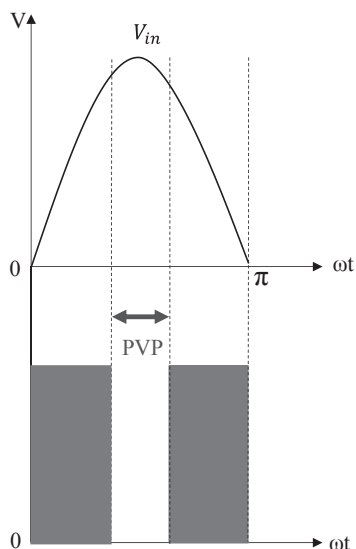


図3 部分スイッチングの動作原理

交流電流の高調波が著しく悪化するため基本的には上記条件に限定してPVPを行う必要がある。 V_{in} は空調機が設置される地域毎に決定される電源電圧で決まるため、本論文では直流電圧 V_{DC} を適切に調整しながらPVPを行う手法を検討する。

Ⅲ. 直流電圧制御

本章では、PVPを行うための2つの直流電圧の制御方式について示す。図2においてPFCコンバータの直流電圧はリアクトル電流のPI制御器および直流電圧のPI制御器のカスケード接続型の制御器により制御されている。このため、本研究ではこれらの制御器の前段にPVPを行うための直流電圧指令値を出力するための上位制御器を設けることを検討する。

またPVPが行われている期間は交流電源から負荷側に直接電流が流れるため電源電流の高調波が増加する。このため、提案制御では、電源電流の高調波さらにTHDを用いて適切な水準に高調波を抑制しながらPVPによる高効率化を図れる制御方式を検討する。

図4に提案制御の制御ブロック図を示す。初めに電流センサで検出したリアクトル電流 I_L と位相 θ を用いて交流電流推定値 I_{AC} を生成する。次に I_{AC} を検出対象信号とし、高調波を検出し直流電圧指令値 V_{DC}^* を出力する。最後に直流電圧指令値 V_{DC}^* と直流電圧 V_{DC} 、リアクトル電流指令値 I_L^* とリアクトル電流 I_L をフィードバックするPI制御器が適用されるという流れである。以下では高調波を検出し、直流電圧指令値 V_{DC}^* を出力する流れについて説明する。

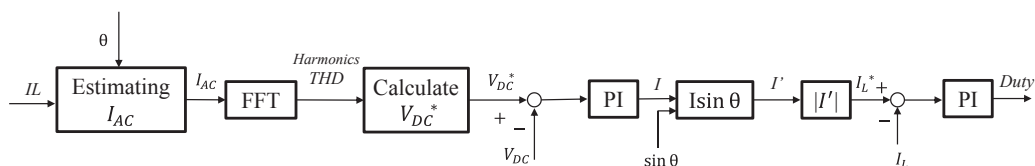


図4 PVPを調整する直流電圧指令値制御の構成

3.1 THD目標値による直流電圧指令値制御

図5に直流電圧指令値制御方式のフローチャートを示す。まず初めに位相 θ_a を検知する図5のFFT (Fast Fourier Transform) の積分値の演算において、(1)～(6) 式の演算を行う。

$$G_1 = \cos\left(\frac{n \times \theta_a \times 3.14}{180}\right) \quad \dots (1)$$

$$H_1 = \sin\left(\frac{n \times \theta_a \times 3.14}{180}\right) \quad \dots (2)$$

(1)、(2) 式においてFFTを三角関数に展開した式を演算する。ここで n は任意の次数、 θ_a は位相の検出値である。

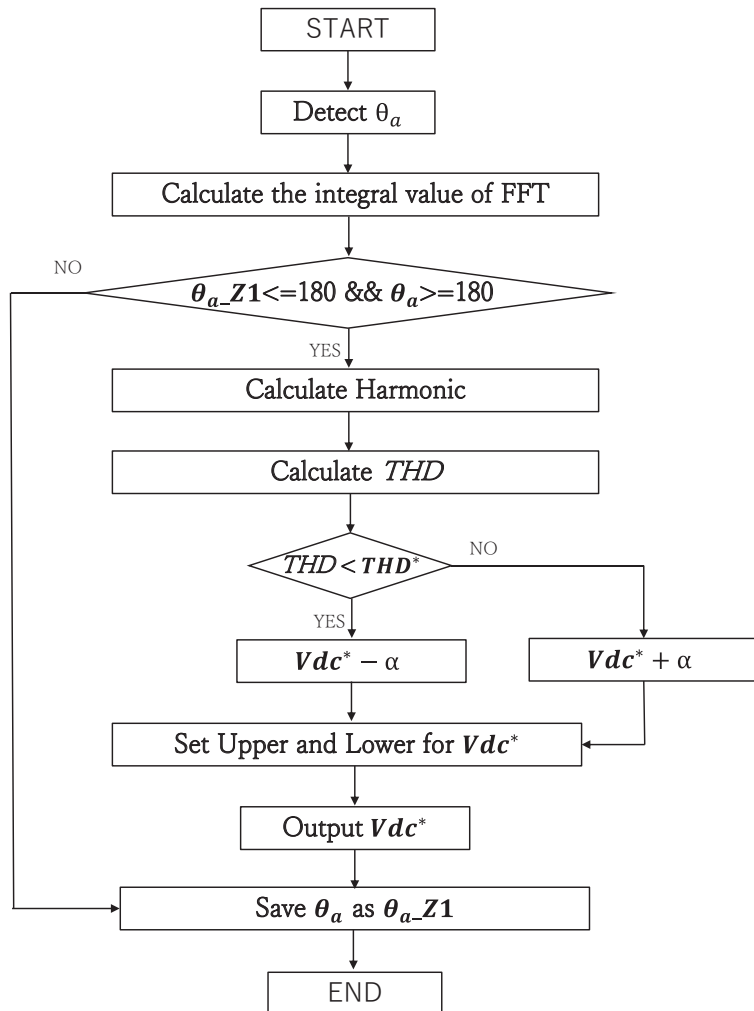


図5 THDを目標値とした直流電圧制御のフローチャート

$$G_2 = \frac{G_1 \times I_{ac}}{3.14} \quad \cdots (3)$$

$$H_2 = \frac{H_1 \times I_{ac}}{3.14} \quad \cdots (4)$$

次に (1)、(2) 式で求めた G_1 、 H_1 を用いて、(3)、(4) 式の演算を行う。ここで I_{ac} は系統電流である。

$$G_3 = G_2 \times P_{control} + G_{3_Z1} \quad \cdots (5)$$

$$H_3 = H_2 \times P_{control} + H_{3_Z1} \quad \cdots (6)$$

最後に、(5)、(6) 式において、積算を行う。ここで $P_{control}$ は制御周期、 G_{3_Z1} 、 H_{3_Z1} はそれぞれ G_3 、 H_3 の前回値である。

次に位相 θ_a の前回値である θ_{a_Z1} が 180deg 以下かつ θ_a が 180deg 以上の場合、つまり検出対象の系統電流 I_{ac} の 1 周期ごとに (7) 式によって各次数の高調波を演算する。また演算した後、 G_3 と H_3 を初期化する。そして (8) 式によって THD を算出する。本研究においては、高調波が増加しやすい 1 次から 13 次の奇数次のみ高調波を求め、それらの高調波を用いて THD を算出する。

$$Har_n = \sqrt{G_3^2 + H_3^2} \quad \cdots (7)$$

$$THD = \frac{\sqrt{Har_3^2 + Har_5^2 + Har_7^2 + Har_9^2 + Har_11^2 + Har_13^2}}{Har_1} \times 100 \quad \cdots (8)$$

次に、算出された THD が目標値である THD^* より大きい場合、直流電圧指令値 V_{dc}^* に差分 α を加え、THD が THD^* より小さい場合には、直流電圧指令値 V_{dc}^* から差分 α だけ減少させる。差分 α は小さいほど電力を変動させた場合の追従性に欠けるが最適な直流電圧指令値を出力することが可能である。一方、差分 α は大きいほど追従性は高まるが、PVP の発生条件をより細かく調整するためには α は小さい値である方が好ましい。

ここで、直流電圧指令値 V_{dc}^* が直流電圧指令値の下限值より小さい場合は直流電圧指令値を下限値に、直流電圧指令値の上限値より大きい場合には直流電圧指令値を上限値に設定する。最後に、直流電圧指令値 V_{dc}^* を出力し、位相の今回値 θ_a を前回値 θ_{a_Z1} として保存する。以上の THD による直流電圧指令値制御は、制御周期 $P_{control}$ に基づいて繰り返し行われる。以上の構成により検出した電流の高調波を THD により評価し直流電圧指令値を出力することで、電源電流を適切な高調波に抑制しながら PVP を行い高効率化を図ることができる。

IV. 実機実験による検証

4.1 任意の直流電圧指令値を与えた場合の効率向上効果

まず、任意の直流電圧を設定し提案するパルス休止法を行った場合と従来のPI制御の場合の効率を実機実験によって検証し、比較する。検証条件を表1に示す。また実験機の写真を図6、7に示す。図6は変換器の主回路基板、制御基板、マイコン内部値を出力するDAC基板、電流センサによって構成される。また図7の電源装置は主回路基板へ交流の電源を供給する。電子負

表1 実験条件

Type	Item	Value
Electric circuit parameters	AC voltage	100[Vrms]
	Reactor	1.5[mH]
	Capacitor	760[μ F]
	Load resistance	100[Ω]
	Fundamental frequency	50[Hz]
Control parameters	DC voltage reference value in PI control	180[V]
	DC voltage reference value in the proposed method	150[V]
	Control period	100[μ s]

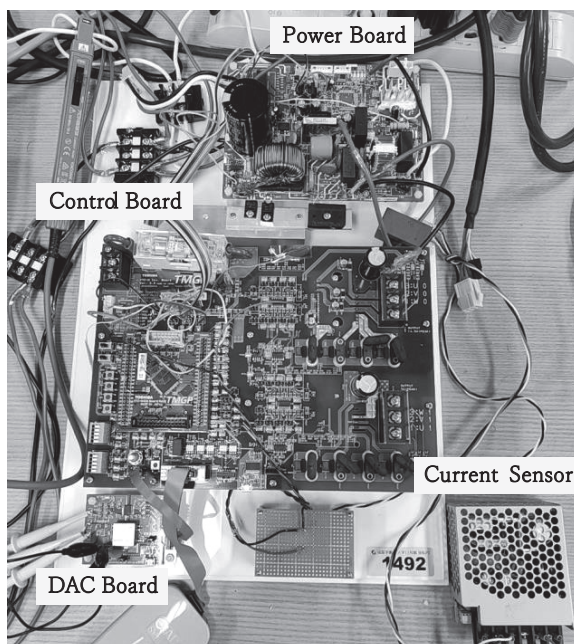


図6 実験装置の外観

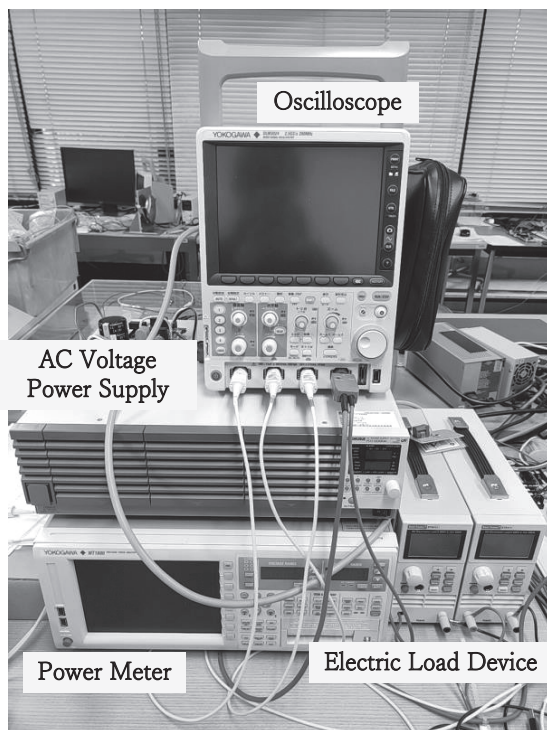


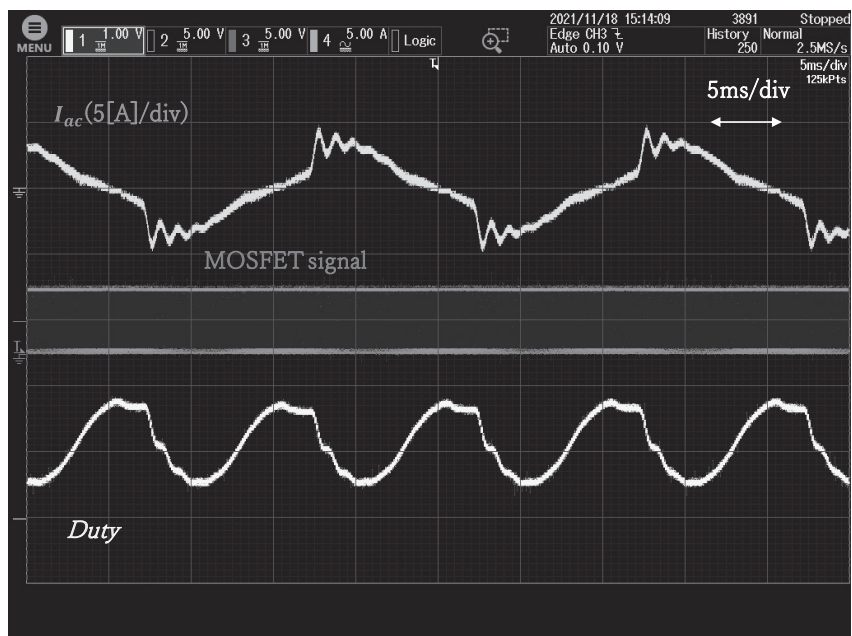
図7 実験機の測定器の構成

荷装置はPFCコンバータの出力部分に接続されている。さらにパワーメータをPFCコンバータの入力と出力部分に接続し電力および高調波を測定する。検証結果はいずれも $V_{ac}=100[\text{Vrms}]$ 、 $L=1.5[\text{mH}]$ 、 $C=760[\mu\text{F}]$ 、 $R=100[\Omega]$ 、 $\Delta t=100[\mu\text{s}]$ 、 $F_{iac}=50[\text{Hz}]$ の条件で実施した。

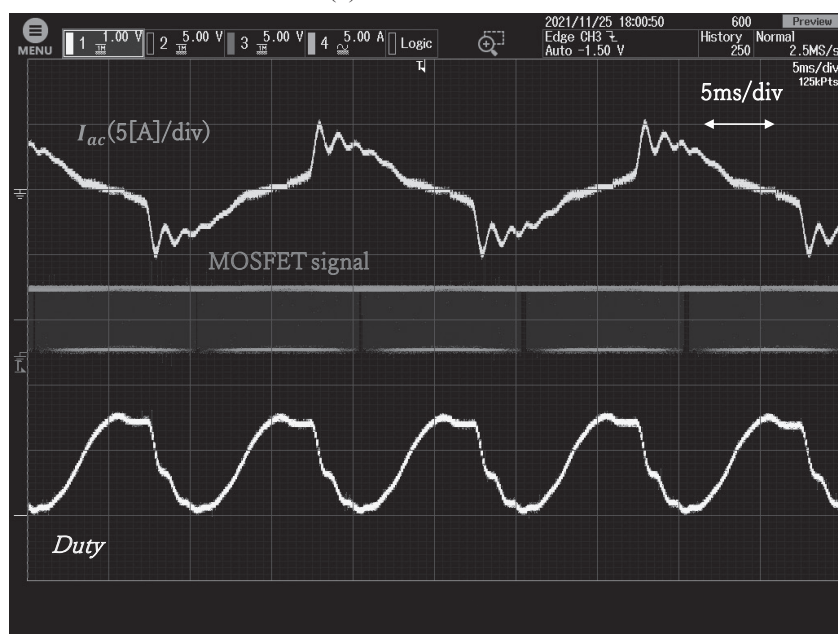
図8に出力電力が200[W]の際のPI制御とPVPを発生させた場合の交流電流 I_{ac} 、MOSFETの信号の電圧、デューティの波形を示す。ここで交流電流 I_{ac} は、図6の主回路基板の入力部分の電流値、MOSFETのゲート信号の電圧は図6の制御基板のMOSFETスイッチの電圧、デューティはマイコン内部値をDAC機能で検出したものである。図8(a)は $V_{dc}^*=180[\text{V}]$ 、図8(b)は $V_{dc}^*=150[\text{V}]$ である。図8(a)では常にスイッチングが行われているが、図8(b)ではデューティが0付近でMOSFETが常にオフ状態になっていることが分かる。

次にPI制御と提案する部分スイッチング方式での効率の比較の結果を図9に示す。ここで効率はPFCコンバータの入力の電流値と電圧値の積に対して、出力の電流値と電圧値の積がどれほど大きいかを示しており、いずれも図7のパワーメータで測定した。PI制御では $V_{dc}^*=180[\text{V}]$ 、PVP方式では $V_{dc}^*=150[\text{V}]$ である。出力電力は50[W]から300[W]まで50[W]刻みで測定した。図9から従来のPI制御より出力電力100[W]の場合を除いて効率が改善されることが分かる。これはスイッチング休止期間のスイッチング損失がゼロであるためである。

最後に図10にPI制御と部分スイッチング方式での系統電流の高調波の比較の結果を示す。図10は出力電力200[W]の条件下で、PI制御では $V_{dc}^*=180[\text{V}]$ 、部分スイッチング方式では $V_{dc}^*=150[\text{V}]$ である。図10から低い周波数においてはPI制御より部分スイッチング方式の方が高調波が高いことが分かる。しかし、周波数が高くなるにつれPI制御でのスイッチングの方が高調波が高くなっていることも分かる。



(a)従来のPI制御



(b)提案法

図8 PFCコンバータ各部の動作波形の比較

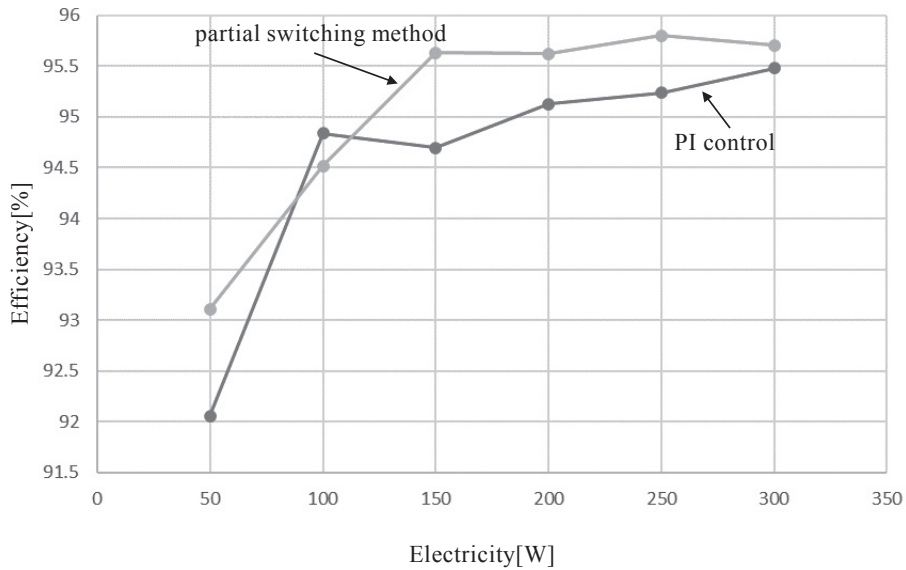


図9 効率の比較

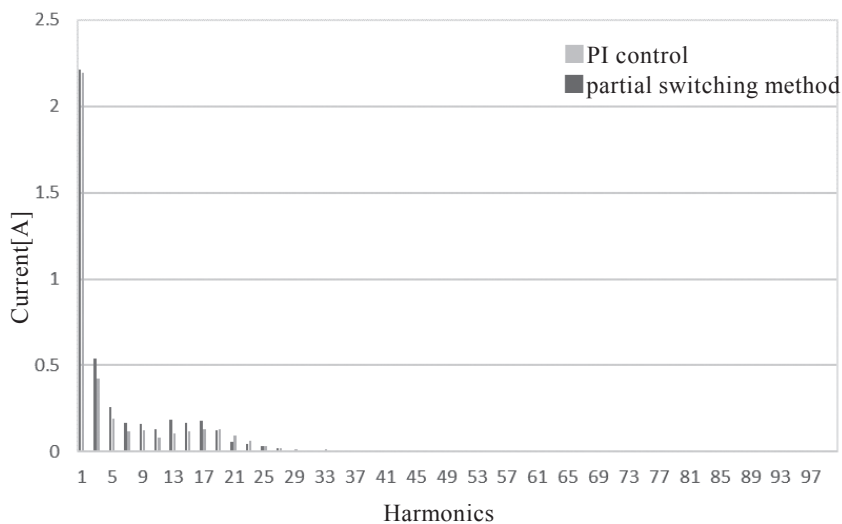


図10 電源電流の高調波比較

4.2 THD目標値による直流電圧指令値制御の検証

前節による検証でPVPを実施することでPFCコンバータの効率を上げることが実証されたため、提案するTHDを目標値とした制御方式の検証を行う。検証条件を表2に示す。本検証における直流電圧指令値の下限値は130[V]、上限値は200[V]、差分 α は1、 V_{dc}^* は50[%]である。

図11は表2の条件下で出力電力200[W]の際のデューティ、直流電圧 V_{dc} 、直流電圧指令値 V_{dc}^* 、交流電流 I_{ac} の波形である。図11からデューティが0付近でPVPが発生し、かつ直流電圧

表2 THDを目標値とした制御検証の条件

Type	Item	Value
Electric circuit parameters	AC voltage	100[Vrms]
	Reactor	1.5[mH]
	Capacitor	760[μ F]
	Load resistance	100[Ω]
	Fundamental frequency	50[Hz]
Control parameters	Lower limit of DC voltage reference value	130[V]
	Upper limit of DC voltage reference value	200[V]
	Control period	100[μ s]
	Difference α	1
	THD reference value	50[%]

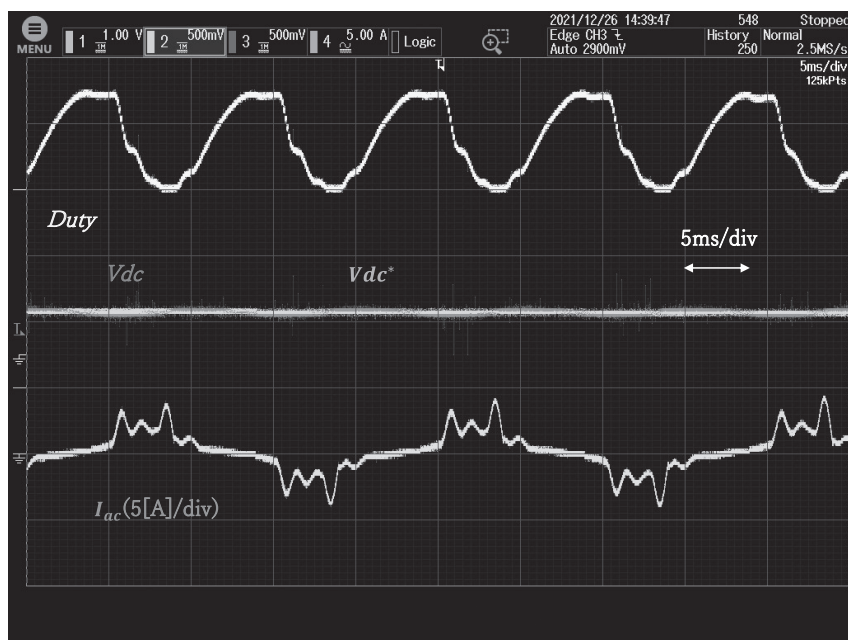


図11 THDを目標値とした制御による動作結果

が直流電圧指令に追従していることが分かる。

図12に出力電力を50[W]から300[W]まで50[W]刻みで測定したTHD目標値による直流電圧指令値制御での効率を示す。図12より部分スイッチング方式において、出力電力が大きくなる

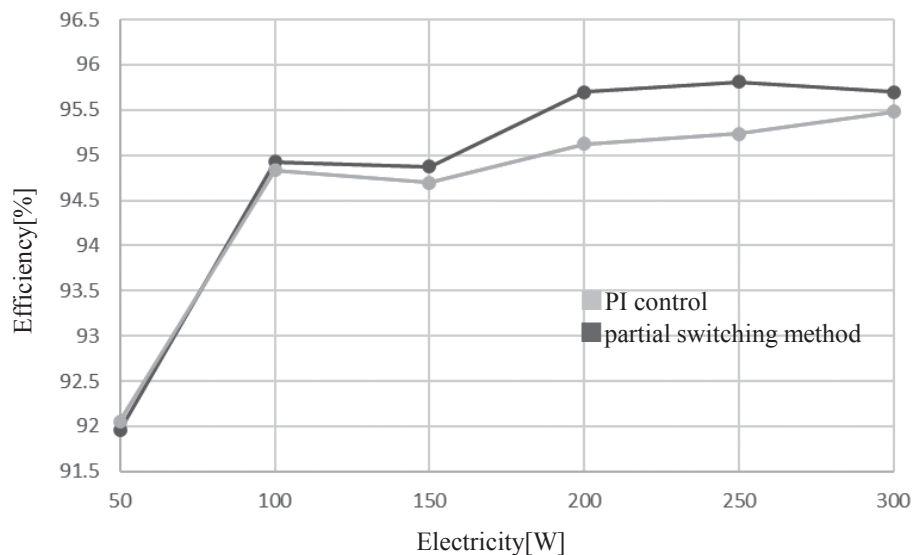


図 12 THD を目標値とした制御による効率比較

につれ効率が高まり、200[W] 以降は効率が 95.7% 程で高止まりしていることが分かる。PI 制御に比べ、200[W] で最大 0.57[%] 効率が改善された。

V. まとめ

単相 PFC コンバータを対象として、部分スイッチングを行うための直流電圧指令値制御を適用させた手法について検討し、実機による検証を行った。提案手法は以下の特徴を持つ。

- (1) 系統電流の THD と THD 目標値を比較し直流電圧指令値を生成する機能を構築した。
- (2) 系統電流を対象として、高調波成分と THD の演算を行う機能を構築した。
- (3) 実機による検証では、従来の PI 制御方式との比較を行い、THD を用いた制御方式では最大 0.57[%] の効率の改善が見られた。

今後は効率と高調波のバランスをさらに適切に測りながら制御が可能な制御方式についてモデル予測制御と呼ばれる制御方式を適用することでさらなる高効率化を検討しアジア地域に適した空調機用電力変換器の研究を進めていく予定である。

利益相反について

著者は東芝キャリア株式会社より報酬を受理している

参考文献

<日本語文献>

用途指向形次世代モータ調査専門委員会 2021年『用途指向形モータの技術変遷と期待される次世代技術』No.1507

遠藤隆久他 2006年『エアコン用インバータ装置の省エネ技術』東芝レビュー, Vol.61 No.12

<外国語文献>

Y.-W. Kim, etc. 2013. "A novel softswitched auxiliary resonant circuit of a PFCZVT-PWM boost converter for an integrated multichip power module fabrication," IEEE Trans. Ind. Appl., vol. 49, no. 6, pp. 2802–2809

R. Zhao, etc. 2007. "A novel soft-switching boost PFC with a passive snubber," in Proc. 2nd IEEE Conf. Ind. Electron. Appl., May, pp. 1473–1476.

S. Muthulakshmi, etc. 2014. "A new soft switched boost PFC converter for special machines," in Proc. Int. Conf. Adv. Commun. Control Comput. Technol., pp. 416–420.

Y. Jang, etc. 2007. "Interleaved boost converter with intrinsic voltage-doubler characteristic for universal-line PFC front end," IEEE Trans. Power Electron., vol. 22, no. 4, pp. 1394–1401

在日コリアンの就学遍歴とヘイトスピーチへの態度形成 —朝鮮学校における差別対抗的なアイデンティティ—

School Experience of Zainichi Korean and Attitudes toward Hate Speech: The Collective Identity against Racism Formed in *Joseon-School*

鄭 康烈*
Kangryol Chung

Abstract

Hate speech, a new type of racism against Zainichi Korean, has become a social issue in Japan since the 2000s. The purpose of this paper is to explain attitudes that Zainichi Koreans form toward this new racism in association with their life courses and identities. The qualitative survey, which combines life course interview and reaction survey conducted with the hate speech card, revealed that the attitudes toward hate speech can be divided into passive and assertive and those who have attended Korean ethnic school (*Joseon-School*) tend to actively "object to" the racist. I argue that this anti-racist disposition is formed through participating in "the special class" and the social movements held in the school. The findings obtained in this article contribute not only to migration and ethnic studies but also to the anti-racism movement in Japan.

Ⅰ. 問題の所在と研究目的——ヘイトスピーチ被害者の経験をいかに捉えるか？

在日コリアン¹に対するヘイトスピーチが日本社会の新たな社会問題として注目を集めるようになったのは、2000年代の後半ごろからである。ヘイトスピーチとは、マイノリティへの差別を煽動する効果をもつ、マジョリティ側からのあらゆる差別表現を指す。ここでの「あらゆる」という語はヘイトスピーチが多様な形態をとり得ることを意味するが、日本でとくに問題となっているのは、街頭デモの形をとってなされる憎悪表現や、ネット空間での差別の書き込みである。ある調査によれば、2012年から2015年に行われたヘイトスピーチデモは1152件にも上る（人権教育啓発推進センター、2016）。

ヘイトスピーチには、在日コリアンが従来から経験してきた差別とは論理的に区別できる新たな側面がある。たとえば、「在日の7割が特別永住資格を利用し不当に生活保護を受けている」「在日は通称名によって日本での犯罪歴を抹消できる」といった主張は、ヘイトスピーチの典型

* 成蹊大学アジア太平洋研究センター Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

¹ 大日本帝国による植民地支配の影響により、戦前・戦中・戦後の動乱期に日本に定住化した朝鮮半島出身者とその子孫のことを指す。現在の国籍は問題としない。

である（念のために述べるが、これらはデマであり事実に基づいていない）。こうした主張には、「朝鮮人は臭い」「怠惰な民族だ」というように在日コリアンの身体的特徴や文化を劣位に置く従来の差別とは区別可能な論理が内包される²。つまり、ヘイトスピーチの論理的特徴は、デマゴギーにもとづき在日コリアンの「特権」を糾弾する点にある（高，2015）。あるいは、歴史修正主義の主張によってマイノリティへの憎悪・差別を煽る場合もある。こうしたパターンには、「朝鮮人は強制連行や「慰安婦」の被害をねつ造する嘘つきだ」といった言説が当てはまる。

ヘイトスピーチの矛先となる被害者の側に目を向けたとき、「新たな差別」に対して形成される態度は、在日コリアンのなかでも分かれることに気づく。NPOなどによる被害実態調査では、「特定の場所を避ける」「新しく出会う人に対する態度を慎重にする」「公共空間での民族名の使用を避ける」「日本国籍への帰化を検討する」など、脅威に対して退避の行動をとる者の姿が確認されている（多民族共生人権教育センター，2015；中村，2014；ヒューマンライツナウ，2014；法務省人権擁護局，2016）。一方で、カウンターデモへの参加や提訴といった方法で、排外主義に積極的に対峙する者がいる。

このような状況下、ヘイトスピーチを向けられる側に焦点を当てた分析が少ないながらもなされてきた³。松岡は、在日コリアンの民族運動から排除されるダブルや帰化者としての在日コリアンが排外主義デモへのカウンター運動に参加していく回路を分析した（松岡，2016）。そこでは、参加者の民族的出自や属性を問わないカウンター運動の性質が、ダブルや帰化者としての在日コリアンの継続的な運動参加を可能にすることが論じられている。

また、朴はいわゆる「ニューカマー」のコリアン二名に聴き取りを実施し、かれらがヘイトスピーチをいかに認識し、それに対していかなる態度をとっているのかを明らかにした（朴，2016）。朴は、聴き取りを実施した二名にはヘイトスピーチの被害者としての意識よりも「冷静」にそれから「距離を置く態度」がみられるとし、そうした態度を可能にする要因を、日本社会よりも韓国本国の社会へのより強い情緒的コミットメントに求めている。

松岡の分析の焦点は、ヘイトスピーチを受ける個人と集団的なレベルでの対処（カウンター運動）との接合点——両者を上手くつなげる論理とはなにか——にある。こうした分析の意義は認めるが、それによって分析の対象となるのは、結果として社会運動に動員された者のみである。排外主義的言説が溢れる現代において、在日コリアン（社会運動に参加することのない者も含め）が、単独の個人としてヘイトスピーチをいかに受け止め、対処しているのかもまた問われる必要があろう。

この点、朴の分析は個人レベルでのヘイトスピーチ経験に焦点があるが、調査対象者が抱くヘイトスピーチに対する認識、ヘイトスピーチ規制に対する認識、カウンター運動に対する認識の三つが分析のなかで混線し、議論の焦点が定まらない点が見受けられる。結果的に、分析そのものの精度が低くなっていると言わざるを得ない。また、ニューカマーもヘイトスピーチの対象となることは間違いなが、「在日特権」言説を向けられるオールドカマーは分析対象となっていない。調査対象者の数も少ないため、ヘイトスピーチに対しての「距離を置く」以外の態度も分析されていない。

ヘイトスピーチを向けられる者たちに目を向けたとき、それに対して形成される態度に個々の

² 高は、本文中で言及したような従来からの差別を「古典的レイシズム」の概念で、ヘイトスピーチに代表される新たな差別を「現代的レイシズム」の概念で把握しており、本論もこの議論に従った（高，2015）。

³ 社会学におけるヘイトスピーチの研究は、どちらかと言えば被害者ではなく加害者の論理に目を向けるものを中心に展開してきたといえる。たとえば樋口（2014）など。日本の排外主義に関する研究動向については永吉（2017）を参照。

在日コリアンの間で差異が生じるのはなぜか。さらに踏み込んで、剥き出しの状態で表現される「ことばの暴力」に対し、敢えて声を挙げる者がいるのはなぜか。以上の議論を踏まえ、筆者は本稿の目的を、これらの問いを解き明かすことと設定したい。一考すると素朴な疑問にも思えるが、これらの問いを考察することには意味がある。エスニック・マイノリティの反差別の実践が生み出される源泉をたどる作業は、移民・エスニシティ研究に理論的なインプリケーションをもたらすと期待できるからだ。それに留まらず、ヘイトスピーチに積極的に対峙する当事者の背後にある論理を分析する作業は、人種差別の問題にいかに関与すべきかという社会的・実践的課題を考えるうえでも意味があるといえる。

II. 分析枠組み

1. ヘイトスピーチへの態度を規定する集合的アイデンティティ

ヘイトスピーチに対する在日コリアンの態度が分かれるとして、本稿ではこうした分岐を分析するため、アイデンティティと行為との関係について扱ったA.L. ストラウスの理論を用いる (Strauss, 1997[1959]=2001; 山口 2007)。

アイデンティティに関する議論の中心に言語を据えるストラウスは、社会において行為者が行う「名づけ」に着目する。ストラウスのいう名づけとは、行為者がある状況において特定の対象を分類・評価 (識別“identify”) し、自身の行為の方向性を定めること、あるいはそうした行為の方向性を予期することである (Strauss, 1997[1959]:21=2001:26; 山口 2007:154)。

この名づけは、ある集団のメンバーによって共有された「用語法 (=名づけの仕方)」に従って行われる。ストラウスのいう集団とは、社会に存在する無数の行為者たちのなかにおいて、用語法が共有された範囲のことを指す。ある行為者が集団の範囲で共有された用語法に基づき行為するとき、その行為者は当該集団のメンバーとしての名前 (=集合的アイデンティティ) を有しているとみなすことができる (図1)。

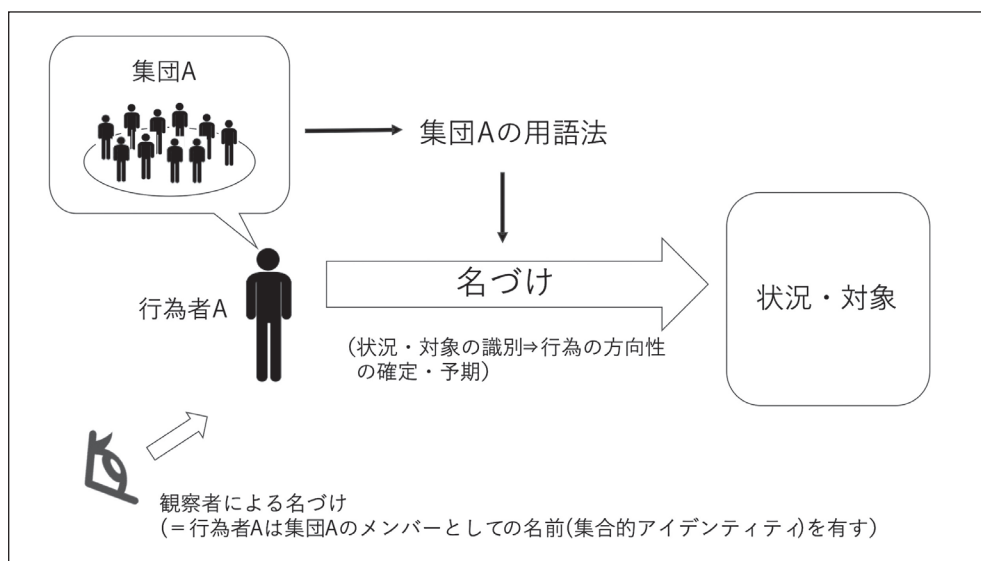


図1. ストラウスのアイデンティティと行為に関する理論

すなわち、ストラウスのいうアイデンティティとは、観察対象となる個人や集団を「名づけ」る際に用いる名前のことである。ただし、ここまでの議論に即して言えば、それは個人や集団に貼られる単なるラベルのようなものではない。ストラウスの集合的アイデンティティの概念には、集団に共有された「用語法」、またその用語法によって生み出される、当該集団に特有の識別の作法や行為の方向性も含意されている。単純化して言えば、ある特定の集合的アイデンティティを有する者は、それに対応した特定の行為の方向性を示すともいえる。この部分に関連する記述をストラウスの著作から引用しよう。

自分の世界〔自分の所属する集団〕をよく知っている人は、すべてのその筋道になじみがあり、強くコミットしている。何にコミットしているのか？ある状況においてある仕方で行うことを期待され、また自分自身期待する、ある種の——あるいは複数種の——人物としての自己概念〔アイデンティティ〕に対してコミットしているのである（Straus, 1997 [1959]:41=2001:51）。

※〔 〕、下線強調は筆者による

たとえば、特定の状況下においてヘイトスピーチ（と現在では一般に呼ばれるようになった現象）に触れた行為者は、それをいかに「名づけ」る——分類・評価し、自身の行為の方向性を定める——のだろうか。ストラウスの理論に沿えば、ある集団のメンバーとしての名前（＝集合的アイデンティティ）を有する行為者は、その集団の「用語法」に依拠しつつ、ヘイトスピーチに対して特定の形で対処（行為）するものと想定できる。

2. 在日コリアンのライフコースおよび集合的アイデンティティの多様化

ある者が形成する集合的アイデンティティの特徴は、その者が人生の軌跡においていかなる集団に属してきたかに左右される。この想定に立ち、本論では個々の在日コリアンのライフコースを分析の際の重要な変数として据える。その際におさえておきたいのは、在日コリアンのライフコース（ひいてはそこで獲得する集合的アイデンティティ）の多様化という現象である。

1910年に大日本帝国が朝鮮を植民地化したことが、在日コリアン（移民研究の立場から当時の文脈に即した呼称を用いるならば、「朝鮮系移民⁴」）の渡日および日本への定住化の直接的背景である。移民として日本にやってきた当初、かれらはある程度のまとまりをもつ一枚岩の移民集団として存在した（外村, 2009）。個人がたどる人生の軌跡に目を向けても、皆が皆、朝鮮系移民の集住地において同胞との社会関係に埋め込まれつつ生活を送っていくという定型的なライフコースを想定できた。しかし、定住の長期化にともなう日本社会への同化の進行によって、こうした画一的パターンは崩れていくことになる。結果として集団内に観察される現象は、以下のようにならざるを得ない。

まず、「在日コリアンの個人化」という現象がみられるようになる（川端, 2012）。これはすな

⁴ 筆者は、海外の移民研究（migration studies）や同研究分野の影響を受け日本で1990年代以降に興隆した（日本の）移民研究と在日コリアン研究とを接合させることによる研究上のアドバンテージは大きいと考えており、在日コリアンを移民研究の枠組みから分析する研究姿勢をとってきた。しかし、たとえ歴史的な文脈を説明する箇所とはいえ在日コリアンを「移民」と記述することには異論もあろう。「移民」には「外部からやってきた他者」というニュアンスが含まれており、日本に何世代にもわたり定住を続ける（さらに言えば、日本社会におけるメンバーシップを求めながらもそこから排除されてきた）在日コリアンにこのカテゴリーを当てはめることは、ときに適切ではないと思われるからである。この点を考慮し、本論では「移民」という語の使用を第一世代の歴史的経験について記述する箇所にのみ留めた。

わち、親族を除いて同胞とのつながりを一切持たない在日コリアンが登場する事態を指す。エスニック・コミュニティからの離脱と主流社会への生活拠点の移動が、この現象の直接的な背景である。個人化した在日コリアンの多くは自身の民族的なルーツを周囲に明かさず、「日本人」として主流社会の制度内部で生活を送っている。その過程で、朝鮮半島のオリジナルな文化的要素は消失されるケースが多い。

他方、定住が長期化してもなお、エスニック・コミュニティという制度⁵に参与しつつ同胞とのつながりを維持し続ける者もいる。コミュニティの内部では朝鮮半島のオリジナルな文化が一定程度維持・継承されるため、かれらの社会化プロセスはこうした要素に影響を受ける。ただし、こうした者は生活のすべての時間をコミュニティ内部で費やすわけではない。生活拠点をエスニック・コミュニティ内に置きつつも、コミュニティ外部で日本社会の一員としてマジョリティとも関係性を取り結んだり、日常的に日本のメディアに触れたりもする。また、人生のすべての場面・段階においてエスニック・コミュニティの内部に留まり続ける在日コリアンはもはやごく少数で、進学や就職、結婚などのライフイベントを機に、コミュニティと疎遠になるケースが一般的である。

3. 学校経験とアイデンティティ

それでは、在日コリアンの多様化するライフコースをいかに捉えればよいか。ライフコースの多様化は、個々の在日コリアンが人生の行く先々で巡り合う集団の多様化を意味する。そうした状況のなか、分析上有意な集合的アイデンティティをどこに見出すべきか。

ここで取り上げたいのは、在日コリアンのアイデンティティの多様性を、個々人の学校経験の違いから分析した研究である（曹, 2013）。この研究によれば、日本学校に在学する在日コリアンはアイデンティティの形成過程で葛藤を経験しやすい反面、同胞に囲まれながら生育する朝鮮学校⁶在学者は相対的に安定的なエスニック・アイデンティティを形成させるという。

朝鮮学校在学者に特徴的なアイデンティティがみられることを論じた研究はほかにもある。朝鮮学校在学者が（日本学校に在学する在日コリアンと比べて）安定的なアイデンティティを形成できるのは、朝鮮学校が日本の植民地主義的・人種主義的抑圧から在日コリアンを解放する場として存在するからである。ただし、その内部には本質主義的な民族観に由来する抑圧もまた存在する。このことに着目しつつ朝鮮学校在学者を観察した人類学的研究では、自身の使用言語や立ち振る舞いを状況に応じて切り替えることで、朝鮮学校内部の抑圧をも巧みにやり過ごす在日コリアンの子どもたちの姿が描かれる。かれらは主流社会とエスニック・コミュニティという二重の構造を往来するなかで、自身のアイデンティティを柔軟に管理する能力を獲得するのである（宋, 2012）。

在日コリアンのライフコースのなかでもとりわけ就学遍歴に着目し、それがかれらのアイデンティティ形成に大きな影響を与えることを示したこれらの研究は、本論の分析にとっても示唆に富む。これらの研究の成果は、集合的アイデンティティの形成という観点から在日コリアンのライフコースを考える際に、とりわけ学校集団が重要になることを示している。

このことを踏まえ本論の分析上の仮説を提起するならば、分析対象となる在日コリアンがどの

⁵ 社会の機能的諸側面ないし諸機能システムにおける人々の確定した行動様式の体系化をさす。『新社会学辞典』（有斐閣、1993年）の「制度」の項目も参照のこと。

⁶ 戦後まもないころに在日コリアンによって創設された民族学校である。朝鮮民主主義人民共和国を支持する在日本朝鮮人総聯合会を運営母体にもつ。現在、小学校から大学までを含めると全国に約60校が展開しており、生徒数は約5000人である。

ような学校に通ったかが、そこで形成される集合的アイデンティティを経由して、ヘイトスピーチへの態度を規定するという線が浮かび上がる。すなわち、「ライフコース（就学遍歴）→集合的アイデンティティ（集団に共有された用語法の獲得）→ヘイトスピーチへの態度（行為）」という線である。本論では、ストラウスのアイデンティティ論に依拠して導き出したこの構図に沿って分析を進める。

Ⅲ. 調査方法と分析データ

以上の議論を踏まえ、本研究ではまず、①調査対象となる在日コリアンにみられるヘイトスピーチへの態度（行為の次元）、②調査対象となる在日コリアンのライフコース（就学遍歴）の二つを把握する。そのうえで、特定の学校に属した経歴とヘイトスピーチへの態度に関連が示唆される場合、その学校集団によるヘイトスピーチの「名づけ」方（集団の用語法による）の特徴を分析する。ストラウスの議論によれば、集団の用語法は「歴史を有する」（山口, 2007:155）。すなわち、集団の用語法は過去から続くメンバーたちの実践の蓄積によって構成されるものといえる。したがって、集団の用語法を分析するためにはその集団の歴史的経験に目を向ける必要がある。

本論では上述の①②を、質的調査手法で把握する。このとき、②の把握はオーソドックスな聴き取りでも十分可能であると思われる。問題は、①のヘイトスピーチに対して形成される態度をいかに把握するかである。

冒頭で述べたように、ヘイトスピーチは多様な形態をとり得る差別である。在日コリアンの立場に立てば、かれらはそれをネット上の書き込みの目撃、集団的な街宣デモとの遭遇、目と目の合う対人関係における言葉の投げかけといった形で経験すると想定できる。こうした被差別経験の文脈（差別を経験する状況、ヘイトスピーチの表現形態や具体的文言など）は、被害者がそれに対して形成する態度の在り方を左右してしまうだろう。そのため、特定のライフコースで形成した集合的アイデンティティがヘイトスピーチへの態度をいかに規定するかを分析するためには、ヘイトスピーチ経験の文脈という変数を統制する必要がある。

この課題を考えるうえで、海外のレイシズム研究の方法論が参考になる。ユダヤ人とゲイのヘイトスピーチ経験の比較を行った米国の研究では、調査対象者にヘイトスピーチの文言が書かれたカードを提示し、その際に観察される反応を分析するというリアクションサーベイの方法が用いられている（Leets, 2002）。

本研究はこの方法を借り、調査対象者がヘイトスピーチに遭遇するという仮定の状況を作り出すことで調査を実施する。具体的には、調査対象者にヘイトスピーチが書かれたカードをみてもらい、そこに書かれたメッセージを「出会って間もない排外主義者から一体一の関係で、口頭で直接浴びせられる『事件』」を想定してもらったのち、自身がとるであろう対処方法についての語りを得る。

このとき、「出会って間もない排外主義者」が、たとえばジェンダーや年齢などの面でいかなる人物なのか、また、そうした排外主義者とどこ（密室、開放的な空間、職場、学校、あるいは居酒屋やカフェなどなのか）で出会ったのかといった条件までを統制することができなかった。細かな条件設定にまで配慮できなかったこの点は、本調査の限界・反省点として残る。しかし、対象者にある程度の解釈の余地を与えてしまいつつも、調査によって得られたものが現代の在日コリアンのヘイトスピーチに対する態度を知り得る貴重なデータであるという判断のもと、分析

に用いることとする。

また、リアクションサーベイの実施に際して留意すべき点に、調査実施にともなう侵襲性の問題がある。ヘイトスピーチが在日コリアンにもたらす被害として、恐怖、怒り、悲しみ、絶望といったネガティブな感情の生起のほか、フラッシュバック、アイデンティティの揺らぎ、悪夢、不眠、児童の夜泣き・夜尿・パニック、うつ症状といった被害が報告されている（多民族共生人権教育センター, 2015; 中村, 2014; ヒューマンライツナウ, 2014; 法務省人権擁護局, 2016）。いかに調査のなかの仮定的な状況とはいえ、差別の文言を実際にみてもらうことは、対象者に負の影響をもたらしかねないだろう。このことを勘案すれば、リアクションサーベイの実施には慎重になるべきである。

だが、それでもなお、筆者はマイノリティとされる者たちの主体性⁷を分析する意義を主張したい。在日コリアンの日本社会での歴史を振り返れば、かれらが多くの反差別の実践を繰り返してきたことに気づくだろう。本論の冒頭で示したように、在日コリアンのなかには現代のヘイトスピーチに対して積極的に対峙する者がいる。こうした実践の源泉を探ることは、差別の問題に取り組むうえでのヒントをもたらすばかりでなく、ひいてはマイノリティ自身のエンパワーメントにもつながると信じたい。方法論上の批判はあるだろうが、本論ではこうした見解のうえ、調査を実施するに至った。ただしその際、調査の侵襲性を最小限にするべく、筆者は以下の二つの手順を経た。

第一に、調査協力を依頼する際（基本的にEメールやメッセージアプリで行った）、筆者がヘイトスピーチに関して在日コリアンに聞き取りを行っている者であることを調査対象者に明確に伝えた。これにより、対象者は聴き取りでヘイトスピーチに関する内容を尋ねられることを予期できたと思われる。第二に、調査当日の聴き取りを始める前の段で、調査過程においてTwitterから転載した実際のヘイトスピーチの文言をみてもらうことを口頭で伝えた。当然、第一および第二のどの段階でも、対象者が自らの意思で調査協力を断れるよう配慮した。

筆者は以上の方法により、2015年から2016年の期間、機縁法を用いて知り合った20代の在日コリアン計24名を対象に聴き取りを実施した。本論で記載する対象者の年齢はすべて、調査当時のものである。調査は基本的に一人につき一回、1時間から2時間ほどの時間をかけておこなったが、さらに補足的な聴き取りを実施したケースもある。

聴き取りはまずライフコースの把握から始め、その後にカードを用いたリアクションサーベイに移るという手順を踏んだ。ライフコースの把握においては、本論が分析に際して重視する学校経験を中心に聴き取りを実施した。リアクションサーベイでは、ヘイトスピーチが書かれたカード（図2）を対象者に示したのち、「このようなメッセージを浴びせられたときあなたはどうか対処するか」を、その理由も含めて把握した。本論が分析に用いるのは、こうして得られた語りのデータである。

調査を実施した24名のうちヘイトスピーチが記載されたカードを閲覧しないことを希望した者が1名、補足調査を実施できなかった者が2名存在し、最終的に本研究が設定する調査方法にもとづいて完全な調査データを得られたのは、この3名を除外した21名の在日コリアンである⁸。

⁷ 熊本はアマルティア・センのagency概念などに依拠しつつ、この語に「社会の不平等や差別構造に對抗し、積極的に社会に働きかける力」という意味を含ませる（熊本, 2020:22）。本論ではこの用法に沿いつつ、「主体性」という言葉を用いる。

⁸ 参考までに調査対象者のジェンダーの内訳を示すと、男性が11名、女性が9名、セクシュアル・マイノリティを自認する者が1名であった。

- ・在日特権は、都合の悪い人がサイトをねつ造したり、そんなものはないと言っているけど、私は知り合いから話をきいただけでも結構あります。日本人の税金がなぜ密入国してきた韓国人に流れないといけないのでしょうか？強制連行された、差別をされたと嘘ばかり言っています。
- ・強制連行、従軍慰安婦の嘘デタラメをでっち上げて日本人から金をせしめ、在日特権でこれまた日本人の税金に寄生して自分たちの金にする利己的な利益追求心
- ・ようやく強制連行されたと言わなくなったじゃないか。それだけでも進歩だ。ハッキリ戦後密入国したって言えよw
- ・便利だわ、通名→犯罪→逮捕→通名変更→犯罪→…。こんな在日特権。

図2. 調査で用いたヘイトスピーチカード⁹

IV. 調査結果の記述

本節では、リアクションサーベイで得られた調査対象者の語りをもとに、在日コリアンがヘイトスピーチに対して形成する態度を記述していきたい。語りから整理されたヘイトスピーチに対する態度は、大きく分けて二つである。

1. 反論する——ヘイトスピーチへの積極的態度

第一に、ヘイトスピーチを行う者（以下、排外主義者）に対して積極的に反論を試みる態度が確認された。こうした異議申し立てに関する語りを詳しくみていくと、ヘイトスピーチへの「反論」は、そのなされかたによってさらに二つのパターンに分けられることがわかる。具体的な語りを紹介しよう。

語り1（Hさん、20代半ば、男性、大学生）

俺の周り、割と偏ってるっていうのがあるからな。大抵の人は〔歴史に〕興味ないじゃん。良くも悪くも興味持ってるやつらがちょくちょくいたから。まがりなりにも勉強してるやつらが。少なくとも歴史的事実とかはいろいろちょこちょこ押さえてる。ただ、その事実の解釈でまあ揉めるわな。(…)[「在日って〜」ってなると「よっしゃ、講義してやろう」って。

※（〔 〕）は筆者による補足、(…)は省略を意味する。以下同様）

語り2（Gさん、20代前半、男性、会社員）

俺はちゃんと話し合おうと思います。笑ってごまかしたりとかはせずに。たとえばこういう〔カード上の文言を指さして〕、朝鮮人がこんなやつだって決めつけみたいなのあるじゃないですか。嘘か本当かわからないような。で、強制連行されたかどうか、もうわからないです。本当のことはおれも。「だけど決めつけて話すのはよくないんじゃないの?」と。そういうスタンスで話して。

語り3（Pさん、20代前半、女性、会社員）

「違うよ」とは言うよ。自分がこういう経歴で、「だから今こういう人間なんですよ」って。

⁹ ヘイトスピーチはTwitter上から、在日コリアンの「特権」を糾弾する内容と歴史修正主義を含むものを選別・抽出した。

自分のこと悪い人だと思わないから、「こういう人もいますよ」っていうのをアピールしたら、それだけでもちょっと違う？「こんなに頑張ってるんだよ」って「いいやつなんだよ」っていうのを見せて、そしたらその人の中でも、ああそういう人もいますんだって価値観はちょっと出るじゃん。考えが全部変わんなくても、価値観の一つとして影響があればいいんじゃないかと。

まず、ヘイトスピーチへの反論は、排外主義者の誤った歴史認識や在日コリアンの実態に関するデマゴギーを論駁する形でなされ得る。このパターンに該当するのが、語り1である。ただし、調査を通じた全体的な印象として言えることは、ヘイトスピーチを行う者が主張する「在日特権」が実際にあるのか、あるいは排外主義者側の歴史認識が正しいのかを判断することに、調査対象者の多くが困難を抱くということである。論駁が可能なのは、それが可能なほどの知識や技能・技術を備えた者のみだといえる。

しかし、知識がないからといってヘイトスピーチへの反論が不可能なわけではない。それが差別である以上、ヘイトスピーチにはある性質を集団の成員すべてに当てはまるものとみなす「過度の一般化 (overgeneralization)」¹⁰の論理が内包される。すなわち、「朝鮮人は(皆が皆)○○だ」という形でなされる決めつけである。このような側面に対してなされる反論の仕方が、語り2・3に示される方法である。上で述べた論駁に対して、さしあたりこれは過度の一般化の否定と呼べるだろう。

2. 無視する・立ち去る——ヘイトスピーチへの消極的態度

第二に、ヘイトスピーチを「無視する」「立ち去る」といった類いの語りも得られた。前項で確認したのは排外主義者への直接的な異議申し立てであるが、ここで紹介する態度はそうした積極的姿勢とは逆のベクトルを示すものである。そのため、ここではヘイトスピーチへの消極的態度としてまとめておこう。具体的な語りを紹介したい。

語り4 (Vさん、20代半ば、男性、会社員)

こういうことを初対面の人間という時点で、自分の意見を伝えたり、相手を説得しようとしても、相手の考えを変えるのは無駄だと思うから、相手にしないと思う。

語り5 (Fさん、20代半ば、男性、会社員)

こんな暴言的な感じじゃなくて、どうなんだろうって疑問をもって建設的に議論をしてくれる感じだったらおれも自分がこうだあだと思って、拙い知識で説明したりとか、うまく説明できなかつたらちょっと調べてやろうかなっていう気にはなるけど、こういう暴言的な感じだったらもう無視しちゃう。一線置いちゃう。聞かなそうじゃん、話しても。こいつと話しをしても時間の無駄になりそうだなってなっちゃう。

語り6 (Tさん、20代半ば、女性、大学生)

うーん。普通に無視して通りすぎる。(…) 普通になんか、頭おかしい人が…[やっている]。(…) 危険人物じゃないですか。だから物理的な危害を避けるために、去ります。

¹⁰ Pettigrew *et al.* (1982) を参照。

語り5および語り6からは、排外主義者と意思を疎通させることは不可能であり、かれらに対して何らかの働きかけを行うことは無駄であるという認識がみてとれる。ある種の諦めともとれるこうした認識の背景には、排外主義者の暴力的姿勢がある。また、その場を後にし、ヘイトスピーチを行う者と物理的な距離を取ると答えた者もいる。語り6にみられる「危害を避けるため」という言葉もまた、調査対象者が排外主義者の暴力性を意識していることを象徴しているだろう。

以上、調査で観察されたヘイトスピーチへの態度が積極的態度と消極的態度の二つに大別できる¹¹ことがわかったが、調査の全体的傾向についても述べたい。

分析対象者21人のうち、消極的態度をとった者が14人であった。まずは、今回の分析対象者の半数以上がヘイトスピーチに対して消極的な態度をとるという事実を確認しておきたい。こうした傾向の背景には、暴力的かつ非論理的な排外主義者への反論に伴うリスクや心理的ストレスがあると考えられる。

一方、積極的態度をとった者は7人であった。ヘイトスピーチに敢えて異議を申し立てる姿勢がこの7人に確認される背景は、いかなるものか。対象者のライフコースのなかでも本論の分析がとりわけ重視するのは、就学遍歴という変数である。そこで、この7人の就学遍歴をみてみたい（表1）。

表1. ヘイトスピーチに対して積極的態度をとる7名の就学遍歴

	Gさん (23歳男性)	Iさん (22歳男性)	Hさん (24歳男性)	Pさん (23歳女性)	Aさん (24歳男性)	Dさん (20歳男性)	Cさん (25歳女性)
小学校	朝鮮学校	朝鮮学校	朝鮮学校	朝鮮学校	朝鮮学校	日本学校	日本学校
中学校	朝鮮学校	朝鮮学校	朝鮮学校	朝鮮学校	朝鮮学校	日本学校	日本学校
高校	日本学校	朝鮮学校	朝鮮学校	朝鮮学校	インターナショナル スクール	日本学校	日本学校
大学	日本学校	日本学校	日本学校	日本学校	日本学校	日本学校	日本学校

表1をみると、積極的態度をとる者のなかに朝鮮学校在学経験者がそれなりの数いることがわかる¹²。先述のように、先行研究では朝鮮学校が在日コリアンに特徴的なアイデンティティを形成させる独自の論理をもつ場であることがわかっている（曹, 2013; 宋, 2012）。こうした知見も加味しつつ表1の傾向を眺めれば、朝鮮学校在学経験とヘイトスピーチの積極的態度との関連を分析することには意味があるように思われる。

本論ではこの説をより深く検討する作業へと分析を進めることとし、以下では、冒頭に提起した「ライフコース（就学遍歴）→集合的アイデンティティ（集団に共有された用語法の獲得）→ヘイトスピーチへの態度（行為）」という枠組みを念頭に置きつつ、そもそも朝鮮学校とは具体的にいかなる場であるのか、そこに集う者たちは在日コリアンに向けられる差別を集団としていかに名づけてきたのかを、調査で把握できた対象者自身の経験を参照しつつ分析していく。

¹¹ ちなみに、方法論の箇所でも参照した米国のレイシズム研究でもヘイトスピーチへの態度が自己主張型（assertive）と受動型／退避型（passive/withdrawal）の二つ確認されており、本論の調査結果とおおむね一致する（Leet, 2002）。

¹² そもそも本研究が分析した調査対象者全21人の就学遍歴の内訳について述べると、朝鮮学校に通学経験があるのは8人であった。この8人のうちの5人が積極的態度を表明したことになる。したがって、消極的態度をとる14人の就学遍歴の内訳について言えば、朝鮮学校に通学経験のある者が3人、ない者が11人となる。

V. 分析

1. 差別の窓口としての朝鮮学校

まずは、そもそも朝鮮学校とはいかなる場であるかについてみていきたい。

朝鮮学校の歴史を振り返るとき、そこは日本社会が在日コリアンに向ける差別の窓口¹³として存在してきたことに気づく。1990年代に朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国¹⁴）政府によるミサイル開発の問題がメディアで取り沙汰された際には、登下校中の朝鮮学校女子生徒のチマチョゴリ¹⁵が刃物で切り裂かれるヘイトクライムが多発した。朝鮮学校の生徒を狙う犯罪や嫌がらせは、2000年代に共和国政府による日本人拉致の問題が発覚した際にも頻発したという¹⁶。また、2009年に京都朝鮮学校の校門前で拡声器を持参した在特会¹⁷メンバーらが長時間にわたりヘイトスピーチを行った事件は記憶に新しい（中村、2014）。本研究の聴き取り調査でも、朝鮮学校在学経験者からは学校に向けられる差別に関する語りが得られた（語り7・8）。

語り7（Iさん、20代前半、男性、学生）

中学のときはありましたね。日本の中学生にいたずらされたみたい。そういう時期があって。〔日本の中学生が朝鮮学校の〕女の子にちょっかい出したみたい。（…）そういう事件はありましたね。

語り8（Aさん、20代半ば、男性、会社員）

神戸のウリハッキョ〔朝鮮学校〕の学生がカッターでチョゴリ切られたときやん。そんなうち〔の朝鮮学校〕も一日だけ私服で登校とかあった。

問題は、朝鮮学校がこのような差別を集団としていかに名づけてきた——いかに識別（identify）し、それに対して行為してきた——のか、である。

2. 差別問題に関する「特別授業」

まず確認したいのは、差別を向けられる状況に対し、朝鮮学校を運営する者たちが無策であったわけではないということである。朝鮮学校在学経験者への聴き取りからは、こうした差別への学校側による対応として、在日コリアンに向けられる差別に対処するための「特別授業」のようなものが校内でもたれていたことも判明した（語り9・10）。

語り9（Pさん、20代前半、女性、会社員）

チョゴリ切られた事件に対しての新聞とか、スピーチをやってる映像とかは学芸会で見たことある。（…）昔の人の方がいっぱい〔差別の〕被害受けてたわけじゃん。その被害状

¹³ 一方、第Ⅱ節第3項で述べた通り、朝鮮学校が「日本の植民地主義的・人種主義的抑圧から在日コリアンを解放する場」としての一面を備えていることもまた事実である。

¹⁴ 朝鮮民主主義人民共和国の略称としての「共和国」は朝鮮学校コミュニティ内部の当事者も用いるものであり、筆者もこれを用いることとした。

¹⁵ 朝鮮の伝統的な民族衣装である。2000年代ごろまでは登下校時の制服として朝鮮学校の女子生徒が着用していた。

¹⁶ 筆者による朝鮮学校在学経験者への聴き取りによる。

¹⁷ 「在日特権を許さない市民の会」の略。「在日特権」の糾弾などを活動目的として2006年に結成された日本の代表的な排外主義団体である。

況に対する新聞とか、映像はよく見せられた。それは授業の一環。ビデオ学習みたいのがあって。

語り 10 (Fさん、20代半ば、男性、会社員)

最近とかニュースとかでさ、京都とかどこだっけ、運動場のスピーカーとか〔在特会のメンバーに〕動かされて、裁判していくら勝ったとか¹⁸。朝高〔朝鮮高校〕だったらそういうのは絶対言うと思うし、先生が朝の会とかで。

これらの語りにみられる「特別授業」のようなものの実態をより詳しく把握するため、筆者は東京圏の朝鮮学校で現役の教員として働く在日コリアン二名に補足の聴き取りを実施した¹⁹。聴き取りに応じた教員ら曰く、上の複数の語りにみられる「特別授業」は、学校内で土曜日の「課外授業」枠²⁰などを活用しながら現在でも継続的に行われているものだという(語り11)。こうした取り組みは、例えば上述のチマチョゴリ切り裂き事件、拉致問題発覚後の学校への嫌がらせ、2010年に開始された高校無償化制度からの除外といった差別への対応として、学内でとられてきた。また、差別問題に関する特別授業では、共和国本国や総聯本部から学校に共有される映像資料などが教材として用いられる(語り12)。

語り 11 (Kさん、朝鮮学校教員)

朝の職員室とかで、いろいろ〔差別的な出来事〕があったりすると、〔こういうのがあったから、各学年ごとでもいいし集団ごとでもいいし、学生たち集めて話をしあけてください〕みたいな呼びかけがあつて。(…)でも〔学校〕全体でやるっていうよりは、各集団でやるの。小学校低学年は低学年。低学年の年齢に見合った学習の仕方。小学校4, 5, 6年は4, 5, 6年向けにやって、中学は中学でやって。中学の内容を高学年とか低学年に言っても言葉とか難しいじゃん。たとえば「高校無償化」って言うだけでは初級部は分からないから。〔みんながもらえる権利をもらえてない〕とかそういう風に碎いて言ってあげないと意味が通じないから。碎いて碎いて、ちょっとずつ難しくみたい。

語り 12 (Kさん、朝鮮学校教員)

高校無償化の映像資料とか、〔学校が歴史的に〕どうやってやってきたとかの映像もあるし、あとは「4.24」が大きいかも。「4.24 阪神教育闘争」。その映像を〔学生たちに〕見せて。だからさ、ウリハッキョ〔朝鮮学校〕の校舎から子どもたちを日本の軍人が出してる映像とかも残ってる。そういうのを見て学んでる。〔昔はこうやってハラボジ〔お祖父さん〕とかひいお祖父ちゃんひいお祖母ちゃんたちが〔学校を〕守ってきたんだよ〕って。

語り 12にみられる通り、差別に関する「特別授業」では、民族学校弾圧に対して在日コリア

¹⁸ 本文中にも言及した京都朝鮮学校襲撃事件およびそれに対して被害者らが起こした裁判訴訟についての言及である。判決は、被告である在特会側に学校周辺での街宣禁止と1226万円3140円の損害賠償を言い渡した(中村, 2014)。

¹⁹ 聴き取りは2022年6月～7月に東京圏内の某所において、一人につき一時間弱実施した。

²⁰ 朝鮮学校では基本的に土曜日登校日となっており、午前中のみ授業が行われる。聴き取りに応じた教員が務める小学校では、午前中4時間の授業のうち、2時間が「課外授業」枠として確保されているという。この枠は様々な活動や学習に利用されるが、本論が焦点化したような差別問題に関する「特別授業」も、この枠で実施されることが多いという。

ンらが抵抗した「阪神教育闘争」²¹についても教えられる。注目すべきは、日本政府からの弾圧に対抗し、自分たちの先祖が学校を「守ってきた」という集団としての行為の方向性が、映像資料を用いながら次世代に示されるということである。

また、差別に対していかに振る舞うべきかは、教員から学生へ直接的なメッセージとして伝えられる。2020年のコロナ禍、さいたま市が自治体として行ったマスク配布事業の対象から朝鮮学校の幼稚園を除外する事件が発生した。聴き取りを行った朝鮮学校教員はこの件について、「特別授業」で次のように学生に伝えたという（語り13）²²。

語り13 （Cさん、朝鮮学校教員）

本当に感情的な部分で、これから生きていく子どもたちなのでやっぱりちょっとメッセージは込めますけど。（…）差別の問題についても「そこで負けてちゃダメだ」っていう話はしますけど。（…）結局、今幼稚園生が差別を受けてるわけで、「これはリアルに差別の問題なんだ」って。本人たちには、「このままにしてるわけにはいかないだろう」って。「声あげて闘っていくしかないんだよ」って、「闘っていかなくちゃいけないんだ」ということを伝えて。

このように差別に対する行為の方向性がときには映像資料を用いて、またときには直接的なメッセージとして示される結果、朝鮮学校に在学する者には差別というものに対してどのような認識が形成されるのか。自身も朝鮮学校卒業生であり、また現在でも学校コミュニティに所属し続ける朝鮮学校教員への聴き取りからは、こうした認識を象徴的に示していると思われる語りが得られた（語り14）。

語り14 （Kさん、朝鮮学校教員）

〔差別は〕自分の時代もあった。中学生の時に下校中バス乗ってた、日本の●●高校の学生から「テポドン、テポドン」とか言われて。「うるせー」みたいに友達がめっちゃ言い返してた（笑）。でも、言われたら言い返すみたいなのがかった。魂みたいなの。

この語りにみられる「言われたら言い返す」という姿勢は、朝鮮学校を守ってきた先人たちが差別に対抗してきた姿とも重なる。差別というものをいかに理解するか、それに対していかに行為すべきかの方法が、学校集団のなかで綿々と受け継がれてきた結果だと考えられるだろう。差別をいかに名づけるかの用語法が、集団のものとして歴史的に成立しているともいえる。

3. 反差別運動への参加の経験

聴き取り調査からのさらなる発見点として、朝鮮学校の学生が学校主導の社会運動に参加する点についても言及したい。日本で高校無償化制度が開始したのは2010年のことであるが、現在に至るまで、朝鮮学校はこの制度の対象外とされている。こうした扱いに対する抗議は、当初から朝鮮学校に子どもを通わす保護者や教職員を中心に、街頭デモや路上での署名集め、裁判訴訟

²¹ 1948年、連合国軍総司令部の指導を受けた文部省は在日コリアンの子弟を日本人学校に就学させるよう各都道府県知事に通達を出し、朝鮮学校の強制閉鎖を命じた。これに抗議し、兵庫・大阪では在日コリアンによる反対闘争が繰り広げられた。

²² 今回調査対象となった朝鮮学校在学経験者がこの教員の授業を受けたわけではないが、「4.24 阪神教育闘争」などを題材になされた過去の「特別授業」においても、同様のメッセージの伝達が行なわれてきたと推測される。

という形で展開されてきた²³。注目すべきは、下に掲載する二つの語りに示されるように、筆者が聞き取りを実施した朝鮮学校在学者たちもまた、学校の一員としてこうした運動への参加経験をもっていたという事実である。

語り 15 (Pさん、20代前半、女性、会社員)

高校無償化〔除外反対〕のデモとかやったよ。高校のときかな。「もう卒業するし意味ないのに頑張んなきゃいけないの？」みたいな(笑)。けどそのときに一番問題になって、「後輩たちのために頑張ろう」ってなって。うちらがデモ仕切って、代々木公園？だったかな。

語り 16 (Iさん、20代前半、男性、学生)

高校のときに、〔高校無償化除外に対する〕訴訟起こす原告団に入りました。高校時代に〔先生から〕「やってくれないか？」って言われて、「いいすよ」って。高校時代調子に乗ってたんで、格好いいと思って(笑)。けど、許せないとは思ってたから。一回、参議国会館で決起集会とかやった時に、社民党の福島さんとかいるときに、「前で挨拶しろ」って言われて、もう適当にしゃべって、パシャパシャ写真も撮られて。

映像資料などを用いた「特別授業」が差別を理論的に学ぶ機会であったなら、差別的言動を向けてくる近隣の高校生に「言い返す」経験、あるいは反差別の社会運動に参加する経験は、いわば実践として差別問題に取り組む機会だといえる。朝鮮学校在学生のごくこうした経験(集団としての用語法を、行為の次元において実践してみる経験)が本研究に対してもつ意味は大きいだろう。

以上の議論をまとめよう。朝鮮学校には歴史的に日本社会から差別が向けられてきたが、学校をとりまく人びとはこうした差別を、(泣き寝入りせざるを得ないものでも放置すべきものでもなく)対抗して解決すべき課題として識別(identify)し、実際にそうした認識に基づいた行為を反差別の闘争として展開してきた。これが、朝鮮学校の成員が差別というものを名づける集団としての仕方である。

こうした集団としての用語法は、差別問題についての「特別授業」によって次世代に継承される。ここでいう「特別授業」とは、日本社会からの差別に対する学校側の対応が蓄積された結果、学内に制度化されたものである。それは、差別事件に関する映像資料や新聞記事などを用いながら、「朝の会」や「活動」の時間、放課後の「学習会」、土曜日の「課外授業」などの枠内でもたれている²⁴。

過去から綿々と続く差別の歴史を教えられることで、学生たちは自らに降りかかる被害を在日コリアンの歴史的な文脈の上に位置づけられるようになる。差別は偶発的な経験でも個人的な経験でもない。「昔の人の方がいっぱい被害受けてたわけじゃん」という語り9が象徴するように、

²³ 語り15で言及される高校無償化除外反対デモでは、実際に学生が街頭に立ち、問題を周知するためのビラ配りや署名運動、マイクを持ってのアピール活動が行われたという。また、朝鮮学校が国を相手どった裁判訴訟は、全国5か所で展開された。2021年までにすべての訴訟において学校側の敗訴が確定し、法的措置という形で運動はいったん終止符を打ったが、当事者らによる反差別の運動は現在も続けられている。

²⁴ 今回の調査対象者の朝鮮学校在学時期と現任教員への聞き取り内容から、こうした取り組みは少なくとも1990年代後半から現在まで継続的に続けられていると確認できるが、朝鮮学校の歴史を考えると、それより前から続けられていると考えるのが自然だろう。また、今回の語りを得た朝鮮学校在学経験者の出身校は東京、大阪、岡山、埼玉、神奈川に位置しており、差別問題への「特別授業」は、朝鮮学校のうちの特定校だけが展開するものではなく、全国の朝鮮学校である程度の地域横断性をもってなされてきた実践であることも指摘しておこう。

戦前・戦後と続く植民地主義との関連で、それは理解されるようになる。朝鮮学校という場において、学生は自身に向けられる差別がもつ意味をいかに解釈すべきか、その識別（identify）の仕方を教わる機会を得るといえる。

この「特別授業」を受ける過程で、学生たちは差別に対して先人たちがいかに対抗的に振る舞ってきたかの手本も知ることになる。先述した阪神教育闘争の例以外にも、語り10にみられる「裁判していくら勝った」という発言も、正にこうした例として挙げられる。また、「特別授業」を実施する教員の側は、差別に対して声をあげて対峙しなければならないというメッセージを直接学生に語りかけもする（語り13）。

さらに注目すべき事実は、こうして示される集団としての行為の方向性に沿って、今回調査を実施した朝鮮学校在学経験者が、自らも学校が主導する高校無償化制度除外反対デモに参加した経験をもっていたということである。すなわち、調査対象となった朝鮮学校在学経験者は差別に対して取り得る行為の方向性を知識として得るだけでなく、それを実践の経験を通じて自身のうちに身体化させてきたといえる。とくに強調したいのは、その方向性が、無視や黙殺といった消極的態度ではなく、正面からの異議申し立てという積極的態度であるということである。

ストラウスの理論における「名づけ」とは、対象を識別し、それに対する行為の方向性を定めることであった。ストラウスはここでの行為を、予期的なものとしても想定している。すなわちストラウスの議論においては、観察対象となる行為者によって実際に行為がとられたかは必ずしも問題とはならない。本研究のリアクションサーベイで朝鮮学校在学経験者に観察されたヘイトスピーチへの積極的態度は、朝鮮学校における集団の用語法に沿った行為の予期的な方向性であったということは考えられないだろうか。つまり、ライフコースのある時期に朝鮮学校に在学したことが、そこで形成された集合的アイデンティティを経由して、ヘイトスピーチという差別に対する積極的態度として観察されたというのが、本研究の結論である。

VI. 結論

2000年代後半ごろ、日本社会における新たな差別の問題としてヘイトスピーチは台頭した。排外主義運動の担い手についての研究が蓄積される一方、ヘイトスピーチに向けられる側の経験が個人のレベルで詳細に検討されることはなく、なぜ一部の在日コリアンがヘイトスピーチに積極的に対峙するのかは明らかではなかった。本研究は、この問いを出発点として開始された。筆者がそこで目指したのは、差別に対して異議を申し立てるエスニック・マイノリティの行為の源泉を紐解く作業から、学術理論への貢献や差別問題の改善に向けたインプリケーションを引き出すことであった。

ライフコースインタビューとヘイトスピーチカードを用いたリアクションサーベイを組み合わせた在日コリアンへの聴き取り調査からは、次のような知見が得られた。①在日コリアンのヘイトスピーチへの態度は消極的態度と積極的態度の二つに大別される。②朝鮮学校在学経験者にはヘイトスピーチに積極的に「反論する」傾向がみられる。①について、調査において設計された仮定状況へのリアクションを観察したとき、一部の者たちの間でヘイトスピーチに対して積極的態度を示す傾向が確認されたのは事実である。この事実を仮定状況で得られた分析に値しないものと退けることは容易であるが、本研究は調査で確認されたこの傾向それ自体がもつ意味を見出すため、②についてさらに検討すべく、朝鮮学校の内部における生徒たちの経験の分析へと進んだ。

学校内部の論理については前節で述べたため要点だけ示したい。本論の分析が示したのは、朝鮮学校在学経験者にヘイトスピーチへの積極的態度をとらせる要因として、かれらが特有の学校経験のなかで形成した集合的アイデンティティがあるということである。

このような結論を導き出した本研究は、果たしていかなる意義をもつだろうか。本論のテーマとの関連から移民研究やエスニシティ研究の理論的関心となり得る問いを挙げるならば、移民やエスニック・マイノリティが形成するエスニック・コミュニティがいかなる機能を果たすのかという疑問を挙げられるだろう。在日コリアンが戦後の日本社会に創設した朝鮮学校という場もまた、多くの同胞たちが集うエスニック・コミュニティとみなせるからである。

エスニック・コミュニティの機能については海外でも多くの議論があるが、日本の文脈でコミュニティとしての朝鮮学校について論じた研究をみるなら、本論の序盤で示した通り、そこは在日コリアンに安定的ないしは柔軟なアイデンティティを形成させる場として機能することが論じられてきた。だが、そうして形成される集合的アイデンティティのなかに本論が指摘したような差別に対抗する側面が含まれることを指摘する論はない。再び一般化して言えば、外部から抑圧を受けるエスニック・コミュニティが反差別の集合的アイデンティティを形成させる場としての機能を持ち得ることを示した点に、本論の理論的貢献があるといえるだろう。

本研究の結果が差別問題の改善という実践的課題に対してもつインプリケーションについても述べたい。ある社会がその内部に存在する差別問題に取り組む際の具体的課題のひとつに、差別に対して異議を申し立てる主体をいかに（教育制度などを通じて）育成していくかという課題がある²⁵。仮にそれが集合的な社会運動として展開されずとも、本研究のリアクションサーベイが想定したようなミクロな個人間の相互作用状況において差別に對しいちいちNOを突き付ける実践の絶対数が増えれば、社会はより健全なものになっていくように思われる。その意味で、朝鮮学校が築いてきた教育実践にはみるべき点が多い。これに類する実践が、マジョリティ社会の側から積極的になされるべきだろう。

ここで筆者が想起するのは、2018年にインターネット上にアップロードされた一つの動画である。ニューヨークの混雑した地下鉄車内で、白人女性とアジア系女性がなにやら揉めている。周囲の乗客は二人の様子に注意を向けつつも、取り立てて仲裁に入る様子はない。しかし、白人女性がアジア系女性に人種差別の言葉を発した途端、それまで静観していた乗客たちが一斉に白人女性に対して抗議の声を上げる。反差別の規範が社会に十分に浸透した結果みられる光景だといえ、日本の現状とはかなり異なっているといえるだろう。

最後に、次なる研究のため、本研究で十分に検討できなかったいくつかの論点を今後の課題として記しておきたい。

第一に、朝鮮学校在学経験者としての集合的アイデンティティは、人生のどの段階において、どれほどの期間学校に属していれば形成されるのかという疑問である。ヘイトスピーチに対して積極的態度を示した調査対象者は、幼少期から中学校卒業まで、最短でも9年間朝鮮学校在学した経歴をもっている（表1）。この点に関連して、朝鮮学校の長い歴史において、成員が差別に対する集団の用語法をより獲得しやすい時代、換言すれば、成員が集合的アイデンティティをより強固に形成させる時代があったのかも気になる。今回の調査対象者は、共和国政府による拉致問題が発覚した時期や高校無償化制度が開始された時期にちょうど在学していた世代である。朝鮮学校在学していた時代によって、形成されるアイデンティティに差異は生じるのか。朝鮮学

²⁵ たとえば、2000年代から急激な移民人口の増加をみたスペインのバルセロナでは、社会に広がる移民への人種主義的な言説への対応として、市民のなかにこうした言説を否定する「反うわさエージェント」を養成する取り組みが進められてきた（上野, 2019）。

校における民族教育からの早期離脱者、あるいは異なる時代の在学経験者などを比較しつつ検討できれば、この点を明らかにすることができるだろう。

第二に、差別に積極的態度をとる朝鮮学校の集合的アイデンティティがどれほど持続するのかという問題がある。人生において、人はいくつもの集団を渡り歩くものである。ストラウスの議論に沿えば、人生の折々に形成された複数の集合的アイデンティティの統合として、パーソナル・アイデンティティがある（山口, 2007:160）。そして、ある状況下における個人による特定の対象の名づけ方は、パーソナル・アイデンティティ内部でそれらのどの集合的アイデンティティがより大きな規定力をもつかに依存する²⁶。本研究の調査対象となった朝鮮学校在学経験者は20代であり、学校を卒業してから10年も経っていない。時間の経過とともに朝鮮学校の集合的アイデンティティは薄らいでいくのか、あるいは個人内部で存在感を示し続けるのか。この点も論点として残る。

第三に、本論の分析は、朝鮮学校において教員と学生が教室で向かい合い教える／教わるフォーマルな場において差別問題についての知識や行動規範の伝承がなされることを主張するものであるが、調査で確認された差別への積極的態度の形成に、学校内部における「特別授業」以外の形態の諸活動（たとえばフォーマルな形態をとらない成員間のインフォーマルな関係性における相互行為など）もまた影響している可能性がある。こうした諸活動の内実を差別との関連で分析することで、朝鮮学校という場についてのより深い理解が得られるかもしれない。

第四に、本研究では在日コリアンによるヘイトスピーチへの積極的態度の背後に朝鮮学校在学経験があることを結論として主張するが、質的研究によって導き出したこの説を、量的研究によって検証する作業が残されている。在日コリアンへの量的調査は様々な理由から難しいとされてきたが、近年では例えば朝鮮奨学会という民族団体が社会学者と共同で実施した量的調査の試みがある（朝鮮奨学会, 2021）。既存の民族学校や民族団体からの協力を得つつ現代の在日コリアンへの大規模調査が実現できれば、ここに記した課題の検討も視野に入ってくるだろう。

第五に、本研究ではヘイトスピーチへの態度を左右する変数として在日コリアンの学校経験を重視した。しかし、ヘイトスピーチへの態度を規定する要因はその他にも考えられる。本論が学校を取り上げたように、例えば生育地域や出身家族の特徴といった要因がもつ効果について分析を行なうこともできるだろう。また、ヘイトスピーチへの認識や態度のジェンダー分析も重要な作業となろう。これらの要因と差別との関連を分析することは本論ではできなかったため、残された課題として言及しておきたい。

利益相反について

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

参考文献

- Leets, Laura. 2002. "Experiencing Hate Speech: Perceptions and Responses to Anti-Semitism and Antigay Speech." *Journal of Social Issues*, Vol.58, No.2: 341-361.

²⁶ この点については、Strauss (1997[1959]:121,125=2001:149,154) も参照。

- Pettigrew, Thomas F., Fredrickson, George M., Knobel, Dale T., Glazer, Nathan and Ueda, Reed. 1986. *Prejudice*. Belknap Press.
- Strauss, A. L. 1997[1959]. *Mirrors and Masks*. Transaction Publishers (= 2001. 片桐雅隆監訳『鏡と仮面』世界思想社).
- 青慶鎬 2013年「在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様性に関する調査研究:日本学校在學生と朝鮮学校在學生の比較を中心に」『多言語多文化:実践と研究』第5号:100-120.
- 朝鮮奨学会 2021年「韓国人・朝鮮人生徒学生の嫌がらせ体験に関する意識調査」『セフルム』第27号.
- 樋口直人 2014年『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学—』名古屋大学出版会.
- ヒューマンライツナウ 2014年「在日コリアンに対するヘイトスピーチ被害実態調査報告書」https://hrn.or.jp/activity_statement/2105/ (2022年2月14日取得).
- 法務省人権擁護局 2016年「ヘイトスピーチに関する聞き取り調査 (全体版)」<https://www.moj.go.jp/content/001201160.pdf> (2022年2月14日取得).
- 人権教育啓発推進センター 2016年「ヘイトスピーチに関する実態調査報告書」法務省<https://www.moj.go.jp/content/001201158.pdf> (2022年2月14日取得).
- 川端浩平 2012年「二重の不可視化と日常的実践: 非集住的環境で生活する在日コリアンのフィードバックから」『社会学評論』第63巻 第2号: 203-219.
- 熊本理抄 2020年『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』解放出版社.
- 松岡瑛理 2016年「ヘイトスピーチに対抗する境界のマイノリティ——カウンター活動に加わる「在日」帰化者／ダブルへの聞き取り調査から——」『ソシオロジ』第60巻3号:59-76.
- 永吉希久子 2017年「日本の排外意識に関する研究動向と今後の展開可能性」『東北大学文学研究科研究年報』第66巻: 164-143.
- 中村一成 2014年『ルポ京都朝鮮学校襲撃事件——<ヘイトクライム>に抗して』岩波書店.
- 朴慧原 2016年「社会調査報告 韓国人ニューカマー若者にとっての「ヘイトスピーチ」」『関連社会科学』25:43-48.
- 宋基燦 2012年『「語られないもの」としての朝鮮学校—在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』岩波書店.
- 高史明 2015年『レイシズムを解剖する——在日コリアンへの偏見とインターネット』勁草書店.
- 多民族共生人権教育センター 2015年「生野区における「ヘイトスピーチ被害の実態調査」最終報告」.
- 外村大 2009年『在日朝鮮人社会の歴史学的研究—形成・構造・変容』緑蔭書房.
- 上野貴彦 2019年「移民をめぐる認識転換に向けた住民参加の拡大と継続——バルセロナ「反うわさ」にみる間文化主義と公共圏の再編」『移民政策研究』第11号:145-158.
- 山口健一 2007年「A. ストラウスにおけるアイデンティティの変容と持続性——パーソナルな行為者の行為とアイデンティティとの関係から——」『社会学年報』第36巻:149-169.

Review of Asian and Pacific Studies

Editor-in-Chief: Kensuke Takayasu

Editorial Committee: Mamoru Nagano, Masashi Kiyomi,

Yumiko Nakano, Tatsuya Fujii, Hiroshi Komatsu

Editorial Office: Hiroshi Teranishi, Tomoko Teranishi,

Mimiko Yokoyama, Yuri Kozasa, Kiho Aoki

Review of Asian and Pacific Studies is published once a year by Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University. The review invites papers and articles concerning broad spectra of social, economic and political problems as well as technology transfer and environmental protection in the Asia-Pacific region. Papers should be within 10,000 words in English or 24,000 characters in Japanese including tables, figures, bibliography and notes. Body text and endnotes should be double-spaced in A4-paper (or equivalent of this form) and should be submitted by e-mail to submission-caps@jc.seikei.ac.jp, and by mailing a copy to the editorial office. A 300-word abstract should be attached at the time of submission. After refereeing, the editorial office will notify the author(s) its final decision concerning publication within three months after receiving the paper. Responsibility concerning facts and views rests solely with the author(s), and not with the editors of the review. For details, please see the website of the Center:

<https://www.seikei.ac.jp/university/caps/publication/info.html>

編集後記

本号では「2021 年度アジア太平洋研究センター主催企画」の内容に基づいた原稿を 3 本掲載することができました。講演会開催時以降の情報も盛り込んでいただき、より充実した内容になっております。ご多忙の中、論稿をご執筆の上、何度も校正のチェックに応じてくださいました登壇者の方々に深く感謝申し上げます。

パイロット研究報告は 2 本となりました。コロナ禍によって研究計画に少なからず影響がありながらも、その成果を掲載でき嬉しく思います。人文科学から社会科学、そして自然科学までの幅広い分野の論文を掲載する点に本紀要の特色があると考えます。

さらに、本年度も学内外から積極的な論文の投稿をいただきました。投稿論文は査読を経て掲載されており、残念ながら不掲載となる論稿もあるのが実情です。しかし、査読者からのコメントを受け、修正を複数回繰り返した論文は確実にそのクオリティが上がっていると見受けられます。本誌の査読体制は学内外の専門家のお力添えによって成立しております。査読をお受けいただいた各位、そして刊行に至るまでご協力くださった関係者の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

アジア太平洋研究センター
主任研究員 小松 寛

2022 All rights reserved

Published by Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University
3-3-1 Kichijoji-kitamachi, Musashino-shi, Tokyo 180-8633, Japan
TEL: 0422-37-3549 FAX: 0422-37-3866
E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp
Printed and bound by Hobunsha Co., Ltd. Tokyo, Japan

Review of Asian and Pacific Studies

No. 47

2022

CONTENTS

[Special Issue]

Japanese Prime Ministers of the Heisei Era:

Portraits of the 16 LeadersAkio Watanabe
Noriko Akiyama
Taizo Miyagi
Kensuke Takayasu

Climate Security: Perspectives on Confronting the Climate Crisis.....Shinji Inada

Brazilian Democracy at a Crossroads:

Covid-19 and the Political Crisis under Bolsonaro Administration.....Gen Okada

[Pilot Project Reports]

What the Highway Remembers: Route 66 and America.....Toshifumi Miyawaki

Study of AC-AC converter for PMSM drives for air conditioners in AsiaSari Maekawa

[Peer-reviewed Article]

School Experience of Zainichi Korean and Attitudes toward Hate Speech:

The Collective Identity against Racism Formed in *Joseon-School*Kangryol Chung